埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第103集

熊谷市

北島遺跡

（第12・13地点）

スポーツ文化公園用地内埋蔵文化財発掘調査報告書

（Ⅲ）

1991

財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

北島遺跡遠景

第12地点　第２号住居跡出土遺物

序

北島遺跡は、埼玉県熊谷市上川上の妻沼低地に所在する古墳時代から奈良・平安時代にかけて営まれた集落跡です。周辺には、弥生時代中期の環濠集落である池上遺跡や、日本最古の「出挙」木簡が発見され話題となった小敷田遺跡など、数多くの重要な遺跡が知られています。

この地域に埼玉県がスポーツ文化公園を建設することになり、当地に所在する埋蔵文化財については当事業団が発掘調査を実施することになりました。

北島遺跡の発掘調査は、昭和60年度から当事業団によって調査が実施され、大きな成果があげられています。いままでに第１地点から第13地点の調査がおこなわれ、古墳時代後期から奈良・平安時代を中心とした、200軒を越す住居跡や多数の掘立柱建物跡などが発見されています。

今回、報告するのは第12・13地点部分です。第12地点では、いままでの調査では確認されていなかった古墳時代前期の集落跡が発見されました。壺、高坏、台付甕などの古式土師器が多量に出土し、この遺跡の形成時期や変遷過程を考えるうえで重要な資料を得ることができました。また、第13地点の調査では、土壙から鎌倉時代の板石塔婆とともに馬骨が発見され、板石塔婆の廃棄行為にかかわる貴重な資料を提供しています。

本書はこれらの成果をまとめたものでありますが、埋蔵文化財の保護に関する資料として、また学術研究の基礎資料として広くご活用いただければ幸いに存じます。

刊行に当たり、発掘調査に関する調整に尽力していただきました埼玉県教育局指導部文化財保護課をはじめ、発掘調査から本書の刊行にいたるまでご協力をいただきました埼玉県住宅都市部公園緑地課、同北部公園建設事務所、及び熊谷市教育委員会、並びに地元関係者各位に深く感謝申し上げます。

平成３年３月

財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理事長　荒井修二

例　　言

1　本書は、埼玉県熊谷市上川上字東317－78番地他に所在する北島遺跡第12地点、及び字会下後404番地他に所在する北島遺跡第13地点の報告書である。

文化庁指示通知は平成元年12月5日付け委保第5－1961号である。

2　発掘調査はスポーツ文化公園建設事業に伴うものであり、埼玉県教育局文化財保護課が調整し、埼玉県の委託により、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。

3　発掘調査は、平成元年10月1日から平成2年3月31日まで実施した。整理作業は、平成2年12月1日から平成3年3月31日まで実施した。なお、発掘調査・整理作業の組織は2ページに示した。

4　分析・鑑定については下記へ委託した。

樹種同定　第四紀古植物研究会、動物遺体　吉田健一（埼玉県立自然史博物館）

5　本書の執筆は下記の者が行った。

第Ⅰ章第1項　文化財保護課、第Ⅴ章第1項　能城修一、　鈴木三男、

第Ⅴ章第2項　吉田健一、その他については大谷 徹が行った。

6　図版作成、写真撮影は下記の者が行った。

図版作成　大谷 徹、発掘調査撮影　中村倉司・大谷 徹、遺物撮影　大谷 徹

7　本書の編集は、資料部資料整理第2課の大谷 徹が行った。

8　本書にかかる資料は、平成3年度以降埼玉県立埋蔵文化財センターが管理・保管する。

9　本書の作成にあたり、下記の方々から御教示、御協力を賜った。（敬称略）

金子正之（熊谷市教育委員会）、笹森紀己子（大宮市立博物館）

凡　　例

1　本書の挿図における指示は次のとおりである。

・X・Yによる座標表示は国家標準直角座標第IX系に基づく座標値を表し、方位はすべて座標北を示す。

・挿図の縮尺は、住居跡1/60、カマド1/30、掘立柱建物跡1/60、溝跡1/60、井戸跡1/60、土壙1/80、土器1/4、石製品他1/3を原則とした。

2　土器観察表の凡例は以下のとおりである。

・法量の（　）内の数値は推定値であり、単位はcmである。

・胎土は、A 白色粒子、B 黒色粒子、C 赤色粒子、D 雲母、E 片岩、F 白色針状物質、G その他を示す。砂粒は、細砂 径1.0mm以下の砂粒、粗砂 径1.0～2.0mmの砂粒、小礫 径2.0mm以上を基準とした。

・色調は、『新版標準土色帖』（農林省水産技術会議事務局監修1976）を参考とした。

目　　次

巻頭図版
序
例　言
凡　例
目　次

Ⅰ．調査の概要 …… 1
　1．発掘調査に至る経過 …… 1
　2．発掘調査と報告書刊行事業の組織 …… 2
　3．調査の経過と方法 …… 2

Ⅱ．立地と歴史的環境 …… 3

Ⅲ．北島遺跡の概観 …… 6

Ⅳ．遺構と遺物 …… 11
　1．第12地点 …… 11
　　a．住居跡 …… 12
　　b．掘立柱建物跡 …… 39
　　c．溝　跡 …… 40
　　d．井戸跡 …… 54
　　e．土　壙 …… 54
　　f．グリッド出土遺物 …… 64
　2．第13地点 …… 69
　　a．掘立柱建物跡 …… 73
　　b．溝　跡 …… 75
　　c．井戸跡 …… 89
　　d．土　壙 …… 89
　　e．グリッド出土遺物 …… 95

Ⅴ．結　語 …… 97

Ⅵ．附　編 …… 100
　1．第12・13地点から出土した木材の樹種 …… 100
　2．第13地点　第26号溝跡出土の人骨について …… 104

挿図目次

第1図　埼玉県の地形図 …… 3
第2図　周辺の遺跡 …… 5
第3図　北島遺跡調査地点位置図 …… 7
第4図　北島遺跡第12地点全測図 …… 9
第5図　古墳時代前期の遺構分布図 …… 11
第6図　第1号住居跡 …… 12
第7図　第1号住居跡出土遺物 …… 13
第8図　第2・3号住居跡 …… 14
第9図　第2・3号住居跡遺物分布図 …… 15
第10図　第2号住居跡出土遺物（1） …… 16
第11図　第2号住居跡出土遺物（2） …… 17
第12図　第3号住居跡出土遺物 …… 20
第13図　第4号住居跡 …… 21
第14図　第4号住居跡出土遺物 …… 21
第15図　第5号住居跡 …… 22
第16図　第5号住居跡出土遺物 …… 23
第17図　第6号住居跡出土遺物 …… 23
第18図　第6・7号住居跡 …… 24
第19図　第7号住居跡　炭化材、焼土分布図 25
第20図　第7号住居跡出土遺物 …… 26
第21図　第8号住居跡 …… 27
第22図　第8号住居跡出土遺物 …… 28
第23図　第9号住居跡 …… 28
第24図　第9号住居跡出土遺物 …… 29
第25図　第10号住居跡 …… 30
第26図　第11号住居跡出土遺物 …… 30
第27図　第11・13号住居跡 …… 31
第28図　第12号住居跡 …… 32
第29図　第12号住居跡出土遺物 …… 33
第30図　第14～18号住居跡 …… 34
第31図　第14・15・18号住居跡出土遺物 …… 35
第32図　第19・20号住居跡、第125号土壙 …… 36
第33図　第19号住居跡、第125号土壙
炭化材、焼土分布図 …… 37
第34図　第19号住居跡出土遺物 …… 37
第35図　第21号住居跡 …… 38
第36図　第21号住居跡出土遺物 …… 38
第37図　第1号掘立柱建物跡 …… 39
第38図　第2号掘立柱建物跡 …… 40
第39図　溝跡、土壙分布図（1） …… 41
第40図　溝跡、土壙分布図（2） …… 42
第41図　溝跡、土壙分布図（3） …… 43
第42図　溝跡、土壙分布図（4） …… 44
第43図　溝跡、土壙分布図（5） …… 45
第44図　第4・8号溝跡、第129号土壙 …… 46
第45図　第25号溝跡 …… 47
第46図　第25号溝跡出土遺物 …… 48
第47図　溝跡出土遺物（1） …… 50
第48図　溝跡出土遺物（2） …… 51
第49図　井戸跡、土壙（1） …… 55
第50図　土壙（2） …… 56
第51図　土壙（3） …… 57
第52図　土壙（4）、ピット …… 58
第53図　土壙出土遺物（1） …… 59
第54図　土壙出土遺物（2） …… 60
第55図　グリッド出土遺物 …… 64
第56図　弥生土器分布図 …… 66
第57図　弥生土器（1） …… 67
第58図　弥生土器（2） …… 68
第59図　第10・13地点掘立柱建物跡分布図 …… 69
第60図　第9・10・12・13地点位置図 …… 70
第61図　北島遺跡第13地点全測図 …… 71
第62図　第1号掘立柱建物跡出土遺物 …… 73
第63図　第1号掘立柱建物跡 …… 73
第64図　第2号掘立柱建物跡 …… 74
第65図　第3号掘立柱建物跡 …… 74
第66図　第1～3号溝跡、第1号土壙 …… 76
第67図　第4～12号溝跡、第2・3号土壙 …… 77

第68図　第1・3号溝跡出土遺物 …… 78
第69図　第13号溝跡出土遺物 …… 78
第70図　第1号井戸跡、第13号溝跡、第5号土壙　78
第71図　第14・15号溝跡、第6号土壙 …… 79
第72図　第17～19号溝跡、第7～11・19号土壙　80
第73図　第20・21号溝跡、第4号土壙 …… 81
第74図　第22～26号溝跡 …… 82
第75図　第28～32号溝跡 …… 83
第76図　第7・8・10・12号溝跡出土遺物　84
第77図　第24・31号溝跡出土遺物 …… 84
第78図　第27号溝跡 …… 86
第79図　第27号溝跡出土遺物 …… 87
第80図　第1号井戸跡出土遺物 …… 89
第81図　第7・8・19号土壙出土遺物 …… 90
第82図　第12～16号土壙 …… 91
第83図　第12・14・15号土壙出土遺物 …… 91
第84図　第17号土壙　古銭 …… 92
第85図　第17号土壙 …… 92
第86図　第18号土壙 …… 92
第87図　第18号土壙出土板石塔婆（1） …… 93
第88図　第18号土壙出土板石塔婆（2） …… 94
第89図　グリッド出土遺物 …… 96
第90図　北島遺跡周辺の古墳時代前期の遺跡　99

写真図版目次

図版扉　第12地点航空写真

第12地点

図版1　第12地点調査前・全景
図版2　第1・2・3号住居跡
図版3　第2号住居跡
図版4　第3号住居跡
図版5　第4・5号住居跡
図版6　第6・7号住居跡
図版7　第8・9号住居跡
図版8　第10・11・12・13号住居跡
図版9　第14・17・18号住居跡
図版10　第19・20・21号住居跡
図版11　第1・2号掘立柱建物跡
図版12　第8・25号溝跡
図版13　第2号井戸跡
　　土壙（1・6・54・129号）、ピット
図版14　第1・2号住居跡出土遺物
図版15　第2号住居跡出土遺物
図版16　第2号住居跡出土遺物
図版17　第3～5号住居跡出土遺物
図版18　第5～8号住居跡出土遺物
図版19　第12・19・21号住居跡
　　第25号溝跡出土遺物
図版20　溝跡、土壙出土遺物
図版21　土壙、グリッド出土遺物
図版22　弥生土器

第13地点

図版23　第13地点航空写真・全景
図版24　第1・2・3号掘立柱建物跡
図版25　溝跡（3・22～24・28～32号）
図版26　第27号溝跡
図版27　土壙（5・7・12～16号）
図版28　土壙（17～19号）
図版29　井戸跡、土壙、溝跡出土遺物

Ⅰ．調査の概要

1．発掘調査に至る経過

熊谷市に建設の進められているスポーツ文化公園（仮称）は、県民の健康でかつ快適なうるおいのある都市的環境を確保する目的で、地域文化の振興、スポーツ、レクリエーションの活動の拠点としての整備を図っている。

こうした開発事業に対して、文化財保護課は関係開発部局と文化財保護のための調整を実施してきているところである。

公園緑地課は、スポーツ文化公園（仮称）の建設の実施に先立ち昭和57年７月10日付け公緑第88号で文化財の所在およびその取り扱いについての照会が文化財保護課長にあった。文化財保護課は昭和57年７月10日付け教文第160号で、概ね次のような回答をした。

１．中条条里が存在する。

２．他にも埋蔵文化財包蔵地の存在が予想されるので、試掘調査を実施すること。

その後、公園緑地課はこの回答を受けて、昭和59年７月21日付け公緑第258号で試掘調査の実施依頼が文化財保護課にあった。文化財保護課は熊谷市教育委員会と試掘調査の実施について協議し、試掘調査を熊谷市教育委員会に委託することにした。試掘調査は昭和59・60年に実施された。

文化財保護課は、昭和60年８月２日付け熊教社発第593号で回答のあった試掘調査の結果をもとに、昭和60年10月22日に文化財保護課、北部公園建設事務所、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団と、この段階にはさいたま博覧会の開催地が、スポーツ文化公園（仮称）に決定された関係から、それを担当する政策審議室、産業政策課も加わり調整会議が開催された。この会議において、文化財保護課は試掘調査にもとづく回答の説明をおこない、産業政策課はさいたま博覧会の建物配置、工法等の原案説明がなされた。スポーツ文化公園（仮称）の建設とともに、さいたま博覧会の開催という二つの事業に伴う埋蔵文化財の保護という局面を迎えた。文化財保護課は何度も調整会議を開催し、両者の工事の整合性を持たせるべく調整するとともに関係部局に協力を依頼し、現状保存の範囲をより多く確保できるように努めた。

文化財保護課はこうした調整の結果、止むを得ず発掘調査する部分について、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団に発掘調査を依頼した。

その後、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団から文化財保護法にもとづき、文化庁長官あてに埋蔵文化財発掘調査届が提出され、平成元年10月から調査が開始された。

文化庁からは平成元年12月５日付け委保第５－1961号をもって調査届を受理する旨の通知があった。

（文化財保護課）

2．発掘調査と報告書刊行事業の組織

主体者　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

a．発掘調査（平成元年度）

理事長	荒井修二
副理事長	百瀬陽二
常務理事兼管理部長	古市芳之

庶務経理

管理課長	関野栄一
主事	江田和美
主事	岡野美智子
主事	本庄朗人
主事	斉藤勝秀

発掘

理事兼調査研究部長	古川國男
調査研究副部長	塩野博
調査研究第3課長	宮崎朝雄
主任調査員	中村倉司
調査員	大谷徹

．報告書作成事業（平成2年度）

理事長	荒井修二
副理事長	早川智明
常務理事兼管理部長	古市芳之

庶務経理

庶務課長	高田弘義
主査	松本晋
主事	長滝美智子
経理課長	関野栄一
主任	江田和美
主事	本庄朗人
主事	斉藤勝秀
主事	菊地久

整理

資料部長	栗原文蔵
資料部副部長兼資料整理第1課長	増田逸朗
資料整理第2課長	石岡憲雄
調査員	大谷徹

3．調査の経過と方法

北島遺跡第12・13地点の調査は、平成元年10月1日から平成2年3月31日にかけて実施された。調査対象面積は、2,900m²である。10月上旬、北部公園建設事務所担当者と現地において調査対象範囲の確認及び調査工程の打ち合わせをおこなった。今回の調査対象地は、公園用地内の東端部に位置する現道の拡幅及び用水路敷設工事と、公園用地南端部の用水路敷設工事に伴う二箇所の事前調査である。工事の工程上、前者から調査を開始してほしいとの要請があったため、前者を第12地点、後者を第13地点と仮称して調査を開始した。

第12地点は、総長約310m、幅約4mの南北に細長い調査区である。11月上旬に調査区北端から表土除去作業を開始し、それと併行して遺構確認作業をおこなった。その結果、古墳時代前期を中心とする竪穴住居跡21軒、掘立柱建物跡2棟、溝跡30条、井戸跡2基、土壙114基等の予想を上回る多数の遺構が検出された。航空写真撮影を2月9日に実施し、この地点の調査を終了した。

第13地点は、昭和63年度に調査が実施された第10地点の南側に隣接する、東西に細長い調査区である。第12地点の調査が終了した2月中旬から本調査に着手し、掘立柱建物跡3棟、溝跡31条、井戸跡1基、土壙19基を検出した。航空写真撮影を3月28日に実施し、すべての調査を終了した。

なお、調査グリッドの設定は、当事業団が最初に調査を開始した時点に公園予定地内全体を網羅するように設定した9×9mのグリッド呼称に従った。グリッドは、国家標準直角座標第IX系に基づき、グリッドの北西コーナー座標値X＝18,640、Y＝－38,920を原点としている。

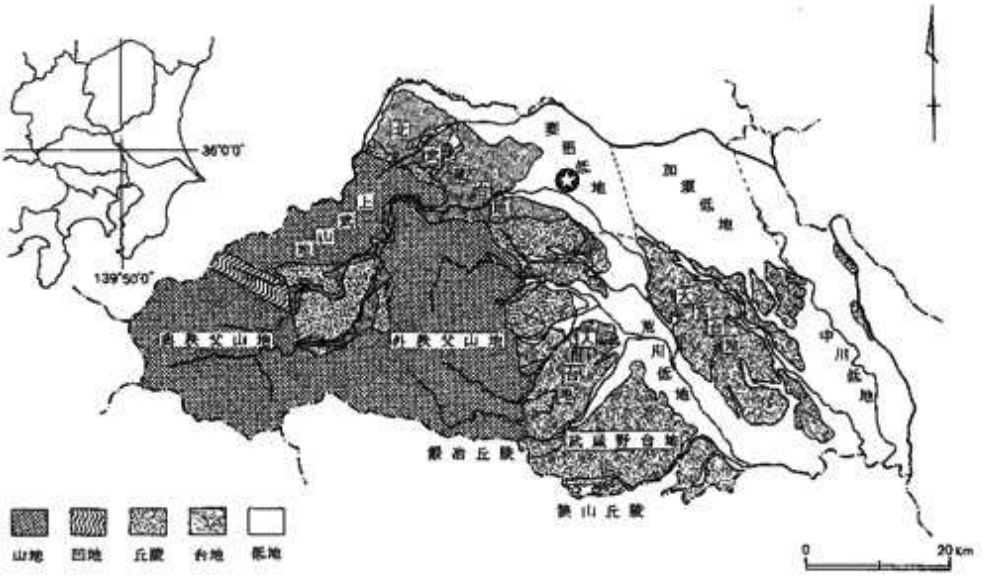
II. 立地と歴史的環境

北島遺跡は、埼玉県北部の熊谷市大字上川上字北島、町田他に所在する弥生時代から平安時代にかけて営まれた大規模な集落跡である。

熊谷市北東部の上中条・大塚・今井一帯の妻沼低地には中条遺跡群が広がっている。北島遺跡は、中条遺跡群を構成する遺跡の一つで、その南半を占めるものである。遺跡の所在する熊谷市域は地形的には、荒川によって形成された扇状地上に存在するもので、北島遺跡をはじめとする中条遺跡群は、この扇状地の扇端部付近に位置している。中条遺跡群周辺には荒川の旧河道と思われる痕跡がよく残り、複雑に発達した自然堤防が形成されている。一方、扇状地の扇端にみられる湧水地が遺跡の西側地域に存在し、自然堤防地形に加えて、水利面でも自然的好条件を兼ね備えることによって、長期的な集落が形成されたものと推測されている。

近年、熊谷バイパスや国道125号線関係の発掘調査が増加し、周辺部の低湿地に立地する遺跡の様相が明らかにされ、大きな成果があげられている。

弥生時代の遺跡としては、弥生時代中期の環濠集落である池上遺跡や関東地方では最も古い時期の須和田期の方形周溝墓が検出された小敷田遺跡など当該期の研究の上で、極めて重要な遺跡が発見されている。これらの中核的な集落の周辺部に形成された小規模な集落として、天神遺跡、北島遺跡第2地点、平戸遺跡などが所在している。今までの調査では弥生時代後期の良好な資料は発見されていないが、北島遺跡第9地点、東沢遺跡、小敷田遺跡、池守遺跡などで吉ケ谷式土器や前野町式土器が少量出土しており、当該期の集落の存在が予想される。



第1図　埼玉県の地形図

古墳時代前期の遺跡は、北島遺跡第５・12地点、天神遺跡、雷電遺跡、権現山遺跡、東沢遺跡、池上遺跡、小敷田遺跡、池守遺跡などが知られている。特に小敷田遺跡からは畿内地方や東海地方などの外来系土器群が数多く出土しているほか、当該期の方形周溝墓群が検出されている。また東沢・小敷田遺跡では河川跡から鍬、鋤など多量の木製農工具が出土し注目されている。

古墳時代中期の様相は他の時期に比べやや不明な点が多いが、北島遺跡第４地点、権現山遺跡、常光院東遺跡、女塚古墳群南周辺部などで当該期の遺構、遺物が検出されている。北島遺跡第４地点では和泉期後半の住居跡から須恵器の甕を模倣した土師器小型壺や袋状鉄斧が出土している。また権現山遺跡では出現期のカマドをもつ住居跡が確認され、把手付大型甑などが出土している。

古墳時代後期の集落跡は北島遺跡、中島遺跡、光屋敷遺跡などで確認されている。調査の結果６世紀末葉以降は北島遺跡が最も充実した内容を誇っている。第７地点からは多量の黒色土器が出土しているほか、比企・入間地方に分布の中心をもつ「比企型」の坏なども搬入されている。

周辺には集落跡のほかに多数の古墳が分布している。北島遺跡の北側には鎧塚古墳、女塚古墳群、権現山古墳、大塚古墳などからなる中条古墳群が位置し、南西には肥塚古墳群が所在している。

奈良・平安時代の遺跡は、中条遺跡群では天神遺跡、中島遺跡、常光院東遺跡、光屋敷遺跡などの各所で確認されているが、いずれも小規模なもので、当該地域の中では北島遺跡がその内容から中心的な役割を果たしていたことが推察される。周辺には７世紀末から８世紀初頭頃の稲の貸付けを記した「出挙」木簡が発見された小敷田遺跡や、９世紀代の整然とした掘立柱建物群が確認された池上遺跡など重要な遺跡が所在している。また周辺の低湿地一帯は中条条里、小敷田条里、南河原条里と呼ばれる条里制の遺構を今なお残している。

周辺には中条氏に関連する中世館跡が数多く確認されている。調査の実施されたものとして中条氏館跡、光屋敷遺跡、常光院東遺跡、権現山遺跡などがある。北島遺跡でも第３・４地点から15世紀後半の堀跡が検出されている。また第13地点では馬骨と板石塔婆が土壙から出土している。

参考文献

並木　隆 1979 『中条条里遺跡調査報告書Ⅰ』　熊谷市教育委員会

寺社下博 1980 『中条遺跡群・中島遺跡』　熊谷市教育委員会

寺社下博 1981 『鎧塚古墳』　熊谷市教育委員会

寺社下博 1982 『中条遺跡群Ⅲ　権現山古墳・常光院東遺跡』　熊谷市教育委員会

寺社下博 1983 『めずか』　熊谷市教育委員会

寺社下博 1984 『中条遺跡群　昭和52年度～昭和56年度調査遺跡概略
昭和58年度調査・光屋敷遺跡遺構』　熊谷市教育委員会

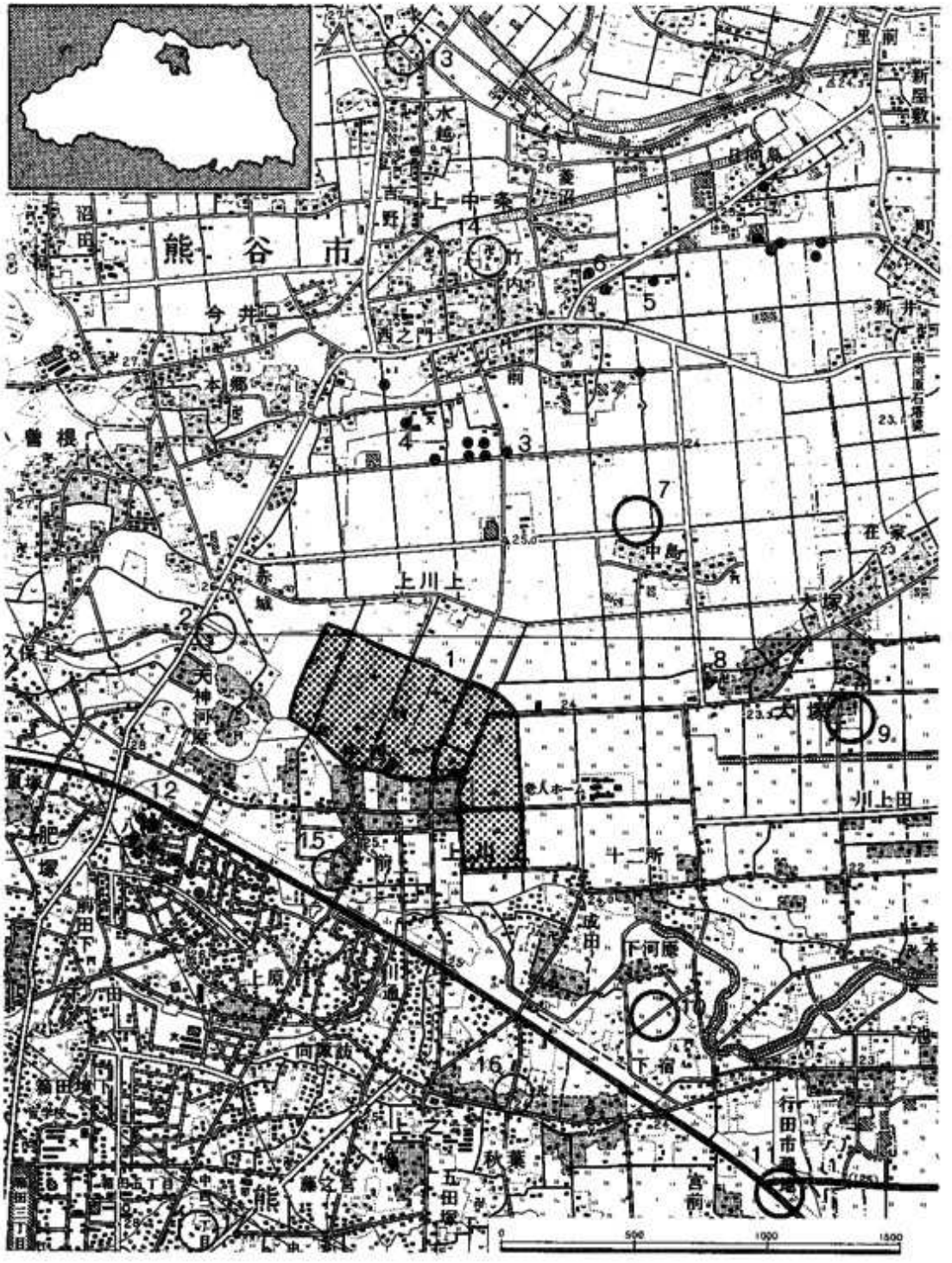
中島　宏・杉崎茂樹 1984 『池守・池上』　埼玉県教育委員会

金子正之 1988 『天神遺跡』熊谷市教育委員会

浅野晴樹 1989 『北島遺跡』　埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第81集

川口　潤 1989 『光屋敷遺跡』　埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第82集

中村倉司 1990 『北島遺跡（第9・10・11 地点）』　埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第88集



1．北島遺跡　2．天神遺跡　3．鎧塚古墳　4．女塚古墳　5．中条古墳群　6．櫛現山古墳　7．中島遺跡　8．大塚古墳　9．東沢遺跡　10．熊谷市No.59遺跡　11．池上遺跡　12．肥塚古墳群　13．光屋敷遺跡　14．中条氏館跡　15．河上氏館跡　16．成田氏館跡　17．箱田氏館跡

第2図　周辺の遺跡

Ⅲ．北島遺跡の概観

北島遺跡は、荒川の支流と考えられる旧河川によって形成された自然堤防上に立地する弥生時代から平安時代にかけて営まれた大規模な集落跡である。スポーツ文化公園用地面積の50ヘクタールのほぼ全域に遺跡の分布がみられ、遺跡全体の面積は少なくとも670,000m²以上の広がりをもつものと予想される。発掘調査は、今回の調査地点を含め大小13箇所の調査が昭和60年以降、継続的に実施され、各調査地点とも多数の遺構、遺物が検出されている。

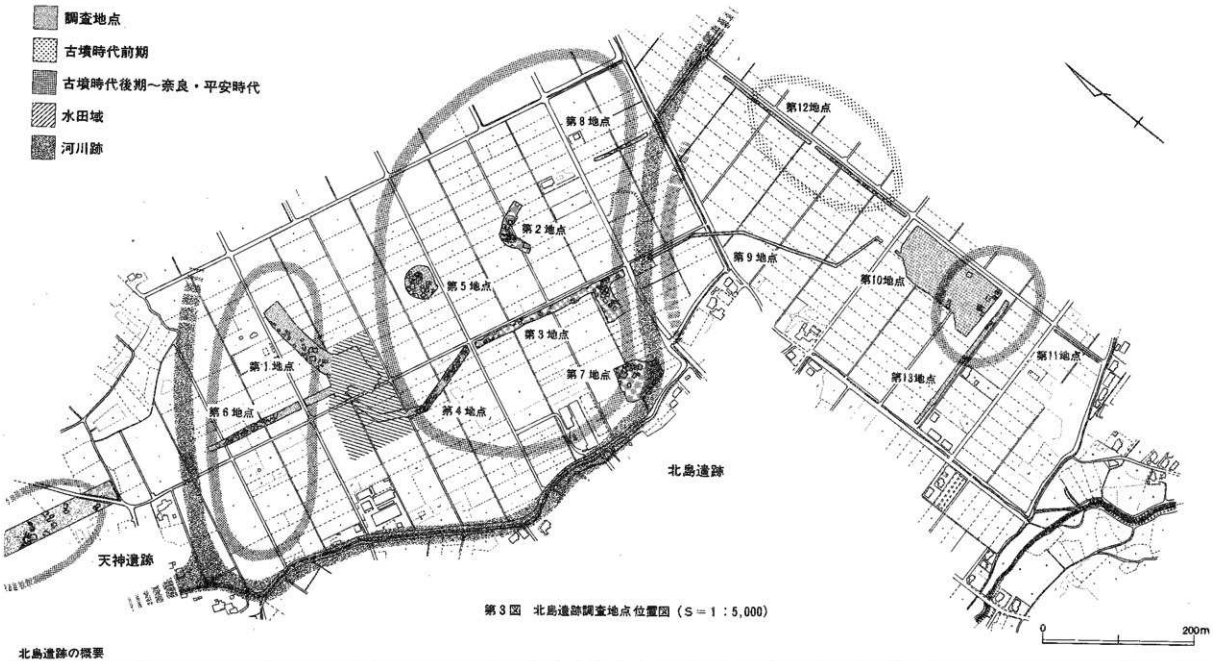
部分的な調査が多いため遺跡全体の旧地形を復元することは難しいが、遺跡の南側には現在の用水にほぼ重なるように東流する河川跡が検出されている。この河川跡は第７地点付近で北へ流れを変えることが第８・９地点の調査で確認されており、遺跡の立地に極めて大きな役割を果していたことが指摘されている。さらにスポーツ文化公園の取り付け道路部分で熊谷市教育委員会が調査をおこなった天神遺跡との間にも北流する旧河川の存在が確認されている。このように集落の広がりは、旧河川によって第１～８地点からなる西側部分と、第９～13地点からなる東側部分に大きく分けられている。また西側部分の第１地点と第４地点の間には古代の水田域が広がっていることが確認されており、より複雑な地形、集落景観を呈している。

北島遺跡の形成時期については、遺構は検出されていないが、第12地点で弥生中期中葉から後期初頭頃の弥生土器がまとまって出土し、周辺部に当該期の集落の存在が予想されている。また過去の調査でも第２・10地点から中期後葉の櫛描文系土器が、第９地点から後期の吉ケ谷式土器が出土しており、小規模な集落が点在する状況がうかがわれる。おそらく遺跡の南東約２kmに位置する池上・小敷田遺跡などの大規模集落と密接な関連をもって出現した小集落の一つと考えられる。

古墳時代前期については、今までの調査では第５地点において住居跡１軒が確認されていたにすぎなかった。しかし、今回第12地点で五領期後半を中心とする20軒の住居跡が確認されたことから、この付近に当該期の集落が存在することが明らかとなった。このことから弥生時代から断続的ながらも小規模な集落が継続して営まれていたものと推定される。

次期の和泉期については、今のところ第４地点で和泉期後半の住居跡１軒が確認されているだけで、遺構の分布が全体に稀薄であることが推測されている。北島遺跡の北側に展開する中条遺跡群に、権現山遺跡などの当該期の比較的大規模な集落跡が存在していることから、居住域の中心が中条遺跡群へ移行したものと想定される。さらに６世紀前半代に入っても引き続き中条遺跡群を中心に集落が継続して営まれた状況が、鎧塚古墳や女塚古墳群の内容からもうかがうことができる。

このように北島遺跡における５世紀末から６世紀前半の様相は明確ではないが、６世紀後半以降は集落の規模が拡大し、広範囲に展開した状況が確認されている。特に６世紀後半から７世紀代にかけては第４・５地点を中心に多くの住居跡が検出され、第７地点からは大量の黒色土器や木製品が出土し注目されている。８世紀後半から９世紀代にかけては第２地点から第８地点付近に集落の中心が移動し、第２地点では９世紀代の大型の掘立柱建物や大型住居が検出されている。遺物には、「浄成」、「南家」などの墨書土器が出土しており、一般集落とは異なった側面がうかがわれる。

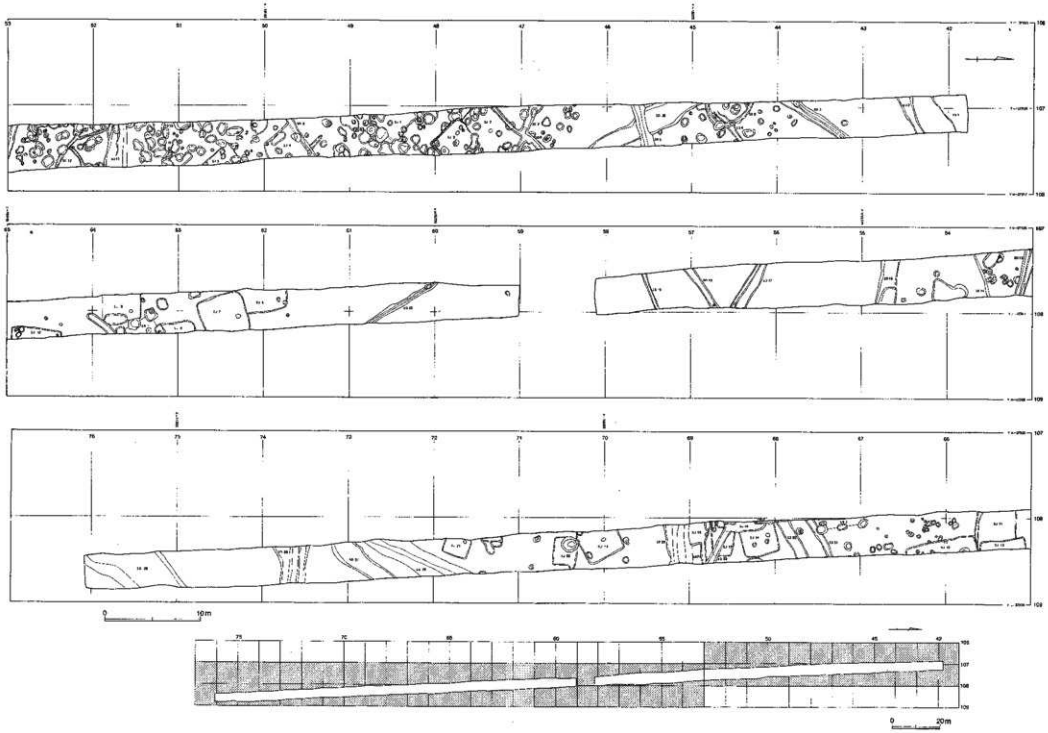


第3図　北島遺跡調査地点位置図（S＝1：5,000）

北島遺跡の概要

調査地点	調査期間	検出された主な遺構					主な出土遺物	時期	備考
		住居	掘立	溝	井戸	土壙			
第1地点	S60.11～S61. 3	21	9	17	5	24	土師器・須恵器・灰釉・鉄斧・桝形木製品	8～10C	水田跡
第2地点	S61. 4～S62. 1	9	13	24	2	13	土師器・須恵器・灰釉・墨書「中」・鉄斧	8～ 9C	大型建物
第3地点	S61. 4～S62. 1	54	1	65	9	34	土師器・須恵器・墨書・井筒	7～ 9C	中世館跡
第4地点	S61. 9～S62. 2	45	7	17	3	17	土師器・須恵器・灰釉・緑釉・漆椀	7～ 9C	中世館跡
第5地点	S61. 7～S61. 9	37	2	4	2	53	土師器・須恵器・円面硯・鐵	7～ 9C	瓦頷期住居
第6地点	S61. 9～S62. 2	29	6	10	5	38	土師器・須恵器	7～ 9C	墓壙
第7地点	S61.11～S62. 3	4	15	20	1	18	土師器・須恵器・墨書「浄成」、「太不西」・木器	7～ 8C	木器集中区

調査地点	調査期間	検出された主な遺構					主な出土遺物	時期	備考
		住居	掘立	溝	井戸	土壙			
第8地点	S62. 4～S62. 6	3	2	－	－	－	土師器・須恵器・墨書「寶」	9C	河川跡
第9地点	S63.11～H 1. 3	4	1	35	1	7	土師器・須恵器・墨書	7～ 9C	方ケ谷式土器
第10地点	S63.10～H 1. 3	2	8	35	－	15	土師器・須恵器・灰釉・緑釉・墨書「南家」、「田」	8～10C	墓壙群
第11地点	S63.11～S63.12	－	－	15	－	7	土師器・須恵器	8～ 9C	
第12地点	H.1.10～H 2. 1	21	2	30	2	114	土師器・須恵器・灰釉・緑釉・墨書「我」、「田万」	4～ 9C	瓦頷期集落
第13地点	H. 2. 2～H 2. 3	－	3	31	1	19	土師器・須恵器・灰釉・緑釉・板碑・馬骨	8～10C	中世土壙



第４図　北島遺跡第12地点全測図（Ｓ＝１：400）

Ⅳ．遺構と遺物

1．第12地点

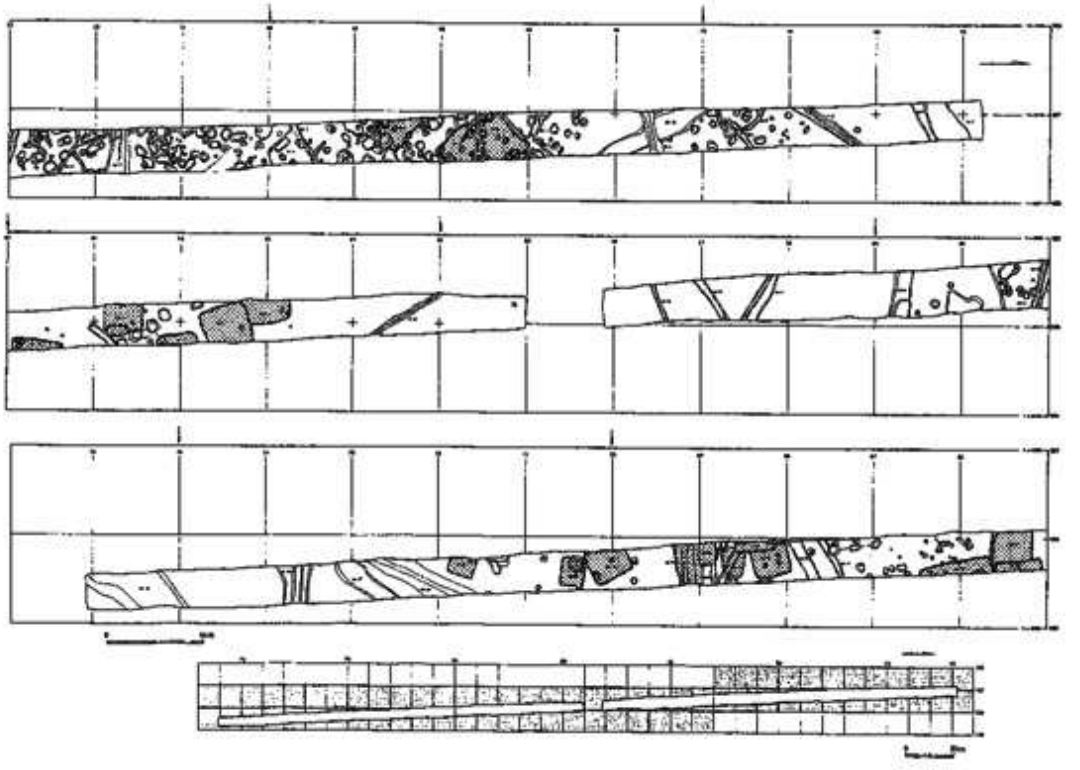
概　要

北島遺跡は、今までに第１地点から第11地点までの調査が実施され、その調査成果から古墳時代後期から平安時代を中心に営まれた大規模な集落であることが確認されている。

第12地点は、遺跡の東端部に位置する総長約310m、幅約４mのほぼ南北に走る細長い調査区である。グリッドは、（東西）106～109－（南北）41～77グリッドに位置する。部分的な調査ではあったが、竪穴住居跡21軒、掘立柱建物跡２棟、溝跡30条、井戸跡２基、土壙114基、ピット等の多数の遺構が検出された。

検出された住居跡の多くは、古墳時代前期に位置づけられるもので、調査区中央部の浅い埋没谷を挟んで南北の二群に大きく分れて分布している。今までの調査では検出例の少ない時期のものであり、当遺跡の変遷過程や形成時期を考えていく上で貴重な調査例と言える。

土遺物には、壺、坩、器台、甕、Ｓ字状口縁台付甕等が出土し、古墳時代前期後半の良好な資料が得られている。他に当該期に属する遺構としては、第25号溝跡が検出されている。

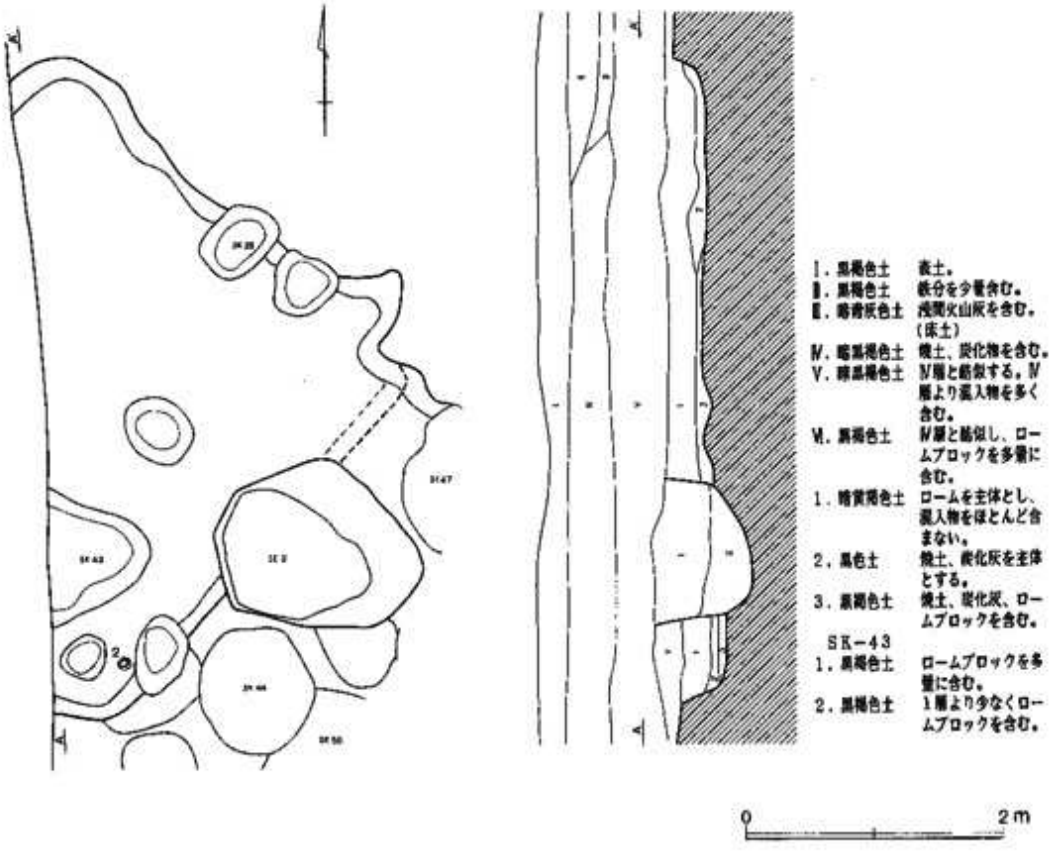


第５図　古墳時代前期の遺構分布図

a．住居跡（SJ）

第1号住居跡（第6図）

調査区北側の107－48グリッドに位置する。西側が調査区域外にかかるため、全体の3分の2ほどを調査したにすぎない。多数の土壙によって切られているため、平面プランは判然としないが、東西長3.85m、南北長3.7mのコーナーに丸みをもつ正方形プランと推定される。主軸方向は、N－

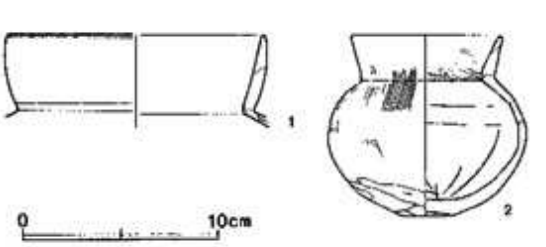


第6図　第1号住居跡（L＝23.80m）

第1号住居跡出土遺物（第7図）

番号	器種	大きさ(cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備　考
1	広口壺	口径　(13.1)	口縁部は内湾気味に立ち上がる。内外面とも丁寧に横撫でを施す。	A～D　細砂少量 焼成良好 灰白色	口縁部 40%　残存
2	小型壺	口径　7.6 最大径　10.2 器高　9.2	口縁部は「く」の字状に屈曲する。胴部はややつぶれた球形を呈し、底部は上げ底状。口縁部は内外面とも刷毛目の後、横撫で。胴部上半外面は縦刷毛後、丁寧に撫でを施す。内面は粘土紐痕が残る。胴部下位から底部にかけては箆削り後、撫でを施す。内面は丁寧に箆撫でを施す。	A～D　細砂少量 焼成良好 にぶい橙色	60%　残存

40°－Eである。床面は土壙との重複のため凹凸が目立ち、掘り込みは36cm前後である。覆土中には、焼土・炭化灰が多量に混入する。ピット・炉跡などは確認されなかった。遺物は広口壺の破片と小型壺を検出したにすぎない。小型壺は南西コーナーから出土しその傍らには白色粘土の塊がみられた。



第７図　第１号住居跡出土遺物

第２号住居跡（第８図）

調査区北側の107－47グリッドに位置し、南東側は第３号住居跡と重複している。重複関係は、土層断面及び遺物出土状況の観察から本住居の方が新しいことが判明した。多数の土壙と重複し、かつ北・東辺は第６・７号溝跡によって削平を受けているため平面形、規模などは不明である。わずかに南壁の一部を検出しただけで、その掘り込みは10cm前後と浅い。炉跡、貯蔵穴の位置関係や遺物の分布範囲から、主軸方向をN－45°－Eに採る長方形プランの住居と推定される。

床面は概ね平坦であるが、全体に軟らかく硬質面などは確認されなかった。柱穴はみられず、南東コーナーに貯蔵穴を確認しただけである。貯蔵穴は長径70cm、短径58cmの楕円形を呈し、深さは20cmを測る。炉跡は住居の中央付近に位置するものと推定され、長径44cm、短径34cmを測る。いわゆる地床炉で、火床面のみを確認した。また床面には南西から北東方向に走る噴砂がみられた。

本住居跡は、今回の調査では最も遺物量の多いもので、五領期終末の良好な一括資料が検出された。遺物は、主に炉跡周辺と貯蔵穴から出土している。

炉跡の北東側からは、S字状口縁台付甕と叩き目風の刷毛目を施す平底甕などの煮沸具を中心に小型壺、浅鉢、高坏、形骸化した小型器台などが出土している。いずれも床直の状態である。

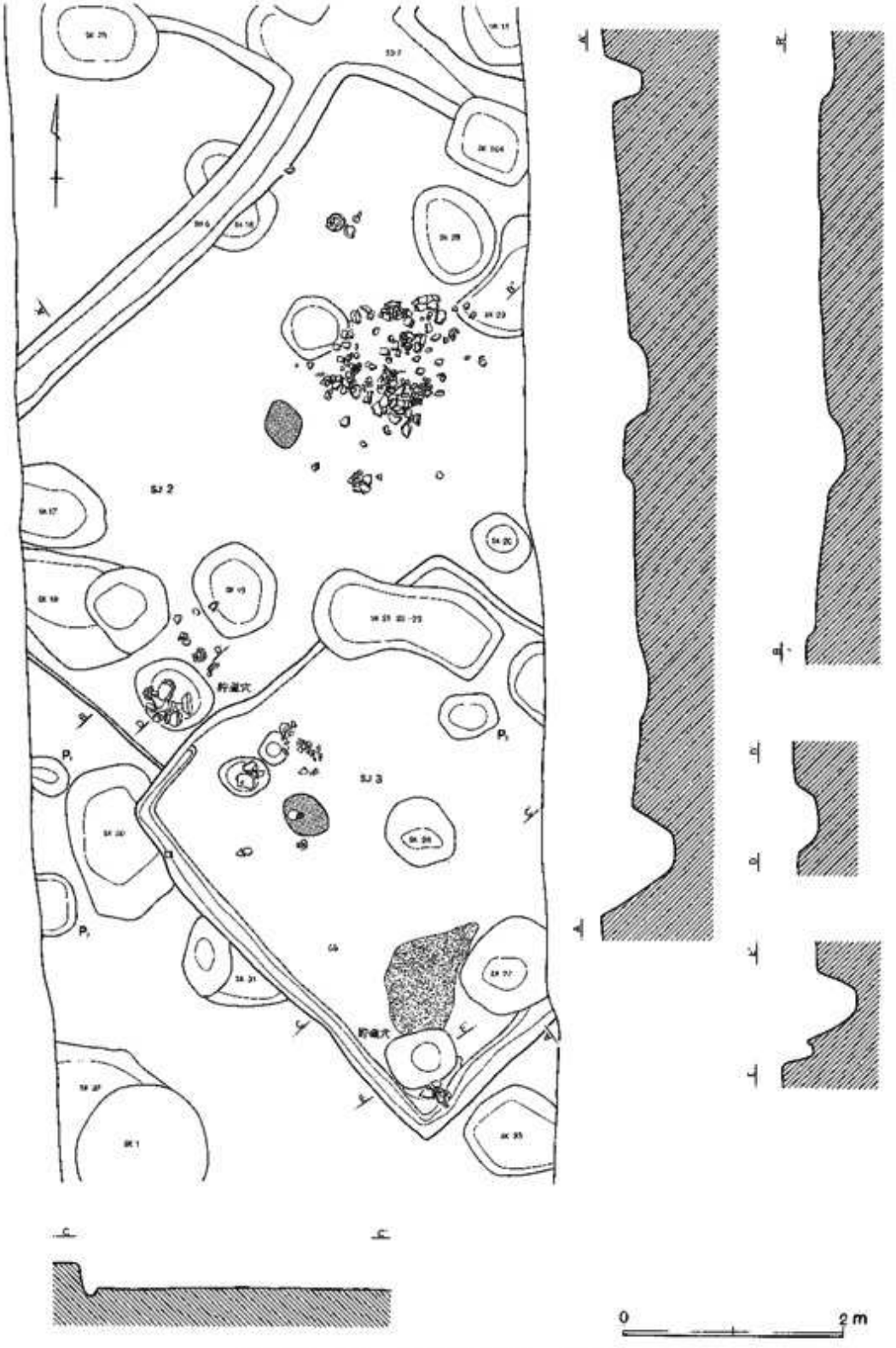
貯蔵穴の上面からは、３の小型壺と10・11の棒状の脚部をもつ高坏が出土し、その下面からは６の小型浅鉢と12の坏部外面に段をもち、柱状部のわずかに膨らむ高坏が層位的に出土している。

第３号住居跡（第８図）

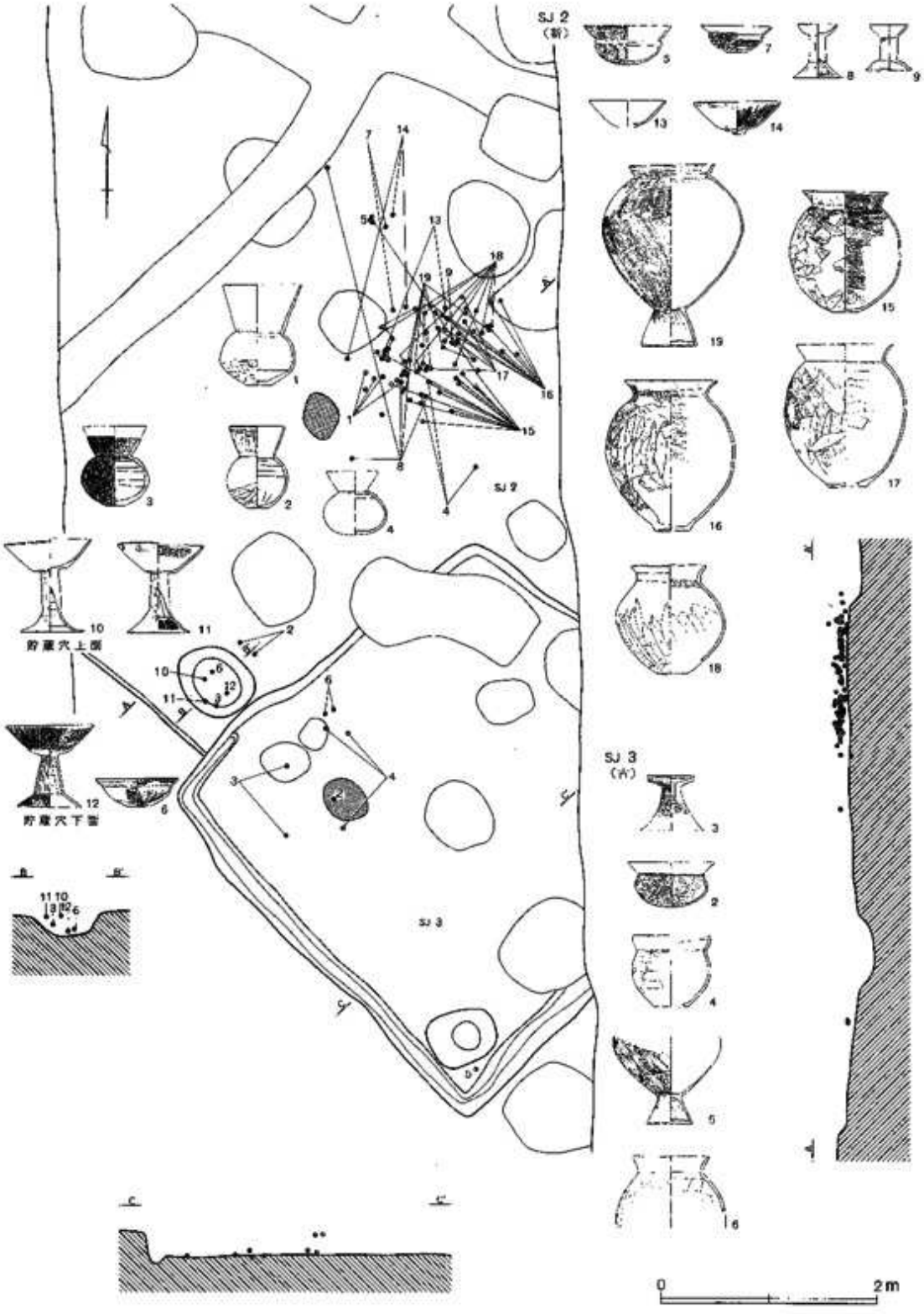
107－47・48グリッドに位置する。北側は第２号住居跡と重複し、新旧関係は本住居が古い。北東コーナーが調査区域外にのびるため、平面形、規模は不明であるが、東西長4.1m、南北長3.9mを測るほぼ正方形の小型住居と考えられる。主軸方向はN－42°－Wを示す。

床面は、遺存部分ではほぼ平坦であるが、多数の土壙と切り合うため凹凸が著しい。掘り込みは22cm前後で、第２号住居跡より若干低い。壁溝は北西コーナーから南壁にかけて部分的に巡らされ北、東壁際にはみられない。貯蔵穴は南西コーナーに位置し長径60cm、短径48cm、深さ46cmの楕円形を呈する。貯蔵穴周辺の床面には炭化材の分布がみられた。炉跡は北西コーナー寄りに位置し、長径44cm、短径34cmの楕円形を呈する地床炉である。なお床面には噴砂がみられた。

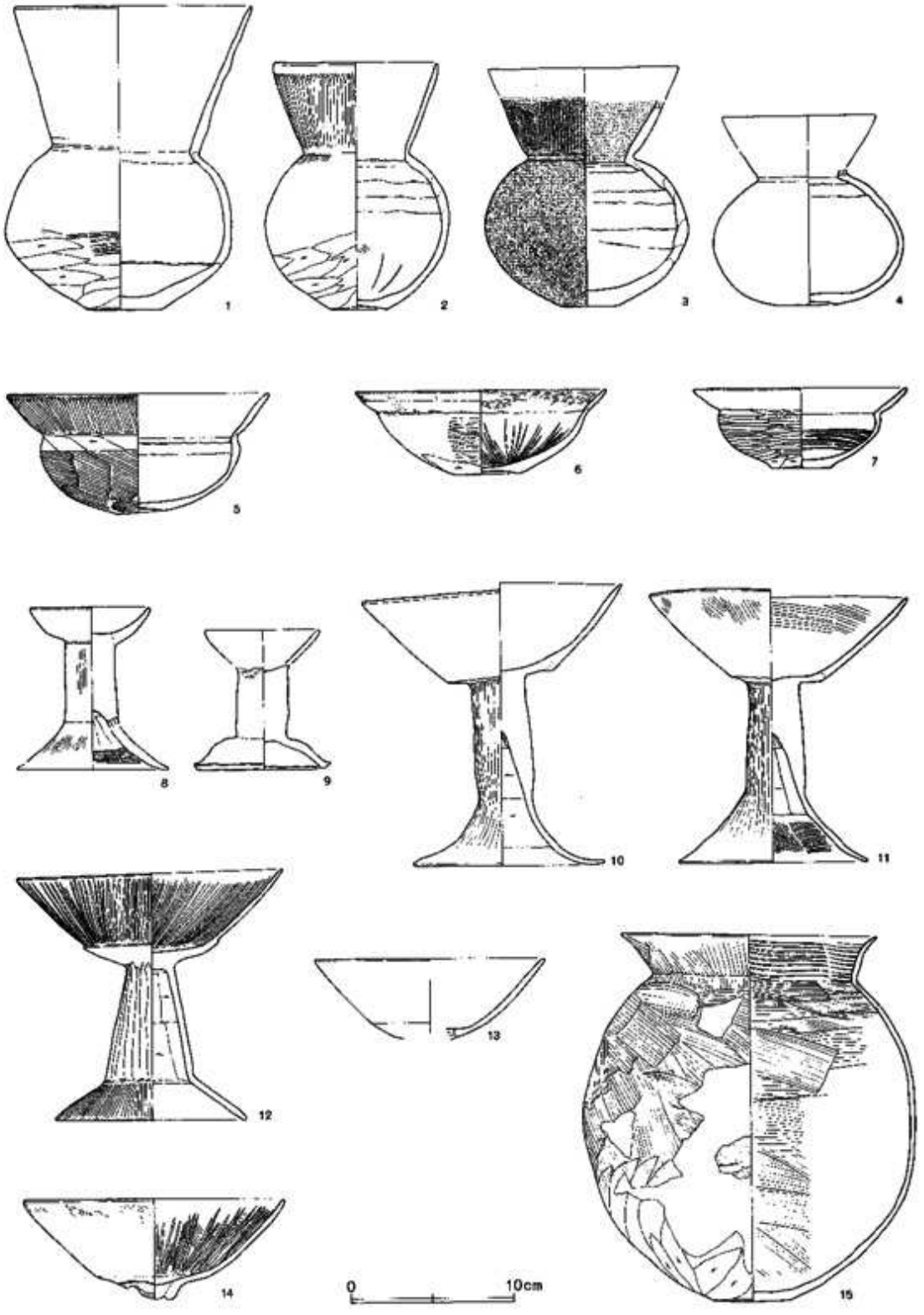
遺物は、２の赤彩された鉢が炉跡上面から、炉跡北側の小ピットから器台、小型甕、甕が出土した。また貯蔵穴の位置する南西コーナーの覆土中からS字状口縁台付甕が出土している。



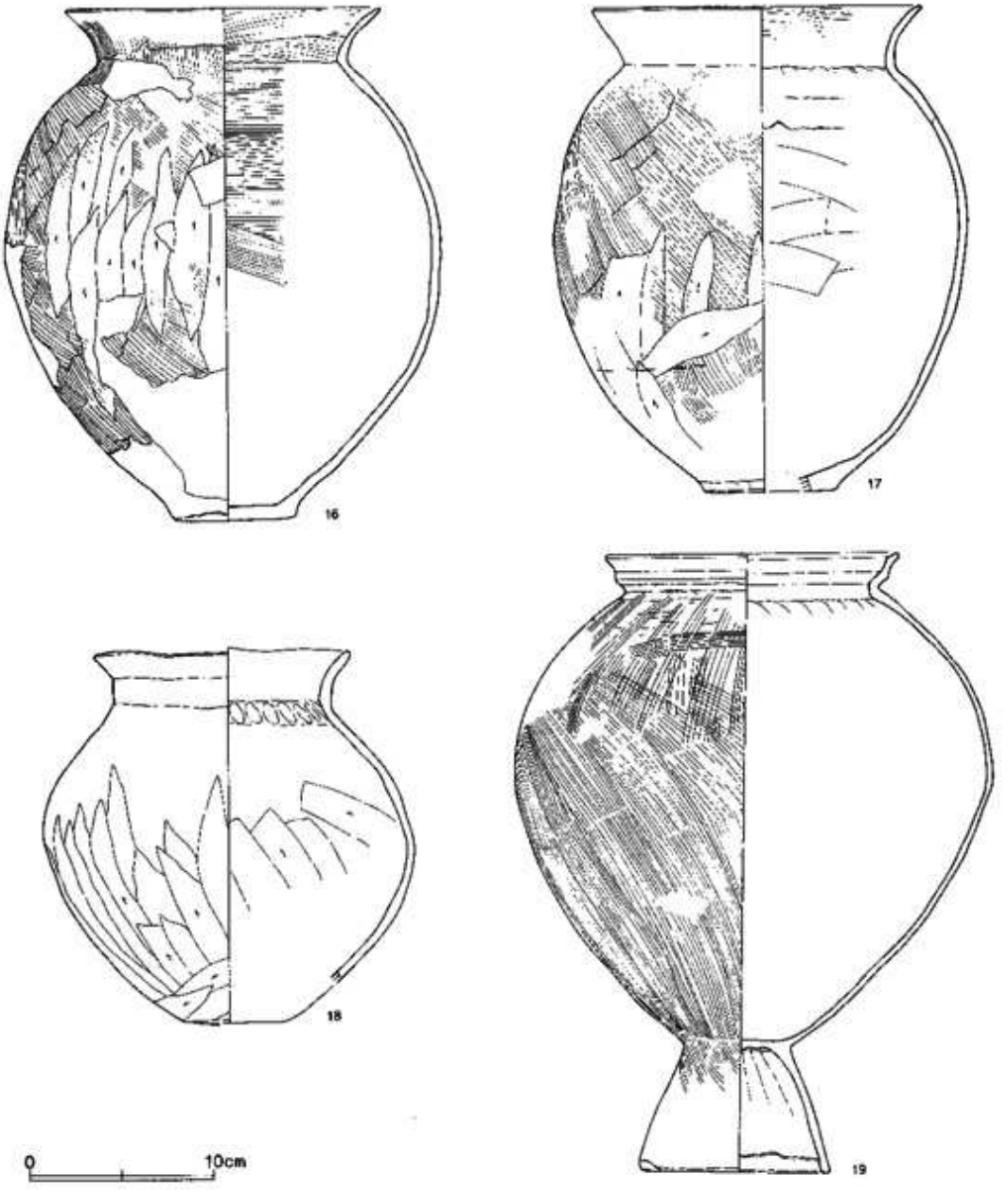
第8図　第2・3号住居跡（L＝23.70ｍ）



第9図　第2・3号住居跡遺物分布図



第10図　第２号住居跡出土遺物(1)



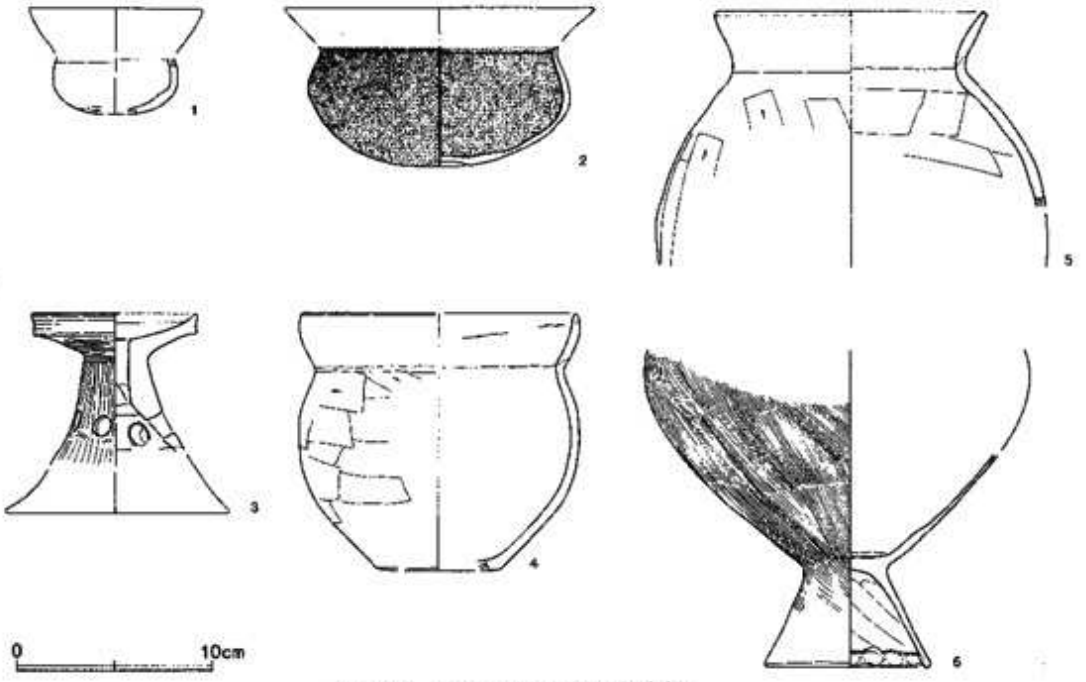
第11図　第２号住居跡出土遺物(2)

第２号住居跡出土遺物（第10・11図）

番号	器種	大きさ(cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備　考
1	直口壺	口径　(14.4) 最大径　13.8 底径　4.5 器高　18.4	口縁部は直線的に外傾し、胴部は下膨れ状を呈する。口縁部は内外面とも横撫で。胴部外面は下半部を箆削り。上半部を丁寧に撫でる。胴部には、赤彩痕が部分的に残る。	A～D　細砂多量 焼成良好 灰白色	60%　残存

番号	器種	大きさ(cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
2	小型壺	口径 (10.0) 最大径 11.3 底径 3.4 器高 15.0	口縁部は直線的に外傾して立ち上がり、口唇部でわずかに内湾する。胴部は形の整った球形を呈する。底部は小さな上げ底。口縁部は内外面とも横撫で。外面には縦位の篦磨きを丁寧に施す。胴部上半は撫で、下半は篦削り。胴部内面は粘土紐積み上げ痕が残り、丁寧に撫でを施す。	A～D 細砂多量 焼成良好 灰白色	70% 残存
3	小型壺	口径 3.5 最大径 12.4 底径 3.5 現存高 12.7	口縁部は頸部でわずかにくびれ、外傾して立ち上がる。胴部はやや扁平な球形を呈し、底部は小さな平底。口縁部外面は縦位の篦磨き。胴部外面は横位の篦磨きを丁寧に施す。胴部内面は粘土紐積み上げ痕を明瞭に残す。赤彩を施す。	A～D 細砂多量 焼成良好 灰白色	90% 残存
4	小型壺	頸部径 5.5 最大径 11.6 底径 2.9 現存高 9.4	胴部は下膨れ状を呈する。底部は小さな上げ底。磨滅のため胴部の調整は不明瞭。口縁部を欠損する。	A～D 細砂多量 焼成普通 にぶい橙色	70% 残存
5	鉢	口径 15.8 底径 2.8 器高 7.3	口縁部は大きく外傾して開く。体部は半球形を呈し、底部はわずかに上げ底を呈する。口縁部外面は縦位の篦磨きを施す。体部外面は篦削り後、横位の篦磨きを施す。内面は磨滅のため調整は不明瞭。	A～D 細砂多量 焼成良好 淡橙色	95% 残存
6	鉢	口径 15.2 底径 3.8 器高 5.1	口縁部はわずかに内湾して開く。体部は浅い半球形を呈し、底部は上げ底。口縁部は内外面とも刷毛目調整後、横撫でを施す。体部は丁寧に篦磨きを施し、下端を篦削りする。体部内面には放射状に篦磨きを施す。黒斑がみられる。	A～D 細砂少量 焼成良好 淡橙色	完存
7	鉢	口径 12.9 底径 3.6 器高 4.9	口縁部は内湾気味に大きく開く。体部は小さな平底の底部から内湾して立ち上がる。口縁部内外面横撫で。体部外面は下端に篦削りを加え形を整えた後、横位の篦磨きを入念に施す。内面はやや粗い篦磨き。	A～D 細砂多量 焼成良好 灰白色	90% 残存
8	器台	口径 (7.2) 現存高 9.4	受部は半球形を呈する。脚部は中実の柱状部と大きく外反する裾部からなる。受部は内外面とも横撫でを施す。柱状部は縦位の篦磨き。裾部は外面は目の細かい刷毛目。内面は横方向の刷毛目を施す。	A～D 細砂多量 焼成良好 明赤褐色	70% 残存
9	器台	裾部径 (7.8) 現存高 6.3	受部を欠損するが、半球形を呈するものと考えられる。脚部は中実の柱状部と半球形を呈する裾部からなる。全体に調整は粗雑で手捏ねに近い。	A～D 粗砂 焼成良好 灰白色	60% 残存
10	高坏	口径 15.9 裾径 11.6 器高 17.2	坏部は大きく外傾して開く。脚部は棒状の柱状部と裾広がりとなる裾部からなる。坏部は口縁部内外面を横撫で。外面は篦磨きを施す。内面は器表面の剥離が著しい。脚部外面は縦位の篦磨き、柱状部内面は篦削り。裾部は横撫で。	A～D 細砂多量 焼成普通 淺黄橙色	90% 残存

番号	器種	大きさ(cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
11	高坏	口径 15.6 裾径 11.4 器高 16.7	坏部は大きく外傾して開く。脚部は棒状の柱状部と「ハ」の字状に大きく開く裾部からなる。坏部は内外面とも刷毛目調整後、横撫でを施す。脚部外面は縦位の箆磨きを丁寧に施す。柱状部内面は箆削り。裾部内面は刷毛目を残す。	A～D 細砂多量 焼成普通 にぶい橙色	80% 残存
12	高坏	口径 16.2 裾径 11.6 器高 15.2	坏部外面に段を持ち、大きく外傾して開く。柱状部はわずかに膨らみ、裾部で大きく開く。坏部外面は縦位の箆磨き。内面は線状の箆磨きを丁寧に施す。柱状部は外面箆磨き、内面箆削り。裾部外面は線状の箆磨き、内面は横撫で。	A～D 細砂多量 焼成良好 橙色	90% 残存
13	高坏	口径 14.0 現存高 5.0	口縁部は大きく外傾して開き、体部との境に弱い稜を有する。口縁部内外面横撫で。	A～D 細砂多量 焼成良好 灰白色	坏部のみ残存
14	高坏	口径 15.8 現存高 6.0	口縁部は大きく外傾して立ち上がり、口唇部は緩やかに内湾する。口縁部外面は刷毛目調整後、丁寧に撫でを施す。内面は刷毛目調整後、箆磨きを施す。黒斑がみられる。	A～D 細砂多量 焼成良好 にぶい橙色	坏部 70% 残存
15	甕	口径 (15.6) 最大径 20.3 底径 4.8 器高 22.5	口縁部は「く」の字状に外反し、口唇端部は尖る。胴部は中位に最大径を有し、球形に近い。底部は平底。胴部外面は横・斜位の刷毛目調整後、胴部下半を箆削りする。内面は木口状工具による撫で。	A～D 細砂多量 焼成普通 暗褐色	70% 残存
16	甕	口径 (17.0) 最大径 23.6 底径 (6.6) 器高 27.5	口縁部は「く」の字状に外反する。胴部は中位に最大径を有し、やや長胴となる。底部は平底で突出する。口縁部は内外面とも刷毛目調整後、横撫で。胴部外面は刷毛目後、縦位の箆削りを施す。内面上半部は木口状工具による撫で。下半部は丁寧な撫で。	A～D 細砂多量 焼成良好 暗褐色	60% 残存
17	甕	口径 (17.6) 最大径 22.4 底径 (7.1) 器高 26.1	口縁部は「く」の字状に強く外反する。胴部は中位に最大径を有し、やや長胴となる。底部は平底でわずかに突出する。口縁部は内外面とも横撫で。胴部外面は刷毛目調整後、下半部に箆削りを施す。内面は横位の撫でを施す。胴部下半は被熱のため赤色に変色している。	A～D 細砂多量 焼成良好 黒褐色	60% 残存
18	甕	口径 13.7 最大径 20.1 底径 (5.4) 器高 20.2	口縁部は頸部より短かく直立し、上部で強く外反する。胴部は中位に最大径を有し張りが強い。底部は平底。口縁部内外面横撫で。胴部外面上半は撫で。下半は縦位の箆削り。胴部内面は縦位の箆撫で。	A～D 細砂少量 焼成良好 暗褐色	80% 残存
19	S字甕	口径 15.6 最大径 25.8 台径 10.0 器高 33.5	口縁部下段は外傾して立ち上がり、中段は直立する。上段は外反し、端部内面に浅く凹む面を作り出す。胴部は最大径を上半に持つ無花果形を呈しやや長胴化がみられる。台部は端部を折り返す。胴部外面は、下半部に下から上への斜め刷毛を施す。上半部は箆削り後、頸部から下へ目の粗い刷毛目を施し、肩部に部分的に横刷毛を巡らす。内面は丁寧に撫でを施す。	A～D 細砂多量 焼成良好 灰白色	80% 残存



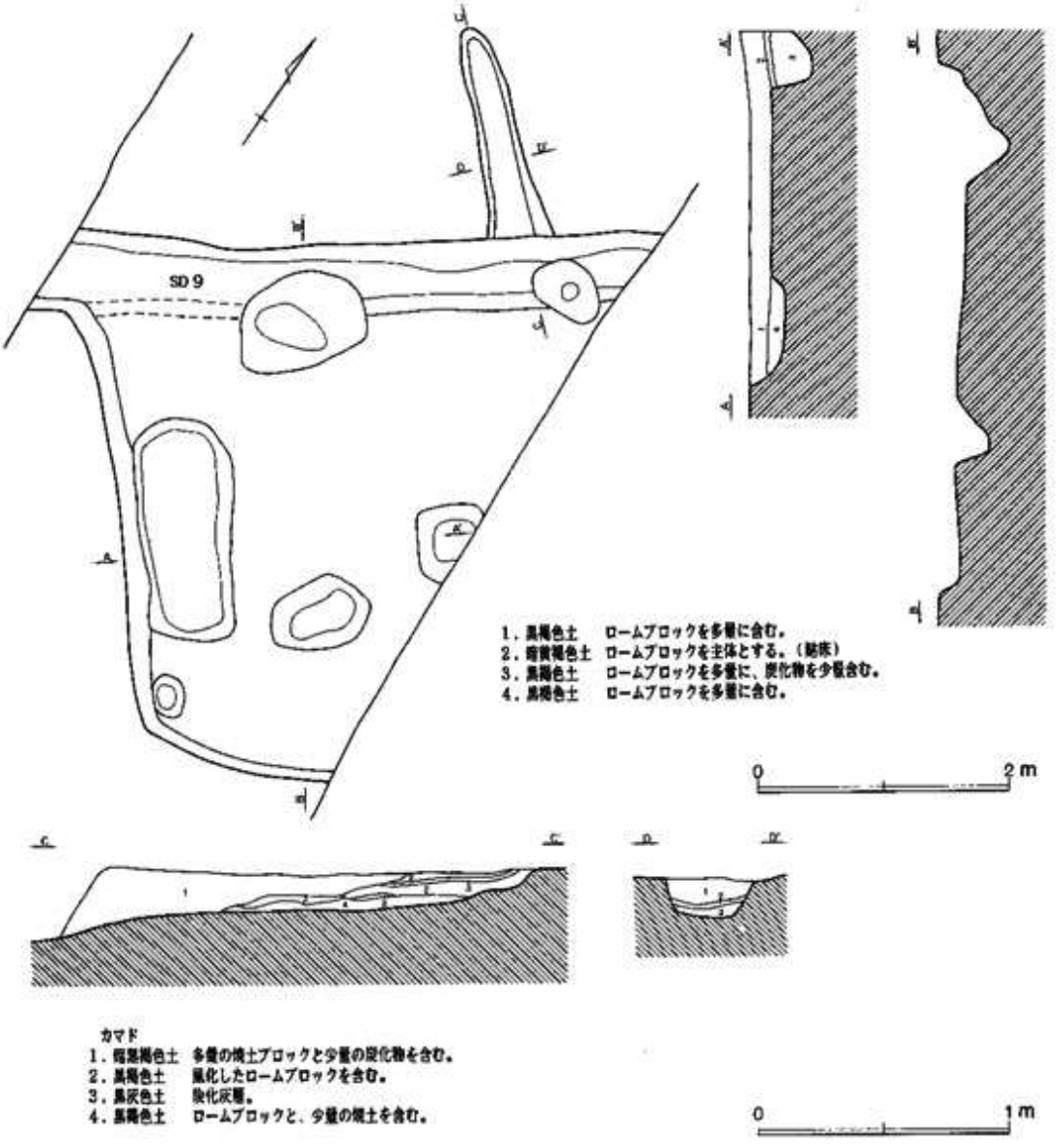
第12図　第３号住居跡出土遺物

第３号住居跡出土遺物（第12図）

番号	器種	大きさ(cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	坩	最大径 (6.4) 現存高 2.9	体部はやや扁平になる。底部外面は篦削り。外面に黒斑がみられる。	A～D 細砂少量 焼成普通 淡橙色	60% 残存
2	鉢	最大径 13.4 現存高 6.1	やや扁平な体部。底部中央は浅く凹む。磨滅のため細部の調整は観察できない。内外面とも部分的に赤彩がみられる。胎土には多量の角閃石を含む。	B，C 細砂多量 焼成普通 橙色	体部 80% 残存
3	器台	口径 8.3 現存高 7.8	受部は皿状を呈し、口唇部は上方につまみ出され側面を作り出す。脚部は「ハ」の字状に大きく開き、４方向に円孔を穿つ。孔径1.2cm。受部から接合部にかけては横方向の篦磨き。脚部は縦方向の篦磨きを丁寧に施す。受部内面は剥離痕が目立つ。脚部内面には粘土紐積み上げ痕が残る。	A，B，D 細砂 焼成良好 淡橙色	図示部完存
4	甕	口径 (14.0) 最大径 (14.4) 底径 (6.4) 器高 13.1	口縁部はやや内湾する。胴部は最大径を中位に有し、平底を呈する。口縁部は内外面横撫で。胴部外面は篦削り後、撫でを施す。胴部内面は撫で。	A～D 細砂多量 焼成やや不良 暗褐色	50% 残存
5	甕	口径 13.6 最大径 (20.0) 現存高 13.0	口縁部は「く」の字状に外反する。口縁部内外面とも横撫で。胴部外面縦篦削り。内面横方向の篦撫で。	A～D 細砂多量 焼成良好 浅黄橙色	60% 残存
6	S字甕	最大径 (19.7) 現存高 16.1 台径 8.5	胴部の張りは比較的強い。胴部外面は斜位の刷毛目調整。内面は横方向に丁寧に撫でを施す。台部は外面に鋸歯状に刷毛目を施す。内面は指撫でを施す。端部は折り返され、指頭圧痕を残す。	A～D 細砂少量 焼成良好 灰白色	胴部 60% 台部 完存

第４号住居跡（第13図）

調査区北側に広がる土壙群の中に所在する。今回の調査では唯一の奈良時代の住居である。107－49グリッドに位置し、東側半分が調査区域外にかかる。このため全容は不明であるが、検出した西壁の長さは4.2mを測る。主軸方向はN－32°－Wを指す。床面は全体に軟らかく、数箇所でピッ



第13図　第４号住居跡（L＝23.60ｍ）

第14図　第４号住居跡出土遺物

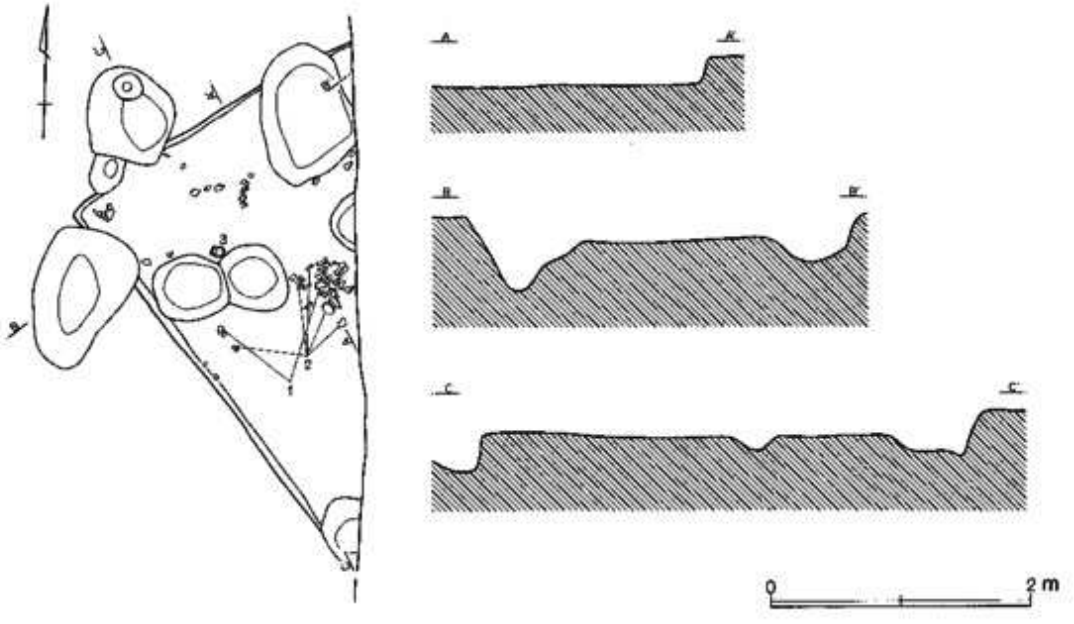
トが確認されているが住居に伴うかは明確ではない。カマドは北壁に設置され、燃焼部は第9号溝跡によって削平されている。煙道部は住居外に長く張り出す。遺物は全体に少ない。

第4号住居跡出土遺物（第14図）

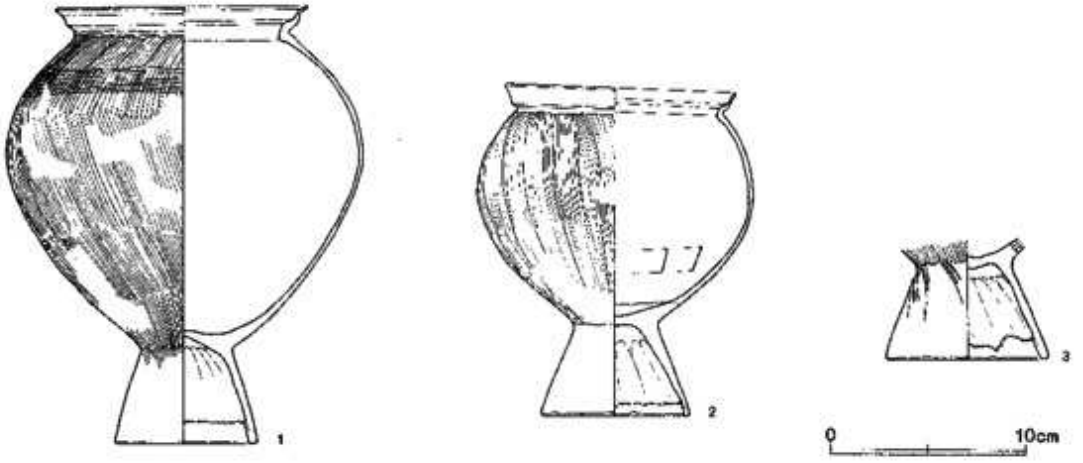
番号	器種	大きさ(cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	坏	口径 (11.8) 器高 3.6	丸底で、口縁部は緩やかに内湾する。体部外面は篦削り。口縁部内外面横撫で。赤色粒子の混入が目立つ。	A～D 細砂少量 焼成良好 橙色	50% 残存
2	坏		内面に放射状暗文を施す。口唇部は細く尖り、内面に段を作り出す。体部外面は篦削り。	A，C 細砂少量 焼成良好 黒褐色	
3	甕	口径 (21.4)	口縁部は「く」の字状に屈曲する。胴部は球胴形になるものと考えられる。口縁部内外面横撫で。胴部外面篦削り。内面撫で。頸部に粘土紐積み上げ痕がみられる。	A～D 細砂少量 焼成良好 灰白色	30% 残存

第5号住居跡（第15図）

107－50グリッドに位置する。調査区北側に分布する古墳時代前期の住居群の中では最も南にある。大部分が調査区域外にかかるため、全容は不明である。確認した部分は北西コーナーを中心とする北、西壁の一部である。検出された西壁の長さは3.4mを測り、西壁を基準にすれば主軸方向はN－35°－Wを示す。床面は全体に軟らかく、古代に位置づけられる土壙と重複している。壁の掘り込みは20cmほどである。炉跡、貯蔵穴、柱穴などは確認できなかった。なお床面には噴砂が確認された。遺物量は全体に少なく、S字状口縁台付甕の中・小型品が床直の状態で出土している。



第15図　第5号住居跡（L＝23.60m）



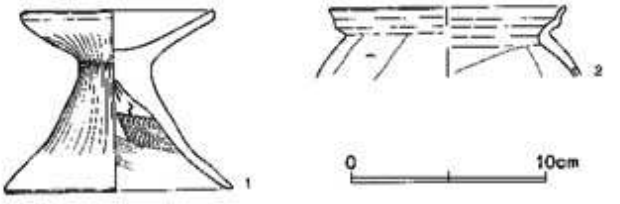
第16図　第５号住居跡出土遺物

第５号住居跡出土遺物（第16図）

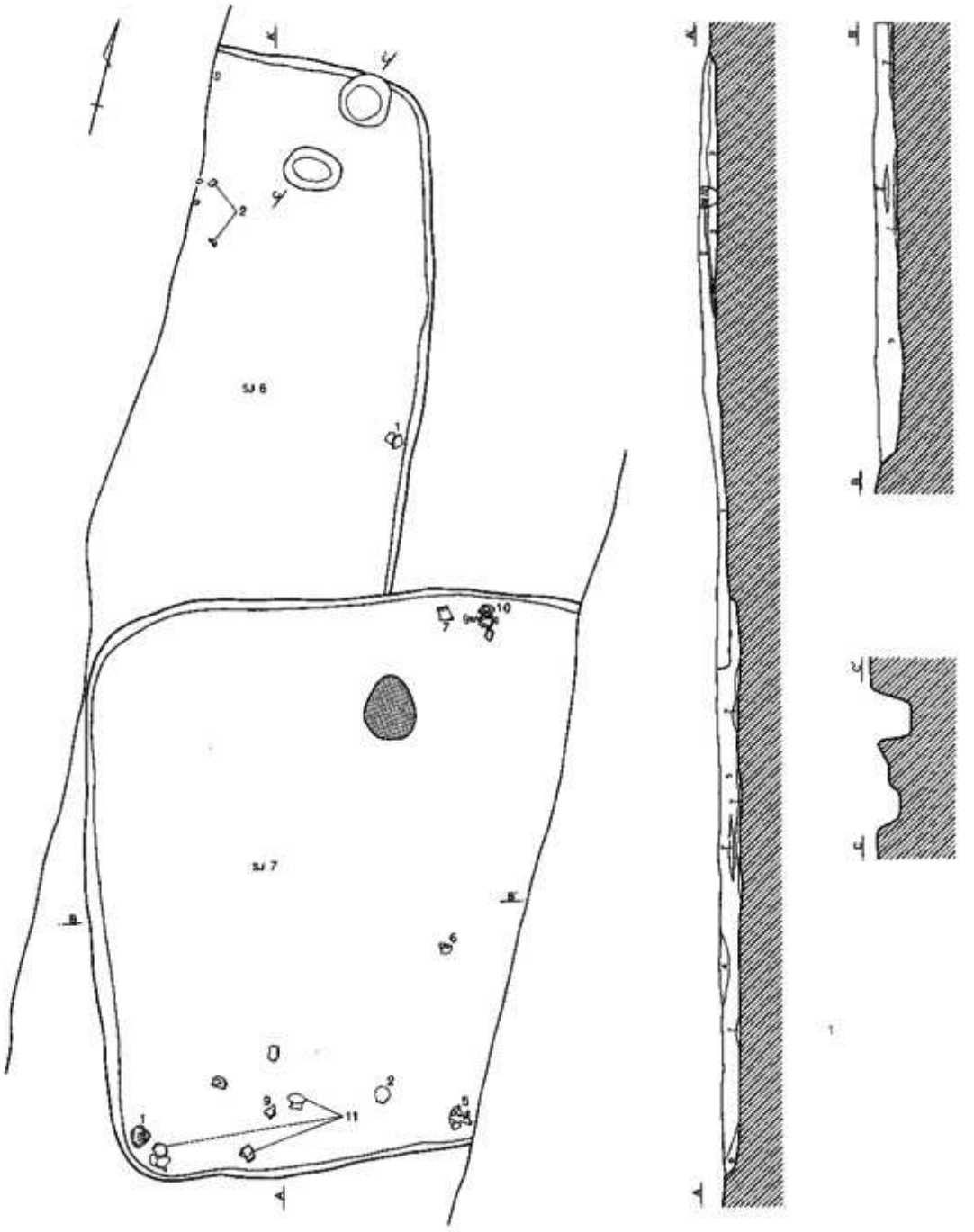
番号	器種	大きさ(cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備　考
1	S字甕	口径　12.7 最大径　18.2 台径　7.1 器高　22.2	口縁部下段は大きく外傾して開く。中段は直立し上段で大きく外傾する。口唇端部内面は浅く凹む。胴部は最大径をやや上位にもつ無花果形。台部は端部を折り返す。胴部外面は下半部を下から上への斜め刷毛、その後上半部は頸部から下へ斜め刷毛を施し、最後に肩部横刷毛を施す。内面は丁寧に撫でを施す。	A～D　細砂多量 焼成普通 暗褐色	70%　残存
2	S字甕	口径　11.7 台径　7.4 最大径　14.2 器高　16.9	口縁部下段は水平に屈曲して立ち上がり、上段で直線的に開く。口唇端部は薄く尖る。胴部は最大径を中位に持つ無花果形。台部は端部を折り返す。口縁部は内外面とも横撫で。胴部外面は下半を下から上への刷毛目の後、頸部から下へ刷毛目を施す。内面は丁寧に撫でを施す。	A～D　細砂多量 焼成良好 灰白色	70%　残存
3	S字甕	台径　8.2	S字甕台部の破片。台部外面の鋸歯状の刷毛目は乱れている。端部は内側に折り返される。内面には撫でが施される。接合部は被熱のため赤褐色に変色する。	A～D　細砂多量 焼成良好 灰白色	台部　完存

第６号住居跡（第18図）

調査区南側に位置し、第７号住居跡を切って構築されている。西側が調査区域外にかかり全容は不明である。南北長5.4mを測る。主軸方向は東壁を基準に採ればN－8°－Eを示す。床面には小ピット２個が確認されただけである。

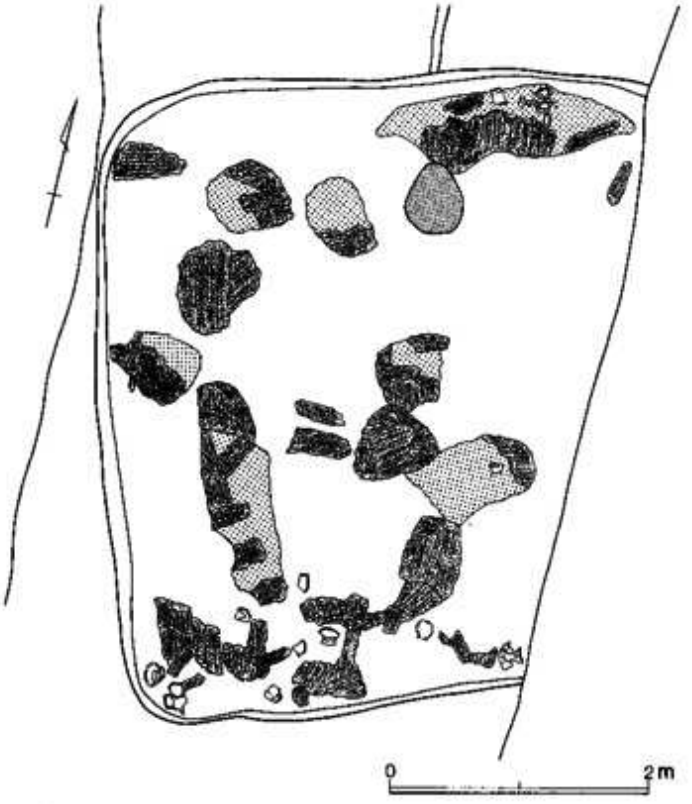


第17図　第６号住居跡出土遺物



1．黒褐色土　炭化物を少量含む。
2．黒色土　炭化灰を含む。
3．暗黄褐色土　炭化物をわずかに含む。
4．暗黒褐色土　ローム粒を含む。
5．暗黄褐色土　混入物をほとんど含まず、ロームの地山土に酷似する。
6．暗黄褐色土　炭化物を帯状に堆積する。
7．黒色土　炭化物を主体とする。

第18図　第６・７号住居跡（Ｌ＝23.40ｍ）



第19図　第７号住居跡炭化材、焼土分布図

第７号住居跡（第18・19図）

調査区南側の107－62グリッドに位置する。第６号住居跡と重複し、土層断面の観察から本住居が古いことがわかる。

東側が調査区域外にかかり全体の形態、規模は明確ではないが、確認部分から推定すると一辺５m前後の正方形プランを呈するものと考えられる。コーナー部は丸みをもち、中央部北壁寄りに径50×44cmほどの地床炉がある。主軸方向はN－15°－Wを指す。床面上からは多量の焼土、炭化灰や建築部材と推定される炭化木などが検出された。焼失住居の可能性が高い。

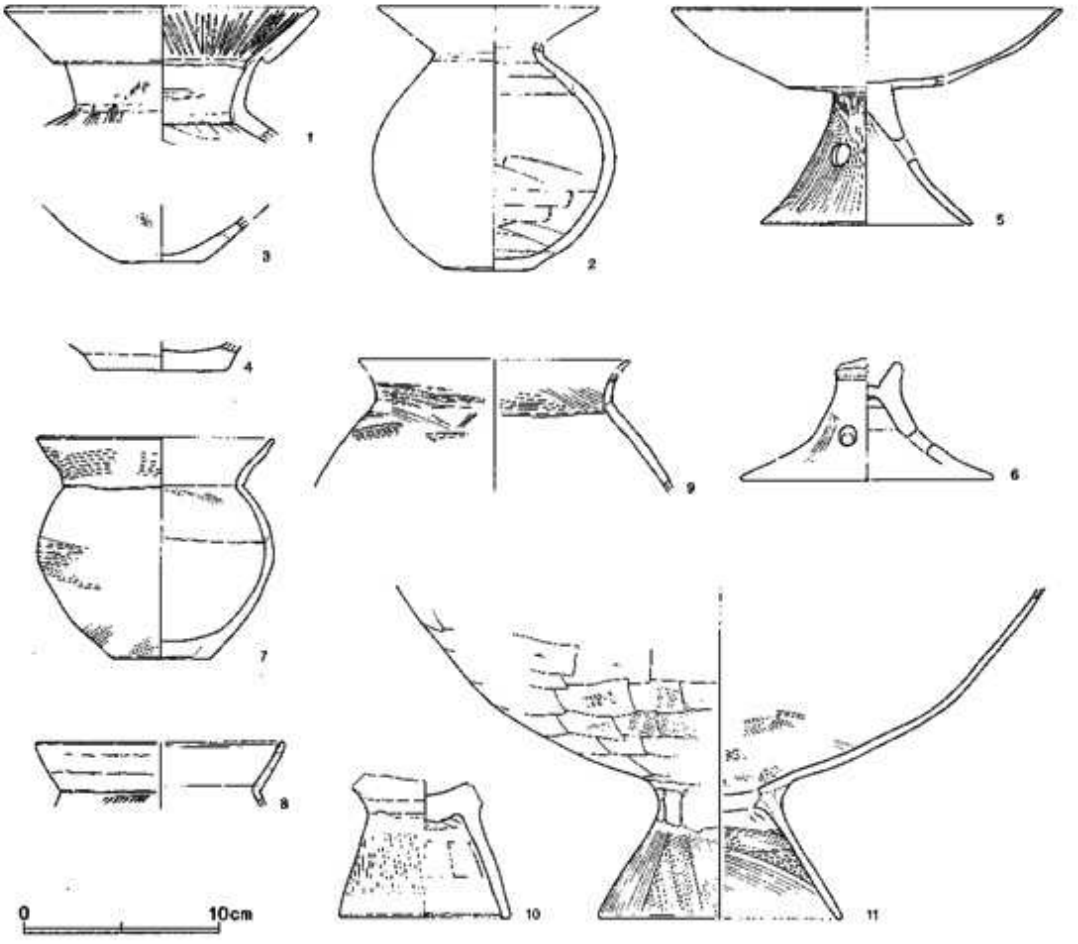
遺物は、壁際を中心として床直の状態で出土している。

第６号住居跡出土遺物（第17図）

番号	器種	大きさ(cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	器台	口径 9.7 裾径 11.5 器高 9.2	受部は大きく外傾して開き、貫通孔はない。脚部は「ハ」の字状に大きく開き、裾部でわずかに外反する。受部外面は縦位の篦磨き、内面は器面が荒れている。脚部外面は縦位の篦磨き。内面は絞り目痕が残り、刷毛目調整を施す。	A～D　小礫 焼成良好 明赤褐色	90%　残存
2	S字甕	口径 (12.0)	口縁部下段は大きく外反して立ち上がり、中段で直立し、上段は緩やかに開く。口唇端部は薄く尖る。磨滅のため調整は不明瞭。	A～D　細砂多量 焼成やや不良 灰白色	30%　残存

第７号住居跡出土遺物（第20図）

番号	器種	大きさ(cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	壺	口径 15.8 現存高 6.9	幅広の複合口縁を呈する。口縁部外面は丁寧に磨きを施す。内面は暗文状の篦磨きを施す。	A～D　細砂少量 焼成良好 橙色	90%　残存
2	小型壺	最大径 12.4 底径 4.7 現存高 11.8	頸部が強くすぼみ、胴部中位に最大径を有する。底部は平底。胴部外面は縦位の篦磨きを施す。内面は丁寧に撫でを施す。外面胴部下半に黒斑を有する。	A～D　細砂少量 焼成良好 赤橙色	図示部完存



第20図　第７号住居跡出土遺物

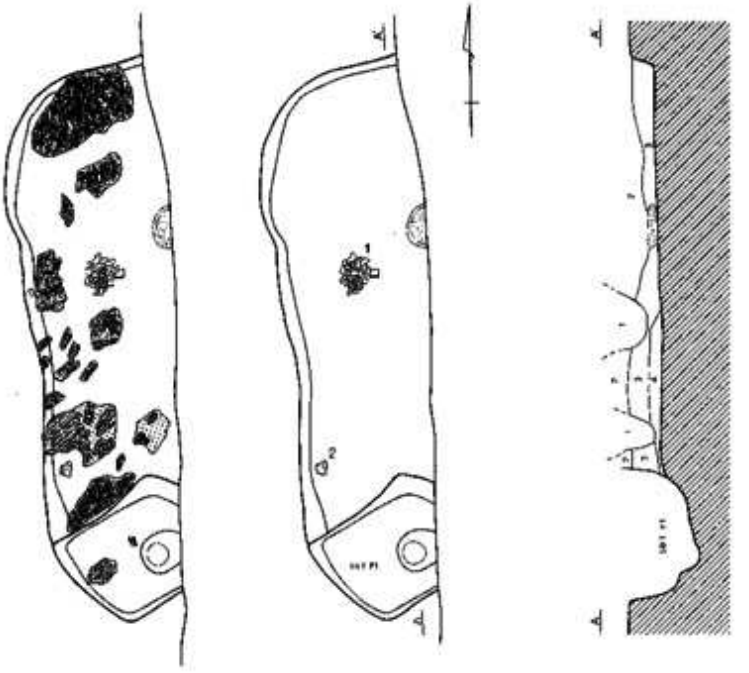
番号	器種	大きさ(cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備　考
3	小型壺	底径　4.2	小さな底部を有する。磨滅のため調整は不明瞭であるが外面は刷毛目調整後、丁寧に撫でを施す。	A～D　細砂多量 焼成良好 褐灰色	40%　残存
4	小型壺	底径　6.7	平底を呈する。風化のため調整は不明瞭。	A～D　細砂多量 焼成普通 にぶい橙色	底部　完存
5	高坏	口径　(20.0) 裾径　10.6 器高　11.0	坏部は比較的浅く大きく開く。脚部は「ハ」の字状に開き、３方向に円孔を穿つ。孔径 1.3cm。全体に磨滅が著しく、細部の調整は不明。脚部外面は縦位の篦磨きを施す。内面は丁寧に撫でを施す。	A～D　細砂少量 焼成普通 明赤褐色	坏部　60% 脚部　完存
6	高坏	接合部径　3.3	坏部との接合部から剝離している。３方向に円孔を穿つ。孔径 1.2cm。外面は縦位の篦磨き。内面は丁寧に撫でを施す。	A～D　細砂多量 焼成普通 淡橙色	裾部 40%　残存

番号	器種	大きさ(cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
7	甕	口径 12.0 最大径 12.1 底径 4.9 器高 11.3	口縁部は「く」の字状に外傾し、口唇部を丸くおさめる。頸部外面には粘土紐積み上げ痕を残す。胴部中位に最大径を有し、底部は周縁部の突出する輪台状を呈する。器面が荒れ、調整は不明瞭。口縁部、胴部とも部分的に粗い刷毛目を残す。	A～D 粗砂 焼成やや不良 にぶい橙色	70% 残存
8	甕	口径 (12.6)	小片のため口径は推定復元。口縁部外面には粘土紐積み上げ痕がみられる。内外面とも横撫で。胴部外面は刷毛目調整。	A～D 細砂多量 焼成やや不良 灰白色	20% 残存
9	甕	口径 (13.8)	口縁部は「く」の字状に外反する。頸部内面には接合痕が明瞭に残る。口縁部から胴部外面にかけては粗く刷毛目を施す。口縁部内面は横方向の刷毛目調整後、横撫でを施す。胴部内面は丁寧に撫でを施す。	A～D 細砂少量 焼成普通 灰白色	30% 残存
10	台付甕	台径 8.6 現存高 7.2	台部外面は目の粗い刷毛目調整を施す。端部内外面ともに横撫でを施す。内面は篦撫で。	A～D 細砂少量 焼成良好 にぶい橙色	台部 完存
11	台付甕	最大径 (33.2) 台径 12.2	大型の台付甕。胴部は球胴形を呈するものと考えられる。胴部外面は刷毛目の後、篦削り調整。内面は刷毛目の後、撫でを施す。台部との接合部は指頭による撫でつけ。台部内外面は刷毛目調整。	A～D 細砂多量 焼成普通 褐灰色	胴部 40% 台部 完存

第8号住居跡（第21図）

108－62・63グリッドに位置する。北側に第6・7号住居跡、南側に第9号住居跡が近接する。東側大半が調査区域外にかかるため、全容は不明である。南西コーナーは、第1号掘立柱建物跡によって壊されている。確認部分の規模は南北長4.5mほどを測る。西壁を基準とすれば主軸は、N－約7°－Wを指す。

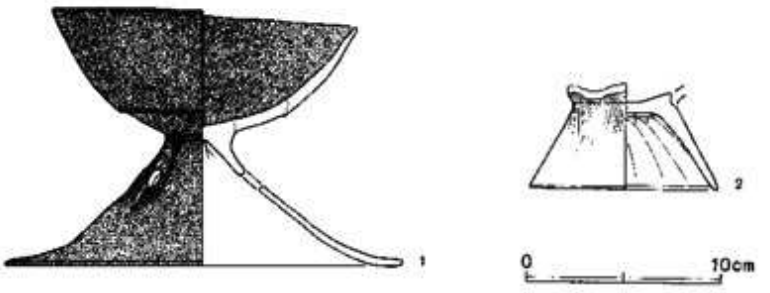
北西コーナーは丸みをもち、確認面から床面までの深さは18cmと浅い。床面はほぼ平坦で、全体に軟弱である。床面上から多量の焼土、炭化灰が検出された。特に北西コー



第21図　第8号住居跡（L＝23.50m）

ナーでは藁状の炭化物が床面に付着していた。焼失住居の可能性が強い。

遺物は1の高坏が潰れた状態で床直で検出されている。



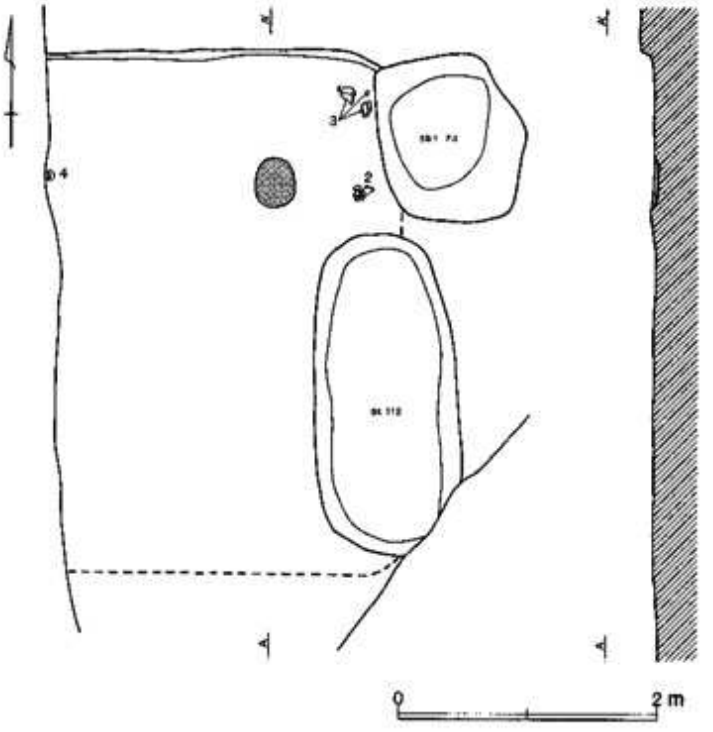
第22図　第8号住居跡出土遺物

第8号住居跡出土遺物（第22図）

番号	器種	大きさ(cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備　考
1	高坏	口径　15.5 裾径　(20.4) 器高　13.1	坏部外面に稜を有する。脚部は大きく外反して開き、3方向に円孔を穿つ。孔径は 1.2cm。器表面は磨滅し、調整は不明瞭。部分的に赤彩が残る。	A～D　細砂少量 焼成普通 淡黄色	坏部　90% 脚部　70% 残存
2	台付甕	台径　9.5 現存高　5.4	台端部を丸くおさめる。台部外面は接合部を中心に斜位の刷毛目調整を施す。台部内面は指撫でを施す。	A～D　粗砂 焼成良好 暗赤褐色	台部　完存

第9号住居跡（第23図）

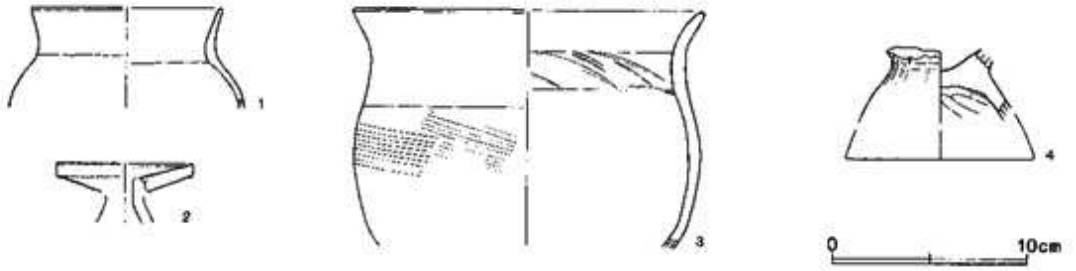
107・108－63グリッドに位置する。北側には第8号住居跡が近接し、第1号掘立柱建物跡、第112号土壙と重複する。上面が大きく削平されているため、北壁と床面の一部を確認したにすぎない。西側が調査区域外にかかるため全体の形態、規模は明確ではないが、おそらく一辺4m前後を測るものと推定される。主軸方向はほぼ北を向いている。



第23図　第9号住居跡（L＝23.50m）

床面は北側の炉跡周辺部のみが遺存している。炉跡は北東コーナー寄りに位置する径38×30cmほどの楕円形の地床炉で、焼土層を検出した。貯蔵穴、柱穴等は確認されなかった。

遺物は、炉跡周辺から小型壺、器台、甕、台付甕の破片が少量出土したにすぎない。



第24図　第９号住居跡出土遺物

第９号住居跡出土遺物（第24図）

番号	器種	大きさ(cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備　考
1	小型壺	口径　(9.6)	小片のため口径は推定復元。口縁部は緩やかに外傾して立ち上がる。磨滅のため調整は不明瞭。	A～D　細砂多量 焼成やや不良 灰白色	20%　残存
2	器台	口径　(6.8)	受部は皿状を呈し、垂直な側面を作り出す。部分的に赤彩痕が残る。	A～D　細砂多量 焼成やや不良 にぶい橙色	受部 30%　残存
3	甕	口径　(17.8) 胴部径 (17.7) 現存高　12.0	胴部から口縁部への移行の緩やかな広口の甕。磨滅のため細部の調整は不明であるが、胴部外面には横刷毛目。頸部内面に工具による条線が残る。外面の一部に炭化物が付着する。	A～D　粗砂 焼成やや不良 灰褐色	40%　残存
4	台付甕	現存高　3.8	器表面は風化のため磨滅している。接合部内面には目の粗い刷毛目。内面は撫でを施す。	A～D　細砂少量 焼成不良 灰白色	台部 80%　残存

第10号住居跡（第25図）

108－64グリッドに位置し、南側には第11～13号住居跡が近接する。東側の大半が調査区域外にかかり、西壁周辺を確認したにすぎない。西壁の長さは5.3mを測り、確認面から床面までの深さは20cmと浅い。主軸方向はN－10°－Eを指す。床面は概ね平坦である。南西コーナー付近には皿状の浅いピットが確認された。遺物はほとんど検出されなかった。

第11・12・13号住居跡

第11・12・13号住居跡の３軒は、107・108－65グリッドに位置し、それぞれが重複した状態で検出された。切り合い関係は十分に検討することはできなかったが、遺構の残存状態などから、（古）第11号→（新）第12・13号の順序で構築されたものと推定される。なお、第12・13号住居跡の先後関係は明確ではない。時期は、出土遺物からいずれも古墳時代前期に位置づけられる。

第11号住居跡（第27図）

107・108－65グリッドに位置し、第12・13号住居跡に切られる。西側が調査区域外にかかるため全体の規模、形態は不明である。確認部分の規模は、南北長4.5mを測る。掘り込みは、10cm前後と

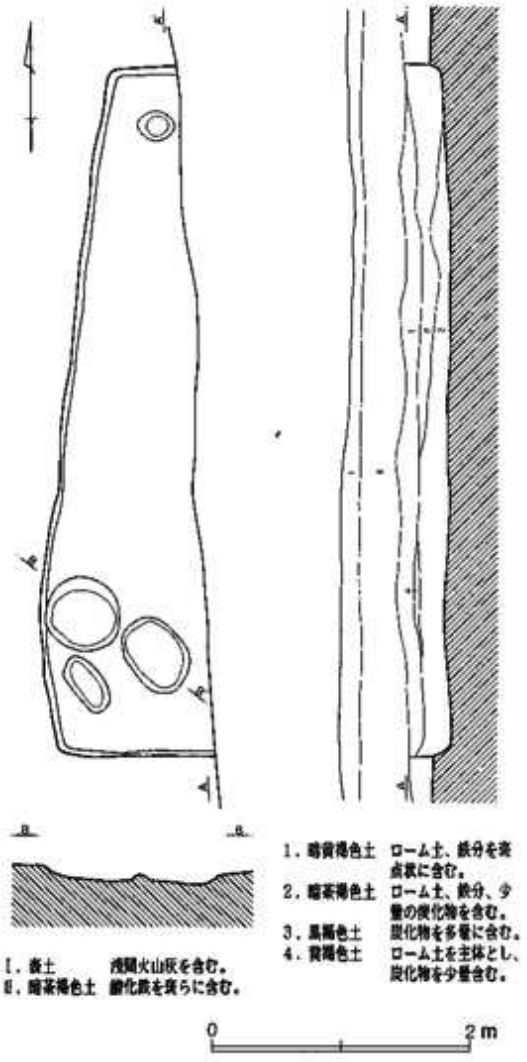
浅い。床面は概ね平坦で、全体に軟弱であった。壁溝は南壁のみに巡らされ、幅40cm、深さ15cmを測る。炉跡、貯蔵穴、柱穴などの施設は確認できなかった。

遺物は、覆土中から複合口縁の壺、高坏脚部、S字状口縁台付甕の破片が出土した。

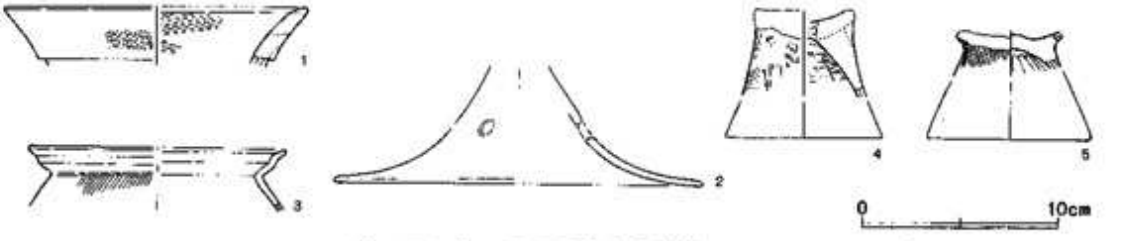
第13号住居跡（第27図）

108－65グリッドに位置し、第11号住居跡を切って構築している。南側には第12号住居跡が接しているが、先後関係は明確ではない。東側の大半が調査区域外に位置するため全体の規模、形態は不明で、わずかに西壁付近を検出したにすぎない。確認部分の規模は、南北長5mを測る。西壁を基準にすれば主軸方向は、N－5°－Wを指す。床面は概ね平坦であるが、全体に軟らかかった。掘り込みは、20cm前後と浅い。覆土は自然堆積を示し、下層には炭化物粒の混入がみられた。上層部分には後世の溝が重複する。

遺物はほとんど検出されなかったが、北西コーナー付近から20cm大の河原石が6個まとまって出土した。不整形を呈するものが多く、いわゆる編み物石とはやや異なる。



第25図　第10号住居跡（L＝23.50m）

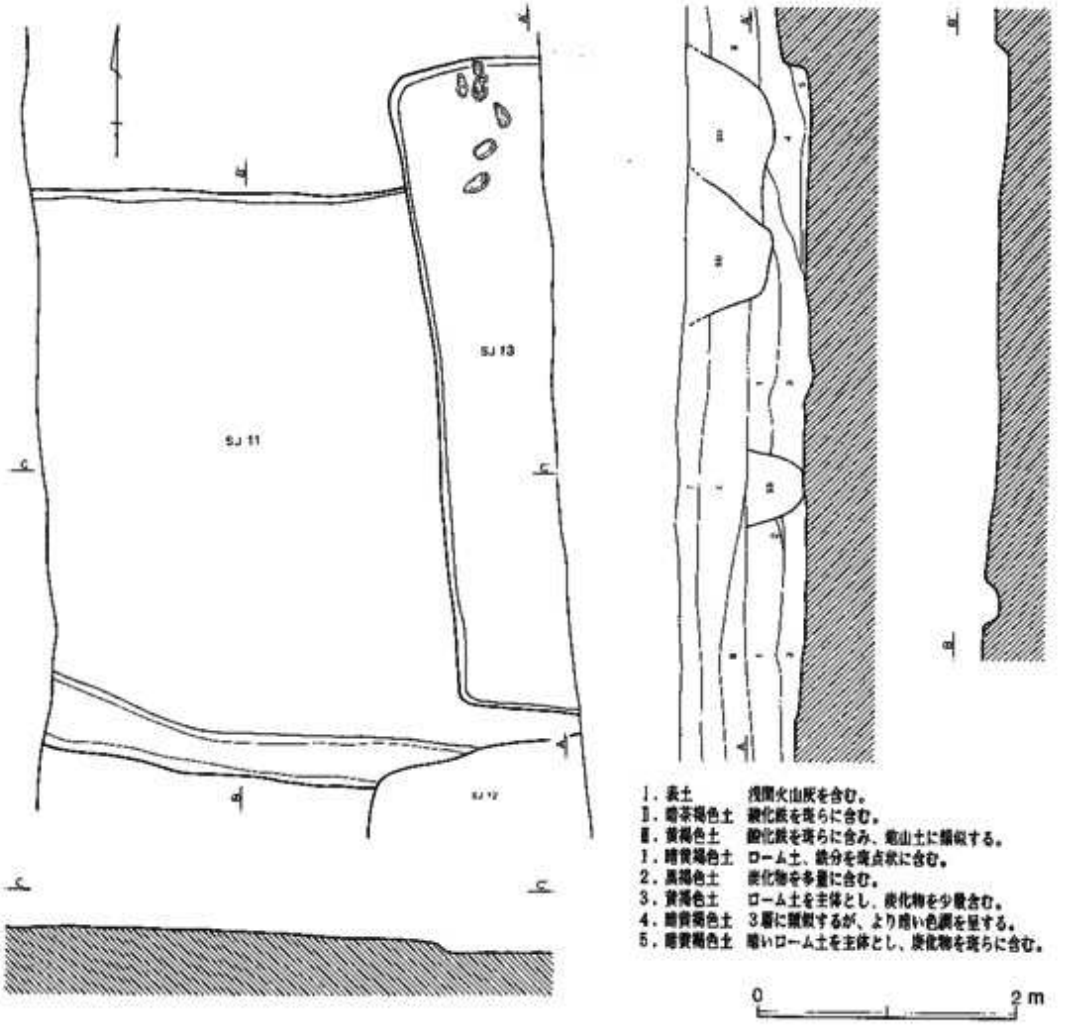


第26図　第11号住居跡出土遺物

第11号住居跡出土遺物（第26図）

番号	器種	大きさ(cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	壺	口径　(15.3)	小片のため口径は推定復元。口縁部下端に粘土紐を貼り付け、複合口縁を作る。外面は斜位の刷毛目、内面は横位の刷毛目を施した後、内外面とも横撫で。	A～D　粗砂 焼成普通 橙色	口縁部 10%　残存

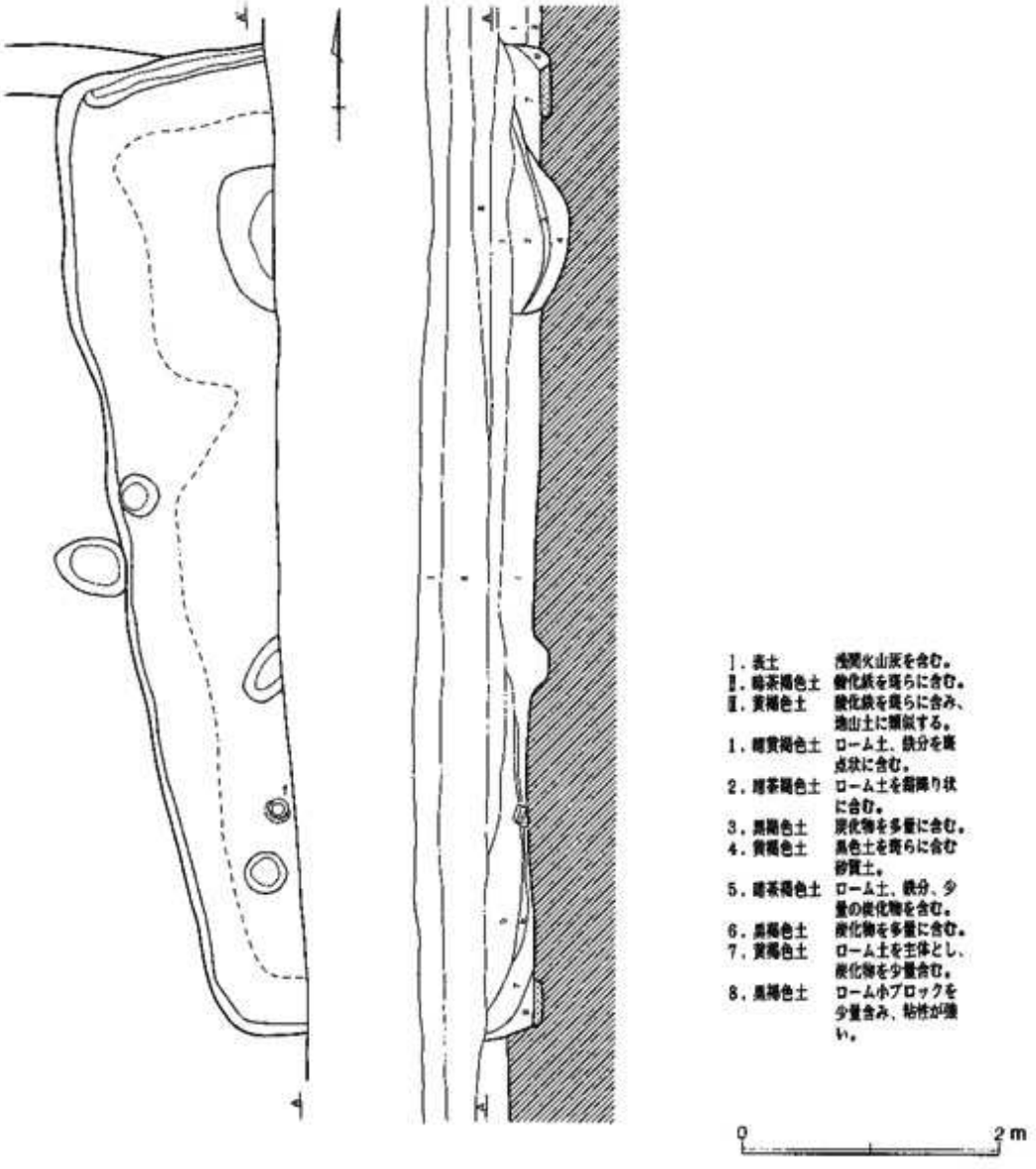
番号	器種	大きさ(cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備　考
2	高坏	裾径　(18.8)	小片のため器形は推定復元。裾部で大きく広がる。中位に透孔をもつが、1孔だけの残存のため正確な孔数は不明。磨滅のため調整は不明瞭。	A～D　細砂多量 焼成普通 橙色	裾部 20%　残存
3	S字甕	口径　(13.0)	小片のため口径は推定復元。口唇部は薄く尖り、内側に浅く凹む面を作り出す。胴部外面は刷毛目調整。	A～D　細砂多量 焼成普通 淡赤橙色	20%　残存
4	台付甕	現存高　4.4	接合部から剥離している。外面は縦刷毛目。内面は横刷毛目。	A～D　細砂少量 焼成やや不良 にぶい橙色	台部 50%　残存
5	台付甕	現存高　2.3	底部内面は中央が膨らむ。台部外面は縦刷毛目。内面は撫でを施す。	A～D　細砂多量 焼成普通 橙色	台部 30%　残存



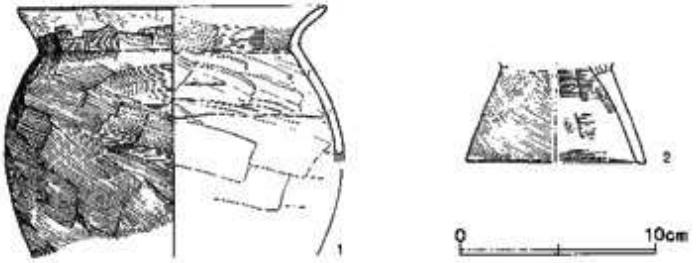
第27図　第11・13号住居跡（L＝23.50ｍ）

第12号住居跡（第28図）

108－65グリッドに位置し、北側は第11・13号住居跡と重複する。東側の大部分が調査区域外にかかり、西壁部分のみを確認した。南北長7.6mを測ることから、大型の住居となる可能性が高い。主軸方位は西壁を基準に採れば、N－10°－Wを示す。床面はほぼ平坦で、全体に軟らかく、硬質面などは確認されなかった。覆土は自然堆積を示し、土層断面には埋没後に掘り込まれた土壙状の落ち込みが認められた。壁溝は北壁のみに巡らしている。住居の掘り方は、壁際に沿って幅50cm、深さ10cmほどの範囲で掘り込まれ、貼床を施す。遺物は全体に少なく、南西コーナー付近の床面直上から胴部下半を欠損する甕が、口縁部を上にした状態で出土した。



第28図　第12号住居跡（L＝23.50ｍ）



第29図　第12号住居跡出土遺物

第12号住居跡出土遺物（第29図）

番号	器種	大きさ(cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備　考
1	甕	口径　15.7 最大径　17.4 現存高　12.7	胴部は形の整った球形を呈し、口縁部は「く」の字状に大きく外反する。胴部外面は横・斜位の刷毛目調整。胴部内面は横方向の篦撫で。	A～D　細砂多量 焼成良好 橙色	80%　残存
2	台付甕	台径　9.1 現存高　5.1	台部外面は斜位の目の細かい刷毛目調整。台部内面は横位の刷毛目調整後、下半に撫でを施す。	A～D　細砂多量 焼成良好 暗褐色	台部 70%　残存

第14～17号住居跡（第30図）

第14～17号住居跡の4軒は、108－67・68グリッドに位置し、重複関係のみられるものである。土層断面や遺存状態から、（古）第16号→第14号→（新）第15号の順序で構築されたものと推定される。なお、第16号住居跡と第17号住居跡の新旧関係は不明である。時期は、いずれも五領期に位置づけられる。

第14号住居跡は、一辺3.7m前後の正方形を呈する小型の住居である。主軸方向はN－18°－Wを指す。炉跡は住居中央北壁寄りに位置し、径50×36cmの楕円形を呈する地床炉である。ピットは2個検出された。直径40cm、深さ20cmほどの小規模なもので、位置関係から柱穴と推定される。

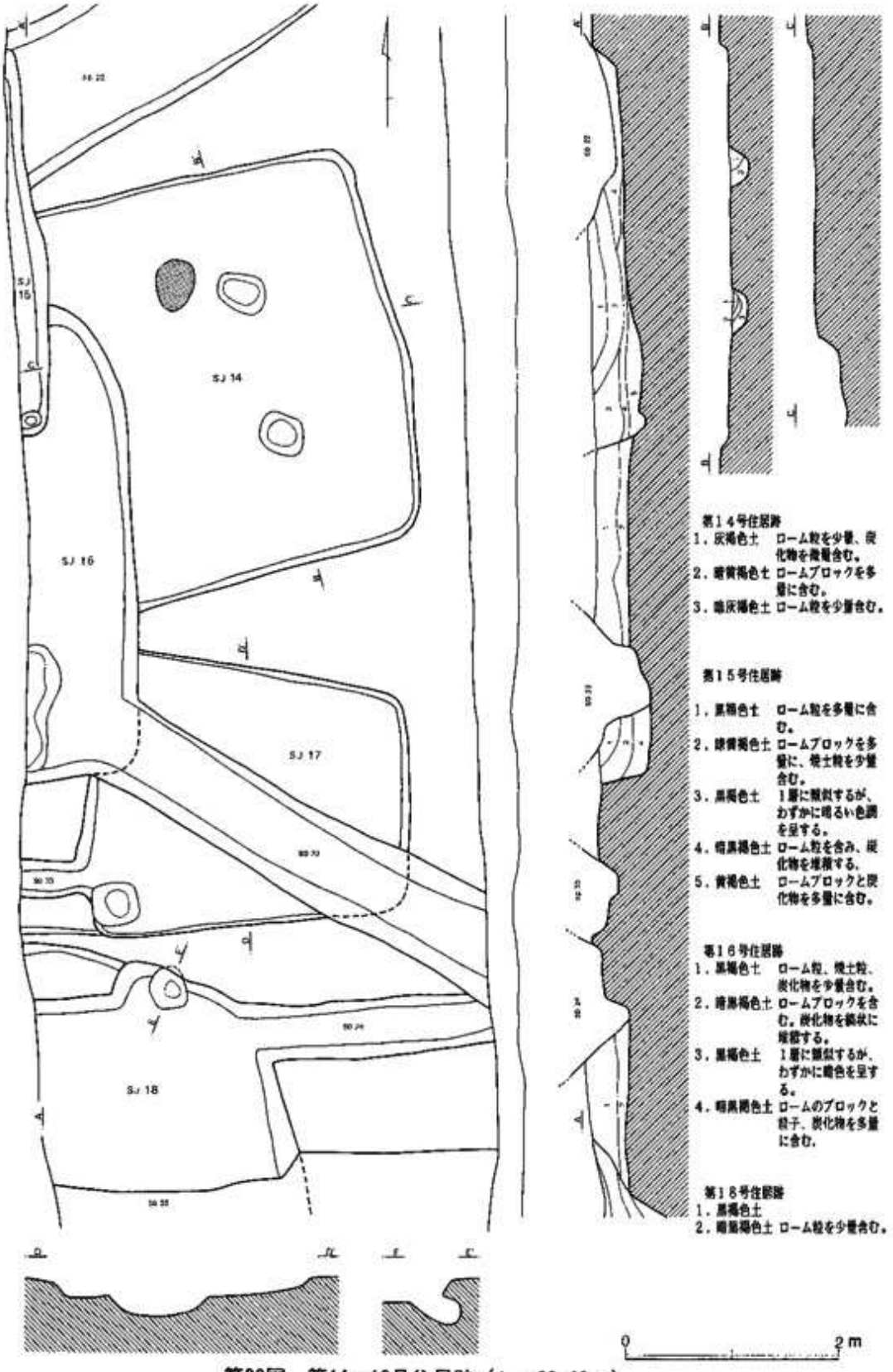
第15号住居跡は、西側大半が調査区域外にかかるため、東壁部分を確認したにすぎない。東壁の長さは3.6mを測る。床面は平坦で、掘り込みは50cmを測る。

第16号住居跡は、大半が調査区域外にかかるため東壁部分を確認したにすぎない。東壁長は4.35mを測り、主軸方向はN－5°－Wを示す。床面は概ね平坦であり、掘り込みは30cmを測る。

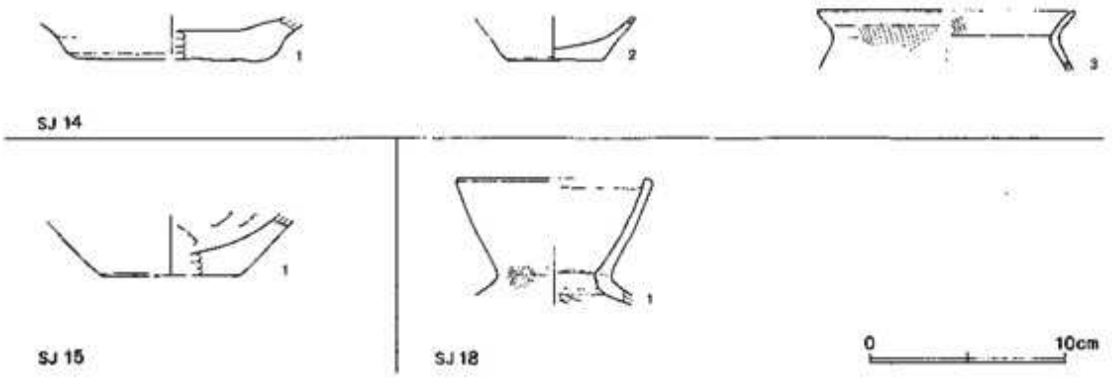
第17号住居跡は、第16号住居跡と一部重複しているが先後関係は明確ではない。東西長3m、南北長2.6mを測る台形に近い平面プランを呈する。炉跡、柱穴等は確認されず、南西コーナーに小ピット1個が確認されただけである。位置的には貯蔵穴の可能性もあるが明確ではない。

第18号住居跡（第30図）

第17号住居跡の南側に近接して位置する。西側は調査区域外にかかり、南側は五領期の第25号溝跡によって削平されているため、北東コーナー部分のみが確認された。全体の規模、形態は不明であるが、比較的小型の住居と考えられる。炉跡、柱穴等は検出できなかったが、北東コーナーの壁面には住居外に張り出すようにオーバーハングして掘り込まれた小ピット1個が確認された。



第30図　第14～18号住居跡（L＝23.40ｍ）



第31図　第14・15・18号住居跡出土遺物

第14号住居跡出土遺物（第31図）

番号	器種	大きさ(cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	壺	底径　(10.0)	底部外面に木葉痕を残す。焼成不良のため器表は磨滅している。	A～D　細砂多量 焼成不良 灰白色	底部 60%　残存
2	小型壺	底径　(4.8)	底部のみの破片。磨滅のため調整は不明瞭。	A～D　粗砂 焼成普通 橙色	底部 80%　残存
3	甕	口径　(13.0)	口縁部は「く」の字状に外反する。頸部外面に日の粗い刷毛目を残す。口縁部内外面とも横撫でを施す。	A，B，D　細砂 焼成普通 褐灰色	口縁部 20%　残存

第15号住居跡出土遺物（第31図）

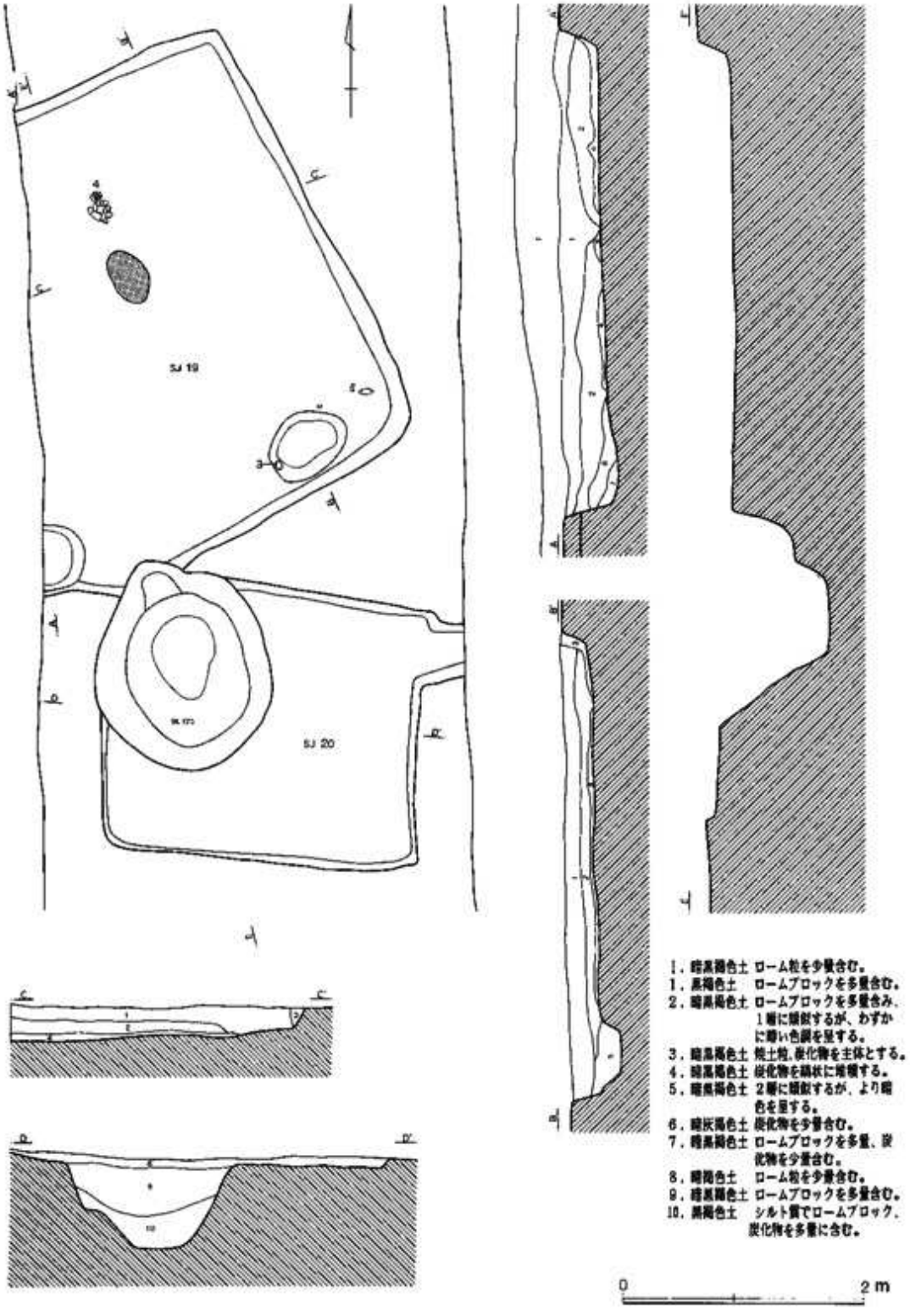
番号	器種	大きさ(cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	壺	底径　(7.0)	磨滅のため調整は不明瞭。内面篦撫で。	A～D　細砂多量 焼成普通 赤橙色	底部 60%　残存

第18号住居跡出土遺物（第31図）

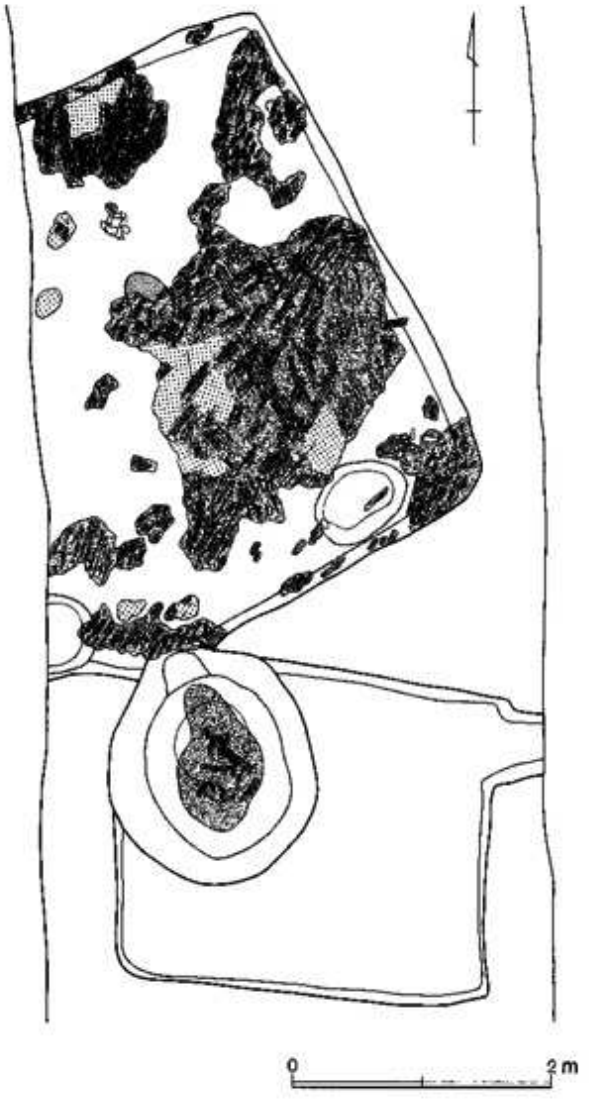
番号	器種	大きさ(cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	小型壺	口径　(9.8) 現存高　6.5	口唇端部がわずかに肥厚する。外面は刷毛目調整後、横撫で。頸部内面には目の細かい刷毛目。	A～D　細砂多量 焼成普通 浅黄橙色	口縁部 40%　残存

第19号住居跡（第32・33図）

108－69・70グリッドに位置する。西側が調査区域外にかかるため全体の形態、規模は不明であるが、一辺4.2m前後の正方形プランを呈するものと推定される。主軸方向は、N－25°－Wを示す。特徴的な付属施設として、南壁に住居外に張り出す第125号土壙が掘り込まれていた。



第32図　第19・20号住居跡、第125号土壙（L＝23.40ｍ）



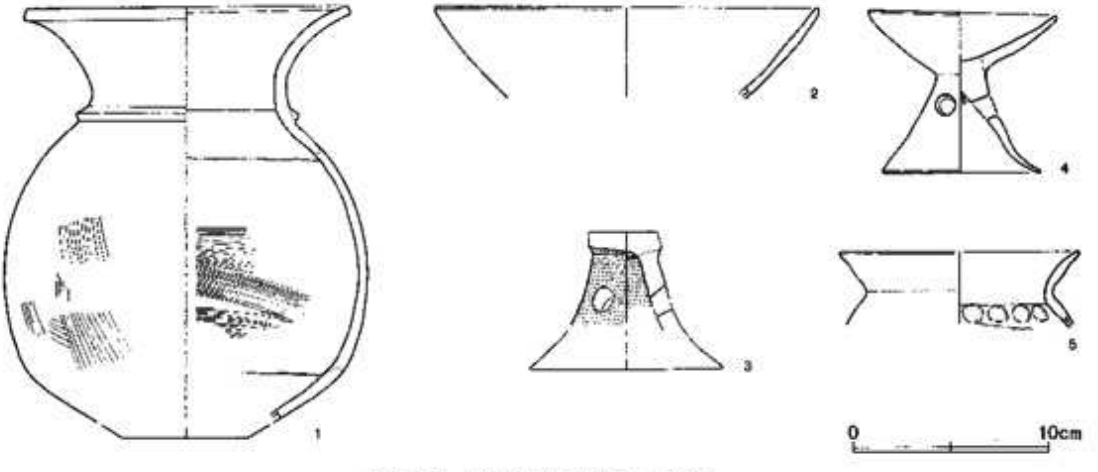
第33図　第19号住居跡、第125号土壙炭化材、焼土分布図

床面は概ね平坦であるが、全体に軟らかく硬質面などは認められなかった。掘り込みは、30cm前後を測る。炉跡は住居中央部やや北壁寄りに位置し、径50×42cmほどの楕円形を呈する。皿状に浅く掘り込まれた地床炉である。ピットは、南東コーナーと南西側の二箇所に確認された。なお、床面には多量の焼土、炭化灰、炭化木等が検出された。特に炉の周辺には藁状の炭化物の付着が顕著であった。おそらく焼失住居と考えられる。

第125号土壙は、長径1.96m、短径1.6m、深さ0.9mを測る楕円形を呈し、住居側は階段状に造作されている。

第20号住居跡（第32・33図）

108－70グリッドに位置し、第125号土壙と重複する。新旧関係は土層断面では本住居の方が新しく位置づけられるが、出土遺物がほとんどなく明確にし得ない。平面形は東西長2.5m、南北長2.9mの正方形プランを呈する。炉跡、貯蔵穴、柱穴等の施設は確認できなかった。



第34図　第19号住居跡出土遺物

第19号住居跡出土遺物（第34図）

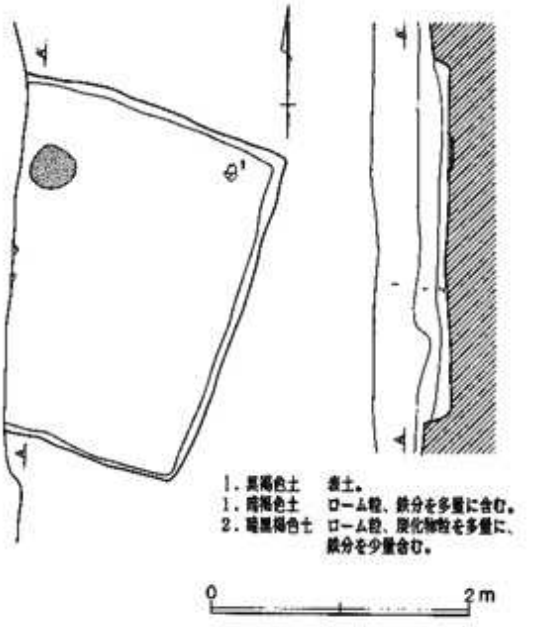
番号	器種	大きさ(cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	壺	口径 16.3 最大径 (18.6) 現存高 21.2	口縁部は大きく外反して開く。口唇部は面取りされ、内面がわずかに凹む。頸部には断面三角形の突帯が巡る。胴部はやや下膨れ気味。器面は磨滅しており、調整は不明瞭。	A～D 小礫 焼成普通 橙色	口縁部90% 胴部 40% 残存
2	高坏	口径 (19.6)	坏部外面は縦位の篦磨き。口縁部は内外面とも横撫で。外面には赤彩痕がわずかに残る。胎土は赤色粒子の混入が目立つ。	A～D 細砂少量 焼成良好 淺黄橙色	坏部 30% 残存
3	高坏	現存高 4.7	脚部上半部の破片で3方向に円孔を有する。孔径1.1cm。内外面とも赤彩が施される。器表が磨滅しているため調整は不明。	A～D 細砂少量 焼成普通 橙色	脚部 80% 残存
4	器台	口径 9.5 裾径 8.0 器高 8.3	受部はやや直線的な半球形を呈し貫通孔はない。脚部は裾部で大きく開き、3方向に円孔をもつ。孔径 1.0cm。風化のため細部の調整は不明瞭であるが、脚部内面に絞り目がみられる。	A～D 小礫 焼成普通 赤橙色	90% 残存
5	甕	口径 (12.2)	口縁部は「く」の字状に屈曲して開く。頸部内面には指頭圧痕、粘土紐積み上げ痕がみられる。器表が荒れているため、細かな調整は不明。	A，B 細砂多量 焼成普通 灰白色	口縁部 30% 残存

第21号住居跡（第35図）

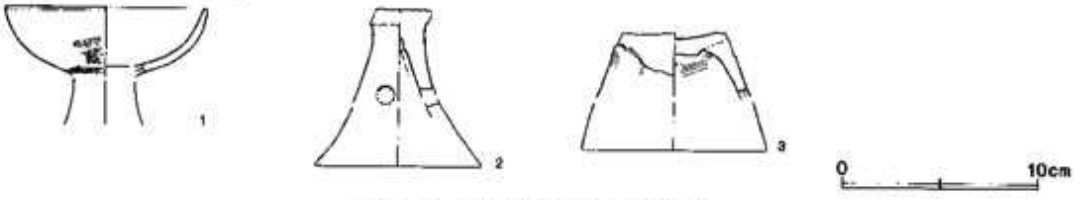
調査区南側の108－71グリッドに位置する。今回検出された住居跡の中では最も南に存在し、西側は調査区域外にかかる。確認部分の南北長は2.7mを測る。おそらく一辺3m前後の正方形プランを呈する小型住居と考えられる。主軸方向は、N－20°－Eを指す。

床面は概ね平坦で、全体に軟らかく、掘り込みは20cm前後と浅い。柱穴、貯蔵穴などの施設は確認できなかったが、北西コーナー寄りの位置に炉跡が確認された。炉跡は、径30cm前後の楕円形を呈する、皿状に浅く掘り込まれた地床炉である。

遺物は、北東コーナーから高坏の坏部が出土している。



第35図　第21号住居跡（L＝23.50m）



第36図　第21号住居跡出土遺物

第21号住居跡出土遺物（第36図）

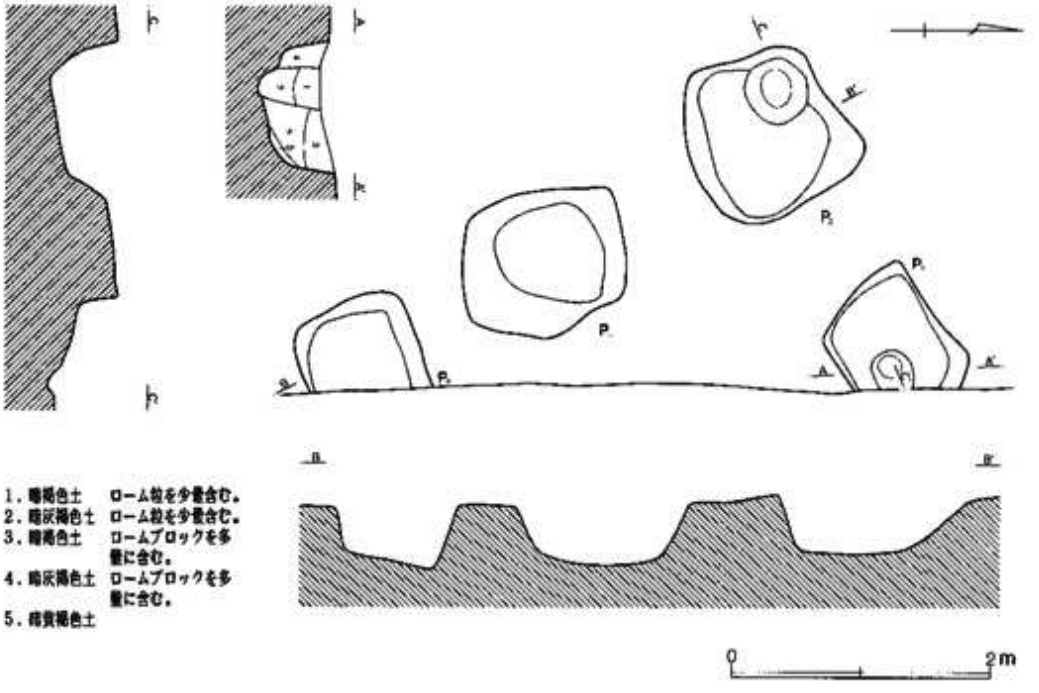
番号	器種	大きさ(cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	高坏	口径 10.2 現存高 3.5	坏部は半球状を呈する。外面刷毛目調整後、内外面とも横撫でを施す。	A～D 細砂多量 焼成普通 灰白色	坏部 70% 残存
2	高坏	現存高 4.7	脚部上半の破片。3方向に円孔を有し、内面に絞り目がみられる。孔径 0.9cm。	A～D 小礫 焼成普通 橙色	脚部 60% 残存
3	台付甕	現存高 3.3	台部内外面に目の粗い刷毛目を残す。底部内面は黒色に変色する。	A～D 細砂少量 焼成普通 橙色	台部 60% 残存

b．掘立柱建物跡（SB）

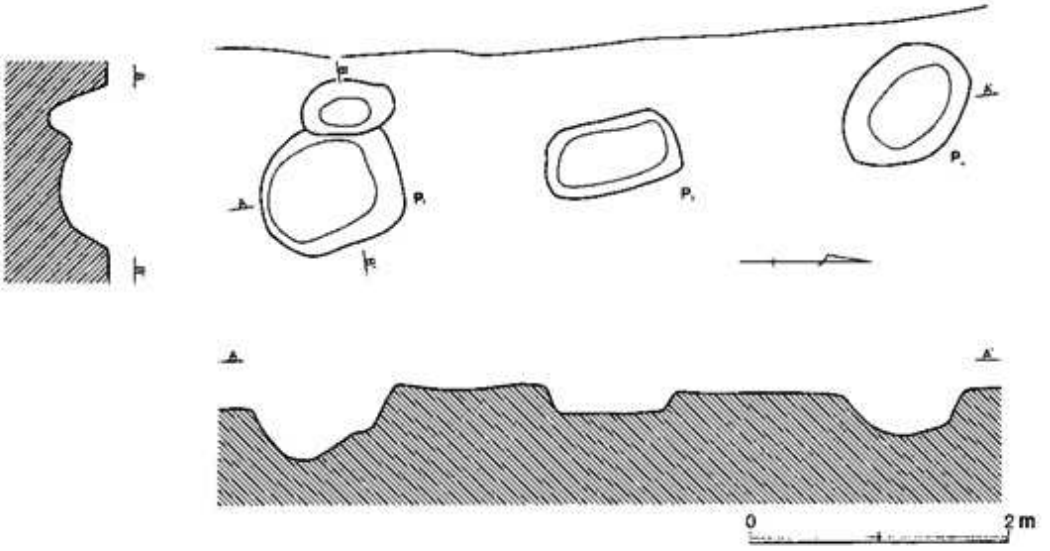
第1号掘立柱建物跡（第37図）

調査区南側の108－63グリッドに位置し、第8・9号住居跡と重複する。東側が調査区域外にかかるため全体の規模は不明であるが、柱穴列の方向性から、梁間2間の東西棟と推定される。柱間寸法は桁行、梁間とも1.8m等間である。主軸方向は、東西棟と仮定すればN－63°－Eを示す。

柱穴は、長軸1.3m前後の方形を呈する大きな掘り方である。確認面からの深さは、いずれも50cm前後を測る。覆土は第1・2層が柱痕に相当する。出土遺物がなく詳細な時期は不明である。



第37図　第1号掘立柱建物跡（L＝23.50m）



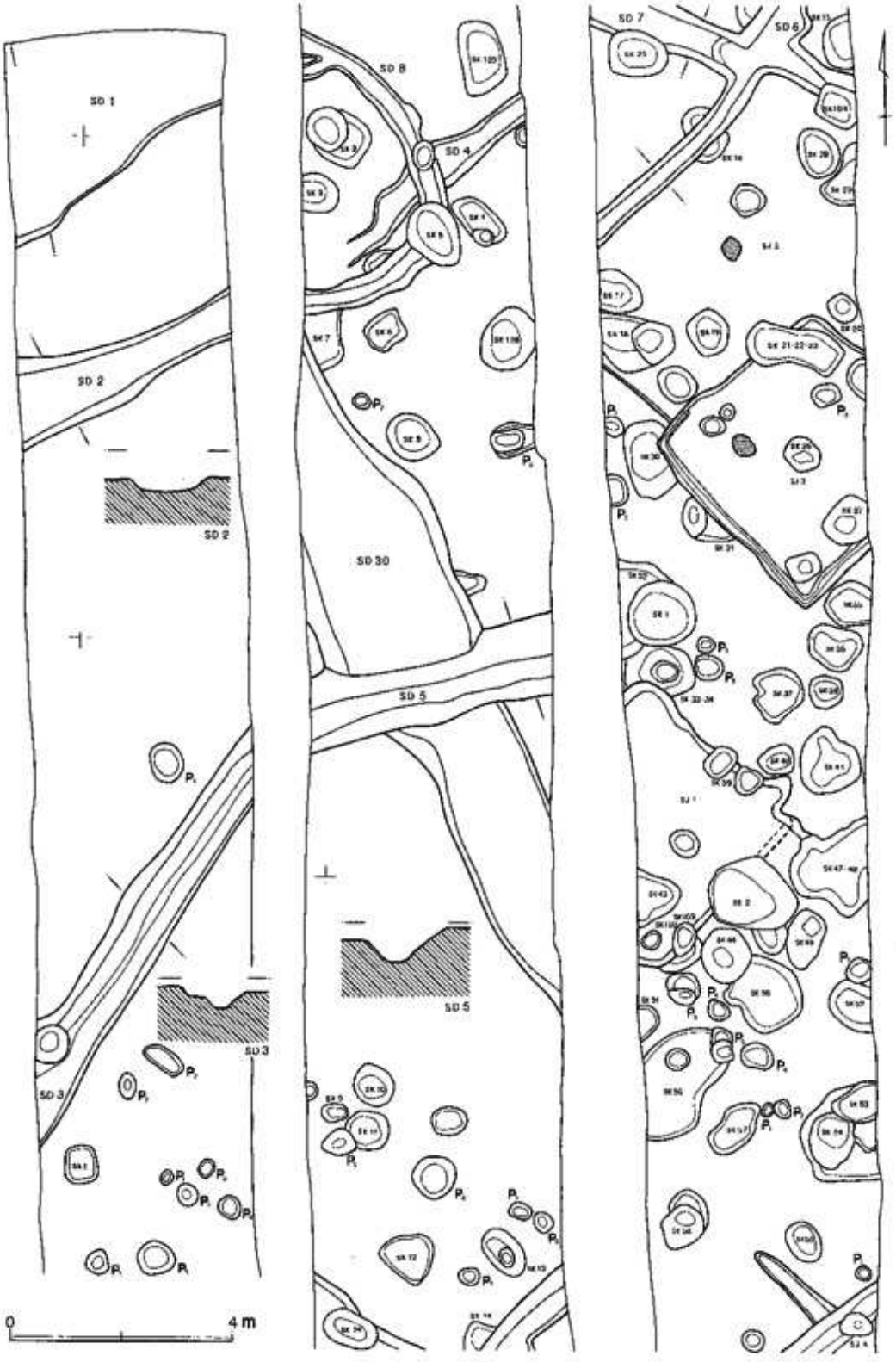
第38図　第２号掘立柱建物跡（L＝23.50ｍ）

第２号掘立柱建物跡（第38図）

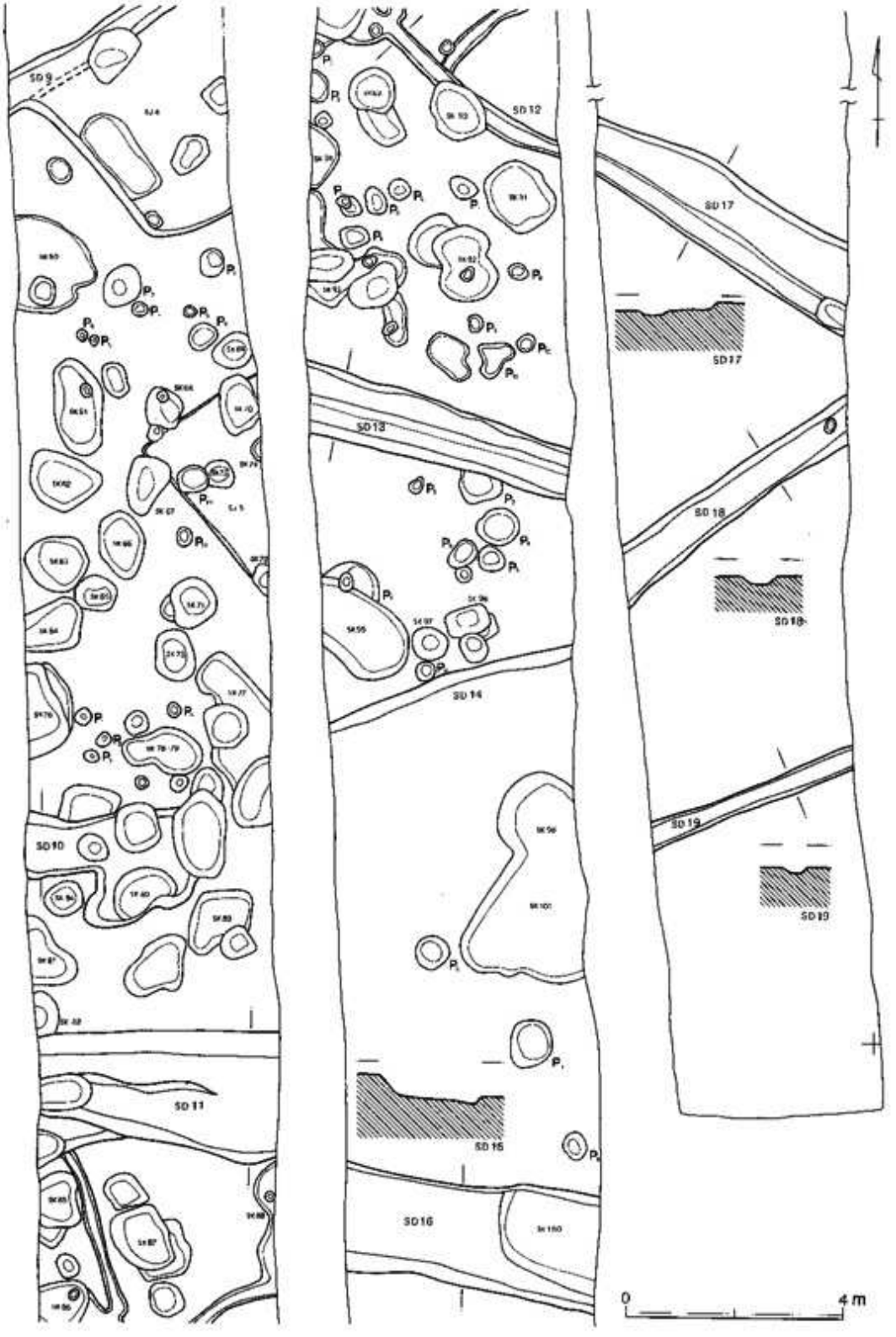
調査区南側の108－66・67グリッドに位置し、第21号溝跡と重複する。第１号掘立柱建物跡からは南へ約27m離れる。西側の大部分が調査区域外にのびるため、全体の規模は不明であるが、柱穴列の方向性から梁間２間の東西棟と推定される。梁間長4.4m、柱間寸法2.2mを測る。主軸方向は、東西棟と仮定すればN－84°－Eを示す。柱穴は、長径1.1m前後の楕円形ないし方形を呈し、深さは20～46cmとややばらつきがみられる。出土遺物が、少ないため詳細な時期は不明である。覆土の状態や柱穴の掘り方から古代に位置づけられるものと推定される。

C．溝　跡（SD）

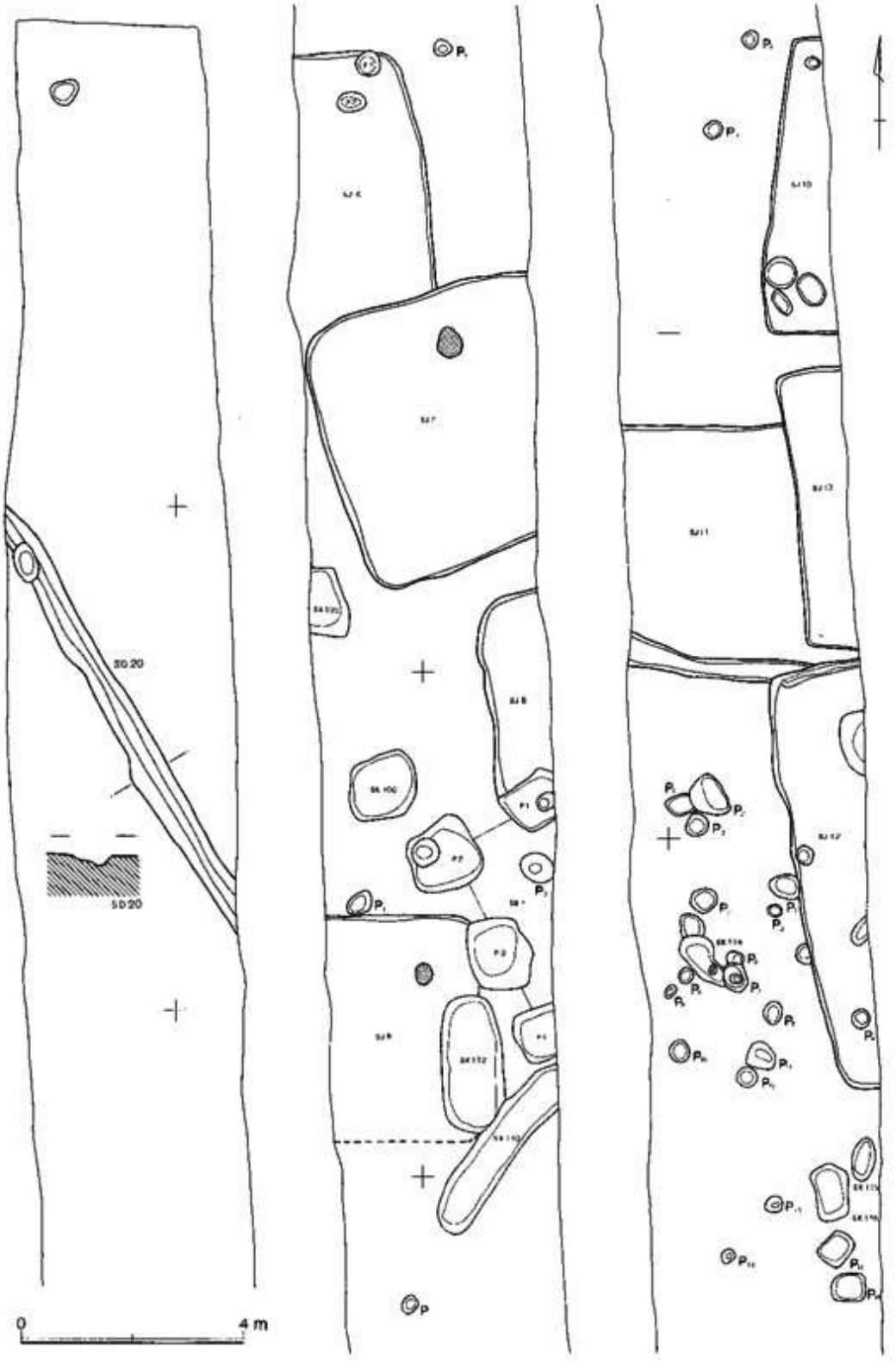
今回の調査では、全部で30条の溝跡が検出された。部分的な調査のため全容の明らかなものは少ないが、東西方向に走行するものが多い傾向がみられた。調査区中央部では、溝跡以外の遺構の分布が稀薄となっていることから、この部分は浅い谷部を形成していたものと想定される。遺物の出土量は全体に少なく詳細な時期は明確ではないが、調査区の南側に位置する第25号溝跡からは多量の古式土師器が出土している。調査区北端部の第１号溝跡は、緩やかな傾斜をもって調査区外にのびていることから埋没谷、あるいは河川跡となる可能性が高い。第８号溝跡は、出土遺物が少ないため時期は不明であるが、環状に巡る円形周溝状遺構である。第９号溝跡からは８世紀前半代の土師器が多量に出土し、螺旋状の暗文を施す土師器坏がみられた。土壙集中箇所の中に位置する第11号溝跡からは多量の土師器、須恵器片とともに円面硯の破片が出土している。調査区南端部の第29号溝跡は、幅広の溝で掘り込みが深く、覆土上層には天明の火山灰（1783年）が堆積していた。この溝は、その方向性などから第10地点で調査された第17号溝跡と同一の可能性が高い。以下、特徴的なものについてその概要を説明する。



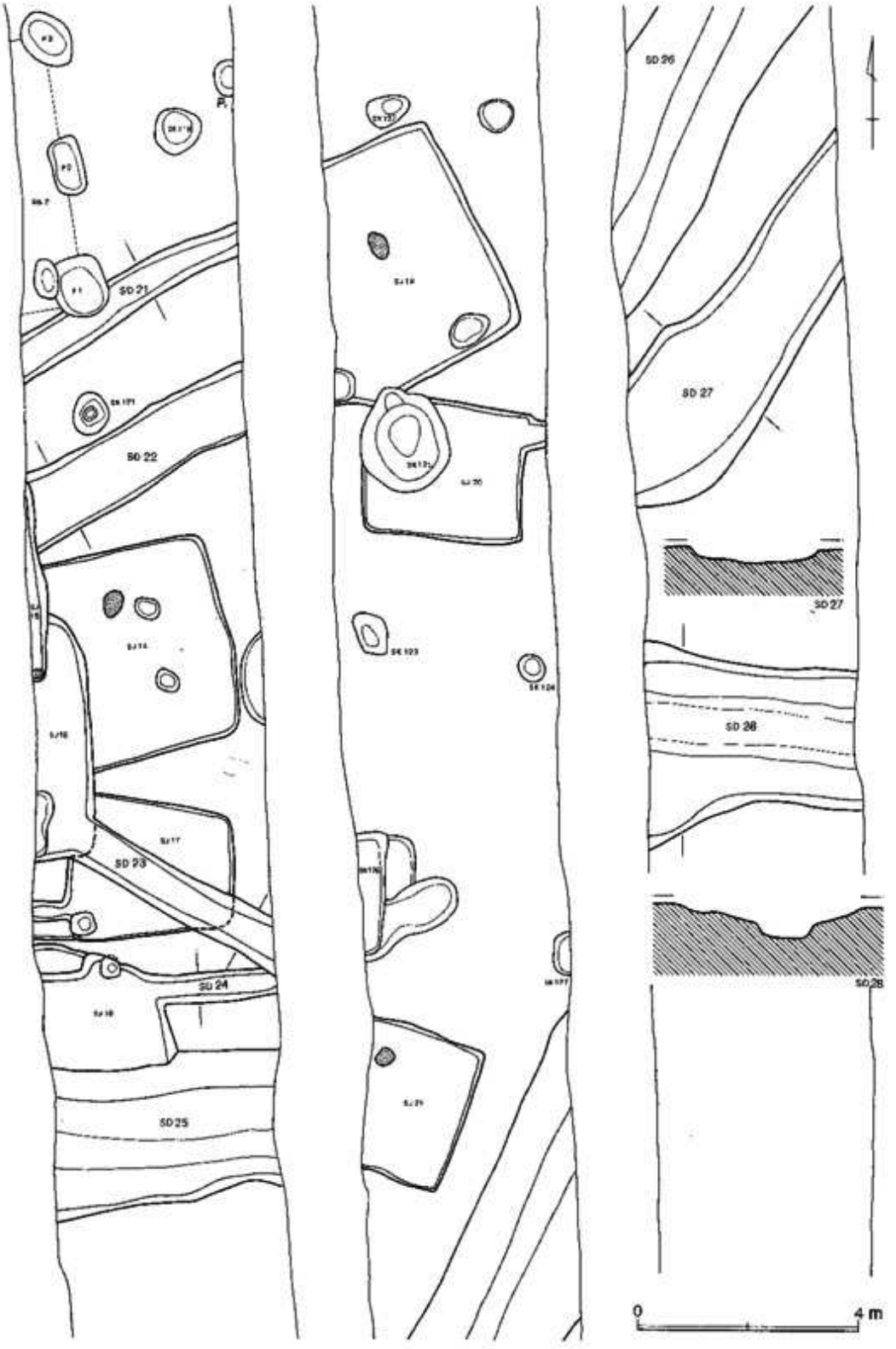
第39図　溝跡、土壙分布図(1)（L＝23.50ｍ）



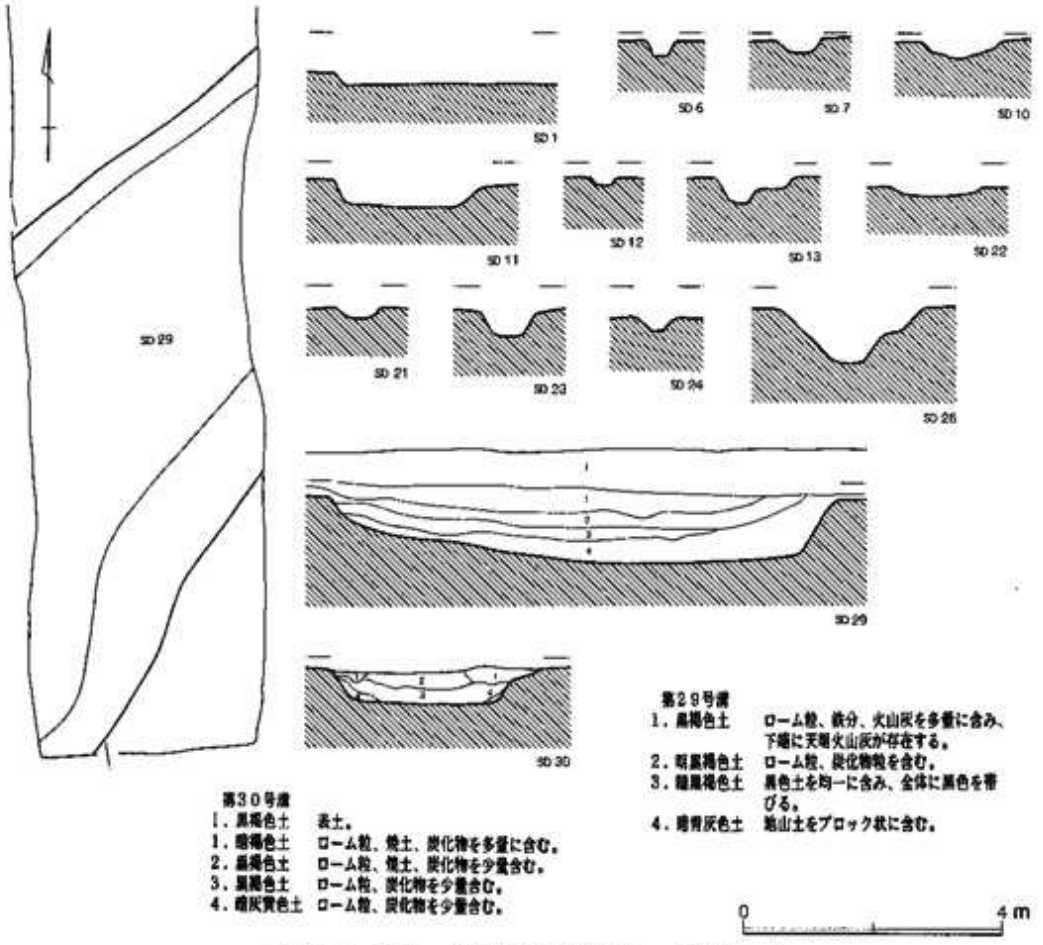
第40図　溝跡、土壙分布図(2)（L＝23.40 m）



第41図　溝跡、土壙分布図(3)（L＝23.40ｍ）



第42図　溝跡、土壙分布図(4)（L＝23.40ｍ）



第43図　溝跡、土壌分布図(5)（L＝23.60ｍ）

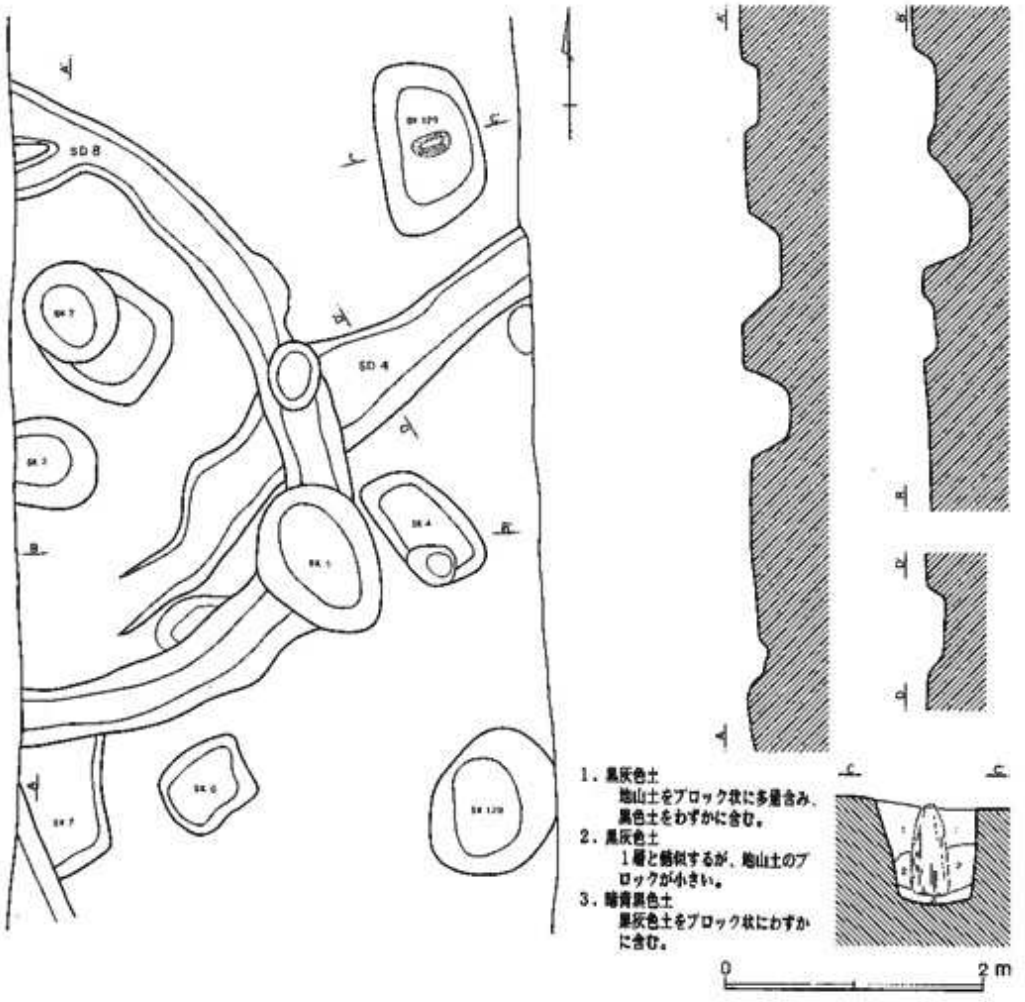
第1号溝跡（第39図）

調査区北端部の106・107－41・42グリッドに位置する。北側が調査区域外にかかるため全容は明らかでないが、確認幅3.6mを測り、深さは0.2m前後と浅く、緩やかに北側へ傾斜している。

出土遺物には、有段口縁の土師器坏、須恵器高台付坏、須恵器横瓶、土師器甕などが出土している。このうち土師器坏は、口径の小型化の進んだもので7世紀後半代に位置づけられる。須恵器高台付坏の内外面には判読不明の墨書がみられ、9世紀代に位置づけられる。このように出土遺物には古墳時代後期から平安時代にわたる長期間の遺物が混在し、かつ覆土の状態などから溝跡とするよりも、埋没谷、あるいは河川跡の可能性が高い。

第3号溝跡（第39図）

調査区北側の106・107－43グリッドに位置する。南西から北東に向かって走り、幅1.1m、深さ0.35mを測る。断面形は二段に掘り込まれた台形を呈する。出土遺物は、有段口縁の土師器坏、放射状暗文を施す坏が出土している。時期は、7世紀後半代に位置づけられる。



第44図　第4・8号溝跡、第129号土壙（L＝23.50 m）

第6号溝跡（第39図）

第2号住居跡と重複し、南西から北東に向かって走る。遺物には土師質の小皿、緑釉陶器がある。

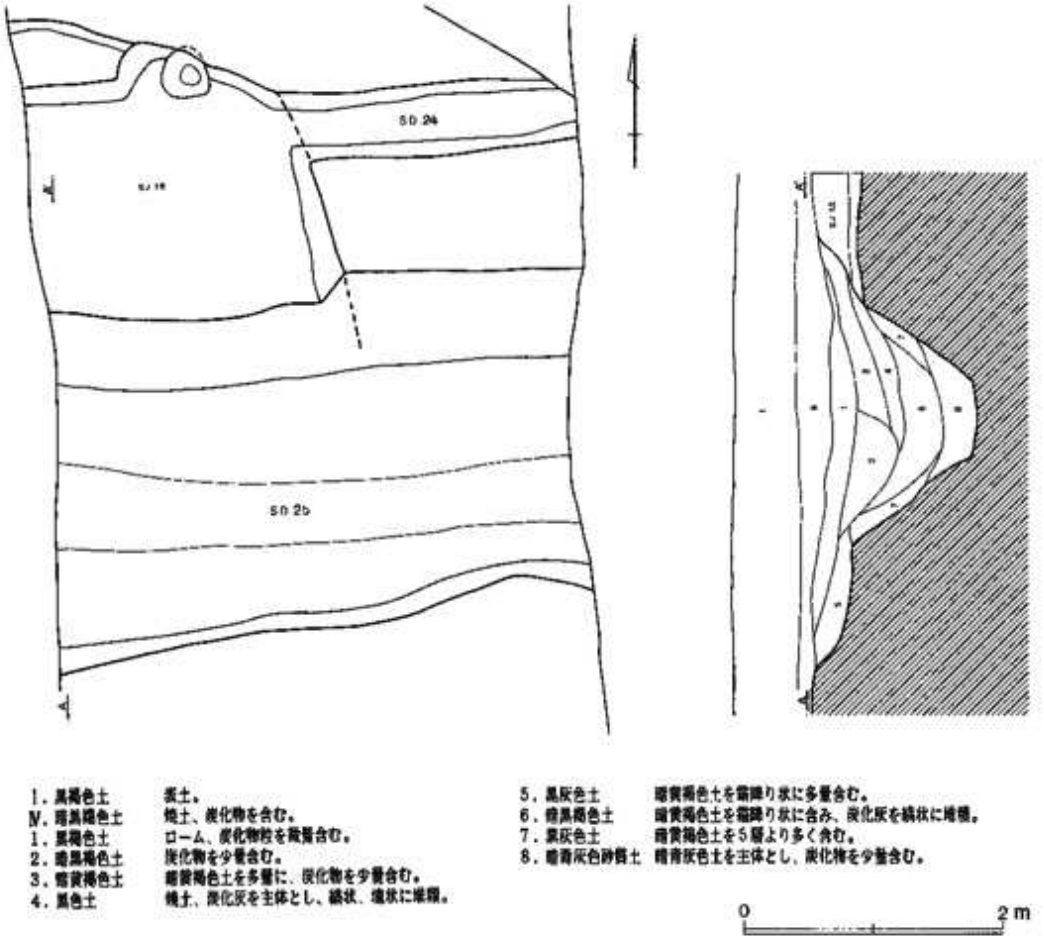
第8号溝跡（第39・44図）

107－44グリッドに位置する。西側が調査区域外にかかるため明確ではないが、幅50cm、深さ12cm前後の小規模な溝を環状に巡らした円形周溝状の遺構と推定される。推定直径は約5mを測る。

出土遺物がなく、時期や性格については明確ではない。

第9号溝跡（第39・40図）

107－49グリッドに位置する。第4号住居跡と重複し、住居を切っている。しかし、出土遺物の検討から、両者の時期差はあまりないものと考えられる。幅60cm、深さ20cmを測る小規模な溝である。遺物は丸底の土師器坏、螺旋状暗文を施す坏、環状鈕の須恵器蓋などが出土している。



第45図　第25号溝跡（L＝23.40ｍ）

第11号溝跡（第40図）

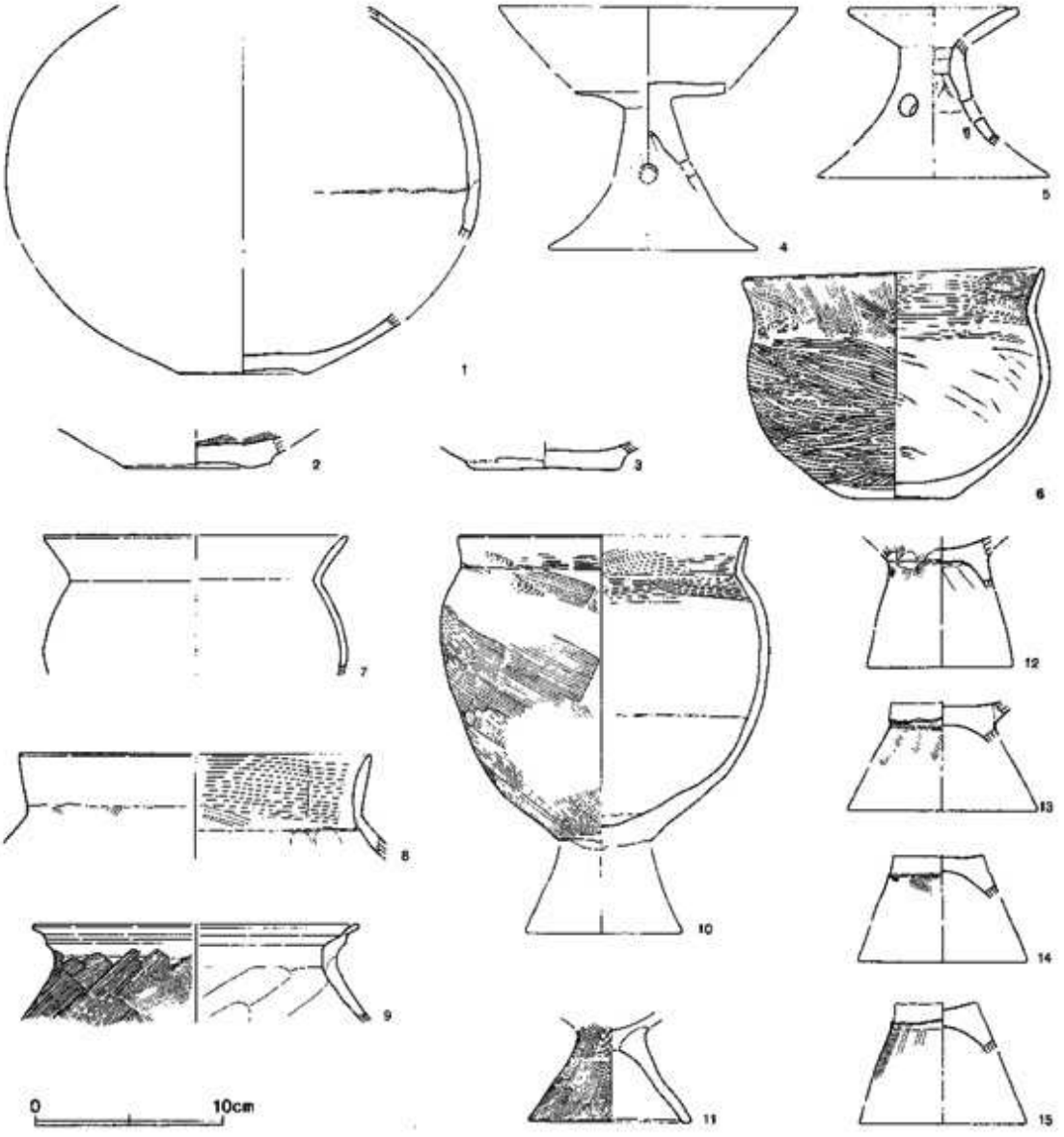
土壙の集中する107－51グリッドに位置する。東西方向に走行し、幅2.4m、深さ0.4mを測る。溝底面は凹凸がみられ、壁は急角度で立ち上がる。遺物は須恵器を主体とし、他に円面硯がある。

第25号溝跡（第42・45図）

108－69グリッドに位置し、第18号住居跡を切って掘削されている。東西方向に走り、幅2.8m、深さ1.2mを測る。断面形は壁の立ち上がり角度の急な台形を呈する。覆土第４・６層には多量の炭化灰が含まれていた。遺物は、壺、高杯、器台、鉢、甕、台付甕、Ｓ字状口縁台付甕等の多量の古式土師器とともに、板状に加工したスギ材片が出土している。

第26号溝跡（第42図）

調査区南側の108－71・72グリッドに位置する。南西から北東方向に走行し、幅2.3m、深さ0.8mを測る。断面形は二段に掘り込まれた台形を呈する。覆土中から馬の脛骨が出土している。

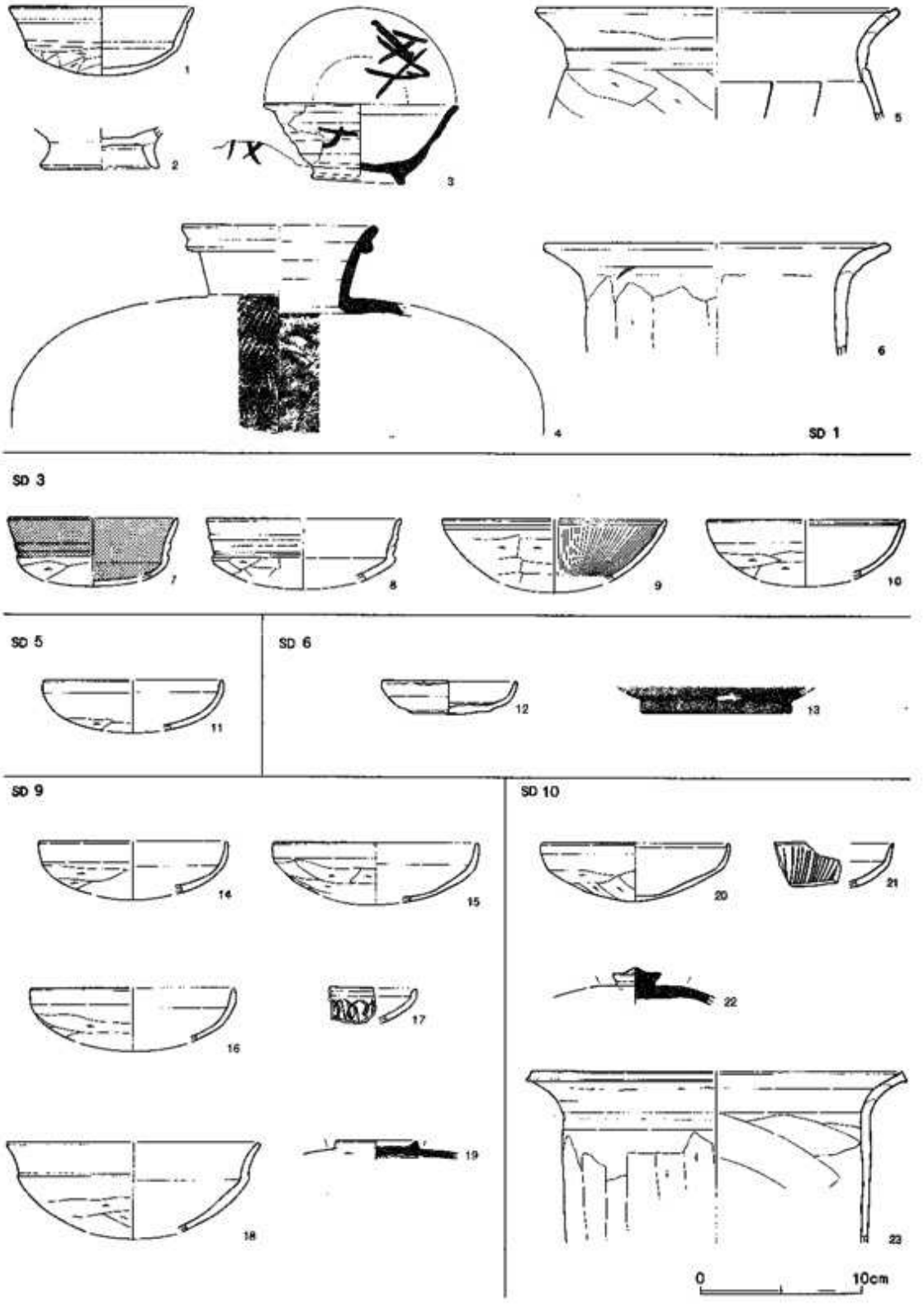


第46図　第25号溝跡出土遺物

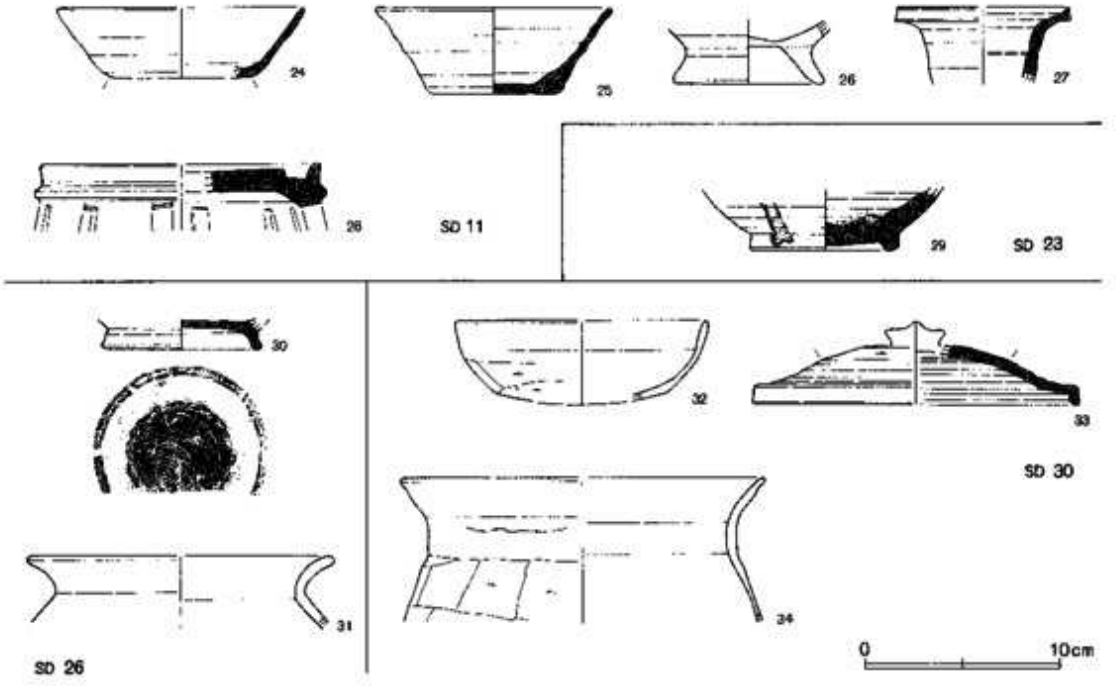
第25号溝跡出土遺物　(第46図)

番号	器種	大きさ(cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備　考
1	壺	最大径 (25.2) 底径　6.9	胴部は形の整った球胴形を呈するものと考えられる。底部は上げ底状を呈する。全体に器面が磨滅し調整は不明瞭。胴部内面に粘土紐の積み上げ痕を残す。図上復元。	A～D　小礫 焼成普通 にぶい橙色	胴部　40% 底部　完存
2	壺	底径　7.7	底部周縁部がわずかに厚くなる輪台状を呈する。内面に刷毛目調整を施す。	A～D　細砂少量 焼成普通 橙色	底部のみ残存

番号	器種	大きさ(cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
3	甕	底径 7.8	わずかに突出する平底を呈する。磨滅のため調整は不明瞭。	A～D 細砂少量 焼成普通 にぶい橙色	底部のみ残存
4	高坏	接合部径 2.5	坏底部は、ほぼ水平。脚部は3方向に透孔を有する。孔径 1.2cm。脚部外面は縦位の篦磨き。刷毛目が一部残る。脚部内面に絞り目がみられる。	A～D 細砂少量 焼成良好 褐灰色	坏底部完存 脚部 20%残存
5	器台	口径 (8.8) 接合部径 3.6 現存高 7.3	受部は直線的に外傾する。脚部は「ハ」の字状に大きく開き3方向に透孔を有する。孔径 1.1cm。	A～D 細砂少量 焼成良好 灰白色	受部 20% 脚部 70%残存
6	鉢	口径 15.8 底径 5.8 最大径 16.0 器高 12.2	口縁部は緩やかに外反する。胴部はやや上位に最大径を有する。底部は平底を呈し、わずかに上げ底。口縁部外面は縦位の篦磨き。内面は横位の刷毛目、胴部外面は横位の篦磨きを施す。内面は丁寧に撫でを施す。	A～D 細砂少量 焼成良好 口縁部 灰白色 胴部 暗褐色	90% 残存
7	甕	口径 (16.0) 最大径 (16.2)	口縁部は「く」の字状に外反する。胴部中位に最大径を有する。磨滅が著しく調整等は不明。	A～D 小礫 焼成やや不良 橙色	40% 残存
8	甕	口径 (18.6)	小片のため口径は推定復元。口縁部はあまり開かず、直立気味に立ち上がる。口縁部内面には横方向の刷毛目を施す。	A～D 細砂少量 焼成やや不良 にぶい橙色	20% 残存
9	S字甕	口径 (17.1)	口縁部下段は緩やかに外反する。中段は垂直に立ち上がり、大きく外反する上段に至る。口唇端部内面は凹線状。胴部はあまり肩がはらない。胴部外面は目の粗い斜め刷毛。内面は斜位の撫で。	A～D 細砂少量 焼成良好 浅黄橙色	30% 残存
10	台付甕	口径 15.3 最大径 17.5 現存高 16.6	口縁部は短かく外傾して立ち上がる。胴部は最大径をやや上位に有する。口縁部は内外面とも刷毛目後、横撫でを施す。胴部外面は斜位の刷毛目。内面は撫でを施す。	A～D 粗砂 焼成不良 赤褐色	70% 残存
11	台付甕	台径 8.6 現存高 5.0	接合部から剥離している。台部外面には目の細かい刷毛目を丁寧に施す。内面は撫で調整。	A～D 細砂少量 焼成良好 橙色	台部 完存
12	台付甕	現存高 4.7	胴部から接合部にかけて刷毛目調整。台部内面は撫で。胴部内面は黒色に変色する。	A～D 細砂多量 焼成普通 にぶい橙色	図示部のみ残存
13	S字甕	現存高 3.6	接合部で剥離している。台部外面は鋸歯状の刷毛目調整、内面は撫でを施す。胴部内面は黒色に変色し、器面が荒れる。	A～D 細砂少量 焼成良好 にぶい橙色	台部 50% 残存
14	台付甕	現存高 3.4	胴部との接合部から剥離している。外面は刷毛目調整。内面は丁寧な撫で。	A～D 細砂少量 焼成普通 にぶい橙色	台部 60% 残存
15	台付甕	現存高 5.1	接合部より剥離する。外面には目の粗い刷毛目。内面は撫で。	A～D 細砂少量 焼成普通 灰白色	台部 70% 残存



第47図　溝跡出土遺物(1)



第48図　溝跡出土遺物 (2)

溝跡出土遺物（第47・48図）

番号	器種	大きさ(cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備　考
1	坏	口径　11.2 器高　4.2	口縁部は沈線により段を作り出す。口縁部外面から内面にかけて横撫で。体部外面は篦削り。	A～D　細砂多量 焼成普通 橙色	60%　残存 (1号溝)
2	高台椀	高台径　7.0	高台は「ハ」の字状に大きく外反する。全体に磨滅が著しい。	A，B，D　細砂 焼成普通 灰白色	底部　完存 (1号溝)
3	高台椀 須恵器	口径　12.0 高台径　5.8 器高　4.8	底部回転糸切り離し後、高台を貼付。体部は外傾して立ち上がり、口縁部で大きく外反する。体部内外面に墨書がみられる。内面には「我」と考えられる一字が、外面には欠損部に判読不明の二字が書かれている。	A，B，D　細砂 焼成良好 淡黄色	70%　残存 (1号溝)
4	横瓶 須恵器	口径　(12.0)	有段口縁で、口唇部を丸くおさめる。胴部外面は平行叩き目。内面は半円形の当て具痕が残り、凹凸が著しい。	A，B，D　細砂 焼成良好 にぶい赤褐色	40%　残存 (1号溝)
5	甕	口径　(22.2) 現存高　6.8	口縁部は大きく外反して開く。口唇部は丸くおさめられ、内面に小さな段をもつ。口縁部内外面とも横撫で。胴部外面篦削り。内面篦撫で。	A～C　粗砂 焼成普通 橙色	40%　残存 (1号溝)
6	甕	口径　(21.0) 現存高　6.9	口縁部は大きく外反して開く。胴部はほとんど張りのない長胴形。頸部外面には工具の当った痕跡がみられる。口縁部内外面横撫で。胴部外面縦位の篦削り。	A～D　粗砂 焼成良好 にぶい褐色	50%　残存 (1号溝)

番号	器種	大きさ(cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備　考
7	坏	口径　(10.4)	外反して開く口縁部下位に小さな段を作り出す。口縁部外面から内面にかけて横撫で。体部外面篦削り。黒色処理を施す。	A～D　細砂少量 焼成良好 にぶい橙色	30%　残存 (3号溝)
8	坏	口径　(12.0)	口縁部中位に突線状の段を有する。口縁部外面から内面にかけて横撫で。体部外面は篦削り。口縁部外面に部分的に煤状のものが付着する。黒色処理の可能性が強い。	A～D　細砂多量 焼成良好 にぶい褐色	30%　残存 (3号溝)
9	坏	口径　(13.8) 現存高　3.9	半球形を呈し、外面口唇部直下を浅く凹め、内面に一条の沈線を巡らす。体部外面は横位の篦削り。内面には放射状に暗文を施す。	A～C　細砂少量 焼成良好 赤褐色	20%　残存 (3号溝)
10	坏	口径　(12.2)	口縁部が緩やかに湾曲して上方に立ち上がる丸底の坏。口唇部は内面がわずかに肥厚する。口縁部外面から内面にかけて横撫で。体部外面篦削り。	A，B，D　細砂 焼成良好 にぶい褐色	40%　残存 (3号溝)
11	坏	口径　(11.0) 現存高　3.1	口縁部が短かく直立する丸底の坏。口唇部は丸くおさめる。口縁部外面から内面にかけて横撫で。体部外面は篦削り。	A～D　細砂多量 焼成良好 にぶい橙色	30%　残存 (5号溝)
12	皿 土師質	口径　8.4 器高　2.0	整形がやや粗雑で手捏ねに近い。わずかに突出する底部から内湾して立ち上がる。	A，B　細砂少量 焼成普通 灰褐色	80%　残存 (6号溝)
13	皿 緑釉	高台径　(9.2)	高台はわずかに外傾する。ほぼ全面に緑釉が掛かる。	A，B　良撰 焼成良好 淡緑色	40%　残存 (6号溝)
14	坏	口径　(11.6) 現存高　3.3	口縁部がほぼ直立する丸底の坏。口唇部は丸くおさめる。口縁部外面から内面にかけて横撫でを施す。体部外面は篦削り。	A，B，D　細砂 焼成良好 にぶい褐色	30%　残存 (9号溝)
15	坏	口径　12.6 現存高　3.7	口縁部がほぼ直立する丸底の坏。口縁部外面から内面にかけて丁寧に横撫でを施す。体部外面は篦削り。	A，B，D　細砂 焼成良好 淡橙色	60%　残存 (9号溝)
16	坏	口径　(12.6) 現存高　3.3	口縁部がほぼ直立する丸底の坏。口縁部外面から内面にかけて横撫でを施す。体部外面は篦削り。	A，B，D　細砂 焼成良好 にぶい褐色	30%　残存 (9号溝)
17	坏		口縁部は短かく上方に立ち上がる。内面には放射状に暗文を施した後、螺旋状の暗文を施す。	A，B，D　細砂 焼成良好 橙色	(9号溝)
18	坏	口径　(15.6) 現存高　5.5	口縁部と体部の境に小さな段をもち、口縁部は大きく外反して開く。口縁部外面から内面にかけて横撫でを施す。体部外面は篦削り。	A，B，D　細砂 焼成良好 にぶい褐色	20%　残存 (9号溝)
19	蓋 須恵器	鈕径　5.0	高台状の環状鈕をもつ蓋。鈕端部は断面三角形を呈する。頂部外面には回転篦削りを施す。	A，B　細砂多量 焼成良好 暗青灰色	鈕のみ完存 (9号溝)
20	坏	口径　11.6 器高　3.6	口縁部がやや内湾気味に立ち上がる丸底の坏。口唇部は内面が肥厚し丸くおさめる。口縁部外面から内面にかけて横撫でを施す。体部外面篦削り。	A，B，D　細砂 焼成良好 橙色	60%　残存 (10号溝)

番号	器種	大きさ(cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備　考
21	坏		口縁部はほぼ直立する。内面には放射状の暗文が施される。	A，B，D　細砂 焼成良好 橙色	(10号溝)
22	蓋 須恵器	鈕径　3.0	擬宝珠形の鈕。天井部外面は回転篦削りを施す。胎土中には、多量の白色針状物質の混入がみられる。南比企産。	A，B，F　細砂 焼成良好 灰色	図示部のみ残存 (10号溝)
23	甕	口径　(23.0) 現存高　10.5	口縁部は大きく外反して開く。口唇部は上下方にわずかにつまみ出される。胴部は張りのない長胴形を呈する。口縁部は内外面とも横撫でを施し粘土紐積み上げ痕がわずかに残る。胴部外面は縦位の篦削り。内面は斜位の撫でを施す。	A，B，C　細砂 焼成良好 灰白色	50%　残存 (10号溝)
24	坏 須恵器	口径　(12.6) 底径　(7.3) 器高　3.6	底部は欠損のため明瞭でないが、周辺篦削り調整と考えられる。胎土には多量の白色針状物質を含む。南比企産。	A，B，F　細砂 焼成良好 青白色	20%　残存 (11号溝)
25	坏 須恵器	口径　12.0 底径　6.5 器高　4.4	底部は回転糸切り離し未調整。体部は直線的に外傾し、口唇部は玉縁状に肥厚する。ロクロ整形痕顕著。	A～C　細砂多量 焼成良好 灰白色	40%　残存 (11号溝)
26	高台椀	高台径　7.6	「ハ」の字状に大きく開く、器肉の厚い高台が付く。ロクロ整形。	A～C　細砂少量 焼成良好 橙色	図示部のみ残存 (11号溝)
27	長頸瓶 須恵器	口径　(8.8)	口縁部で大きく外反して開き、口唇部は上下方につまみ出す。	A，B　細砂少量 焼成良好 暗灰色	30%　残存 (11号溝)
28	円面硯		小片のため形態は推定復元。陸部はほぼ平らで、使用時の磨滅により滑らか。方形の透し2孔のみを残す。	A，B　細砂少量 焼成良好 灰色	30%　残存 (11号溝)
29	長頸瓶 須恵器	高台径　7.4	底部回転篦削り後、高台を貼付する。高台は幅広くしっかりした作り。内外面に濃緑色の自然釉の付着がみられる。	A，B　細砂多量 焼成良好 灰白色	図示部のみ残存 (23号溝)
30	高台椀 須恵器	高台径　8.0	底部回転糸切り離し後高台を貼付。高台は「ハ」の字状に開き、外面中位に稜をもつ。内面には煤状の付着物が認められる。	A，B　細砂多量 焼成良好 暗灰色	図示部のみ残存 (26号溝)
31	甕	口径　(15.4)	口縁部は「く」の字状に強く外反する。口縁部内外面は横撫で。全体に器壁が荒れている。	A，B，C　粗砂 焼成不良 にぶい橙色	40%　残存 (26号溝)
32	坏	口径　(12.8) 現存高　4.1	口縁部はやや外傾して開く。体部は平底気味。口縁部外面から内面にかけて横撫で。体部外面篦削り。	A，B　細砂少量 焼成良好 にぶい橙色	40%　残存 (30号溝)
33	蓋 須恵器	口径　(16.6)	端部はほぼ垂直に屈曲し、丸く肥厚する。天井部の張りは強く、頂部外面に回転篦削りを施す。南比企産。	A，B，F　細砂 焼成良好 灰色	30%　残存 (30号溝)
34	甕	口径　(18.5) 現存高　7.4	口縁部は「コ」の字状に近い。口縁部内外面とも横撫で。胴部外面は横方向の篦削り。胴部内面は丁寧に撫でを施す。	A，B，C　粗砂 焼成普通 暗赤褐色	30%　残存 (30号溝)

d．井 戸 跡（SE）

第1号井戸跡（第49図）

第1号住居跡北側の107－48グリッドに位置し、第32～34号土壙と重複する。直径約1.4m、深さ0.9mを測る円形プランを呈する。遺物はほとんど出土していない。

第2号井戸跡（第49図）

調査区北側の107－48グリッドに位置し、第1号住居跡と重複する。長軸1.7m、短軸1.3mの不整円形を呈し、深さ約1mを測る。覆土の上層から中層にかけて木材片が4点出土している。加工痕のみられる建築部材で、樹種同定の結果クリ材3点、アカガシ亜属1点である。他には、7世紀前半代の土師器坏が出土している。（旧番号 SK46）

e．土 壙（SK）

土壙は、調査区北半部の107－45～54グリッドにかけて集中して確認された。その分布は、微高地上を中心に立地していた。調査中、重複のため消滅してしまったものや、番号を付してないものがあるため正確な基数は把握し得ないが、現状では114基を数える。平面プランは、円形、方形、不整形など多様であり、規模も1m前後から4m前後とさまざまである。調査区が狭く制約があったため、配置関係に規則性は看取できなかったが、第129号土壙からは割材による柱材が検出されており、掘立柱建物跡や柵列などが含まれている可能性も十分考えられる。覆土の観察では、A類　暗黒褐色土　炭化木・焼土ブロックを多量に混入する、B類　暗黒褐色土　炭化木・焼土・ローム粒を混入する、C類　黒褐色土の3つに大きく分けられ、B・C類の覆土が主体を占めていた。

第53・54号土壙は、107－49グリッドに位置し、重複関係がみられる。直径1m前後の円形プランを呈し、深さ42～54cmを測る。第53号土壙からは炭化材が、第54号土壙からはクリ材の木片が出土している。

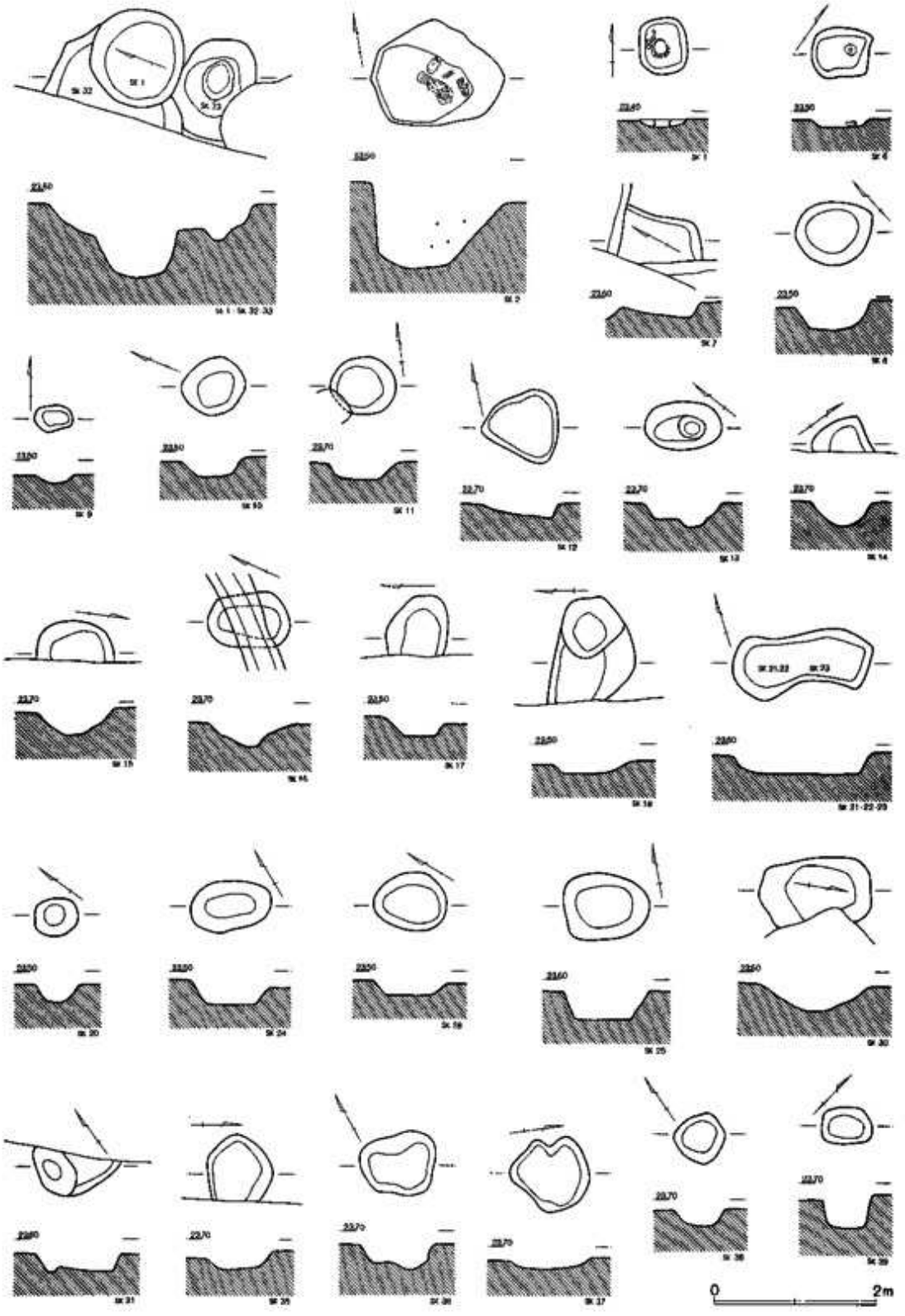
第85号土壙は、107－51・52グリッドに位置する。検出部分の長さ134cm、深さ48cmを測る不整形を呈し、覆土中からイノシシの臼歯が出土している。

第98・101号土壙は、107－53・54グリッドに位置する。長軸376cm、深さ44cmを測る不整形を呈する大型の土壙である。覆土の観察によると、薄くレンズ状に堆積した炭化灰層が確認された。

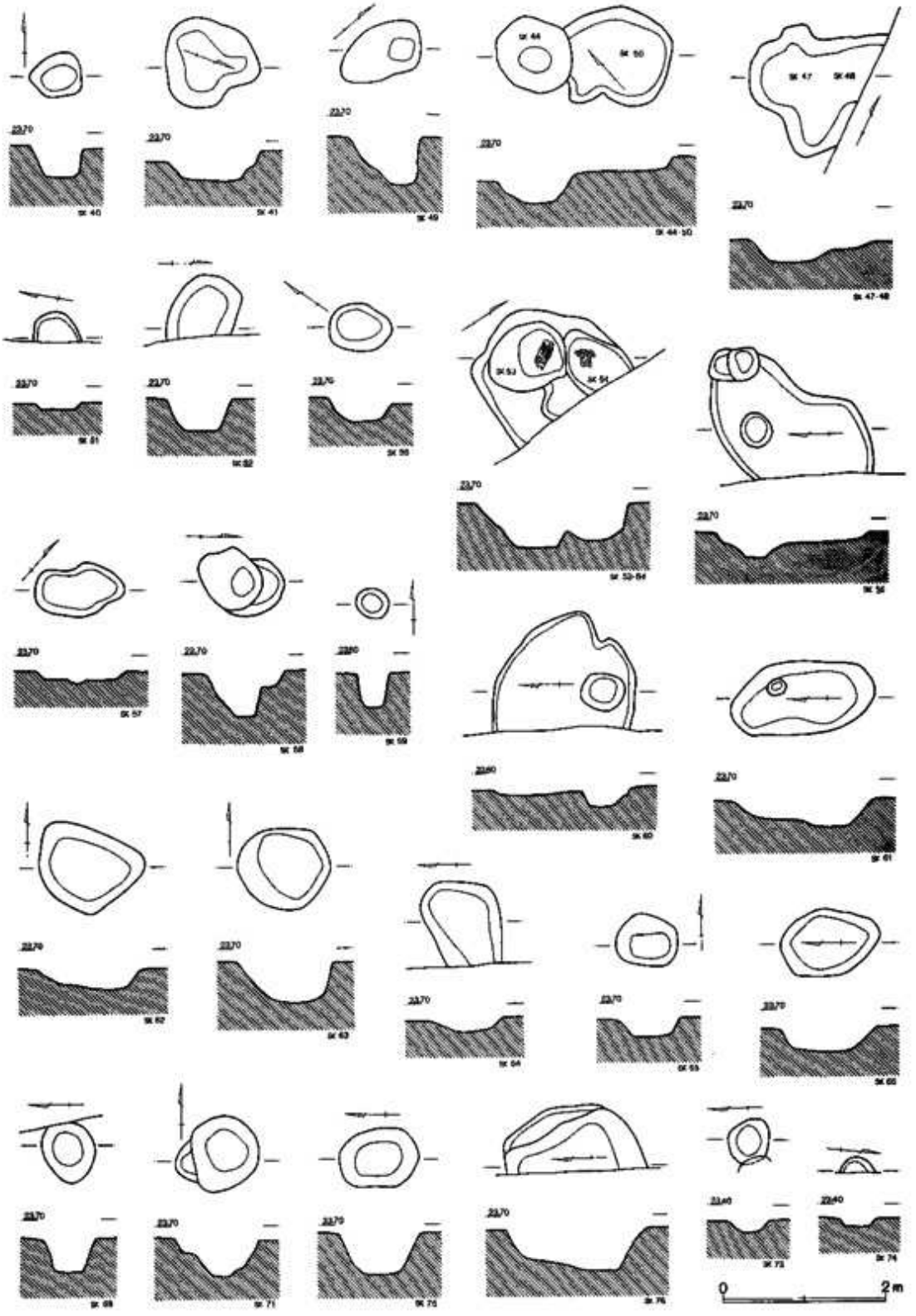
第129号土壙（第44図）は、107－44グリッドに位置する。長軸126cm、短軸80cm、深さ54cmを測る長方形の土壙である。ヒノキの割り材による柱が良好な状態で検出されている。柱材は、長さ67.5cm、幅23cmを測る大きなものである。共伴遺物がなく時期は不明である。

なお、107－50グリッドに位置するピット6からは、竹が埋め込まれた状態で検出されている。

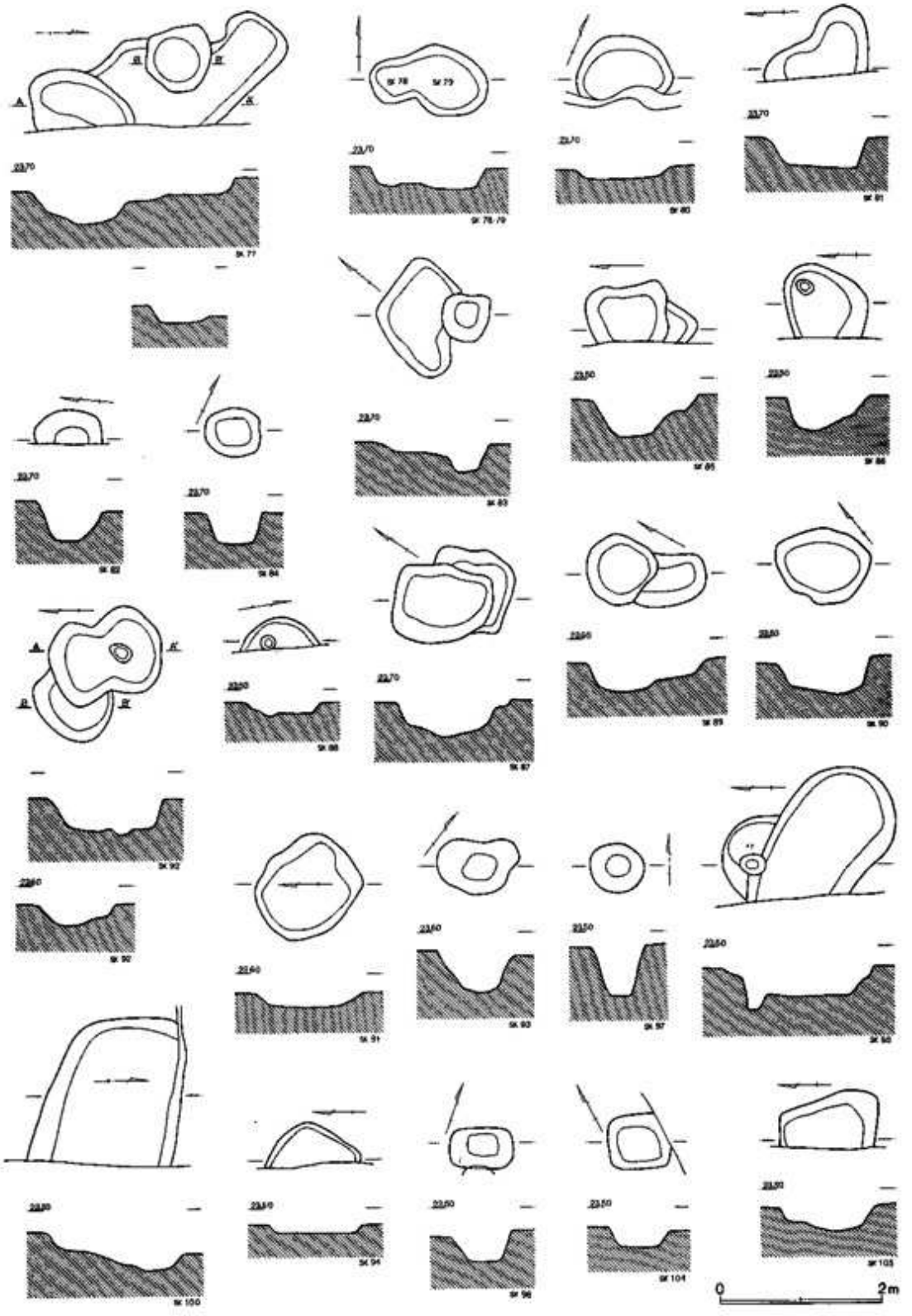
遺物は全体に少なく、所産時期を示す遺物はほとんど出土していないが、第1号土壙からは、須恵器高台付椀と倒立した状態で土師器甕が出土している。第27・34号土壙からは緑釉陶器の稜椀が出土し注目される。他には、第45号土壙から比企型の坏と有段口縁の坏が出土している。



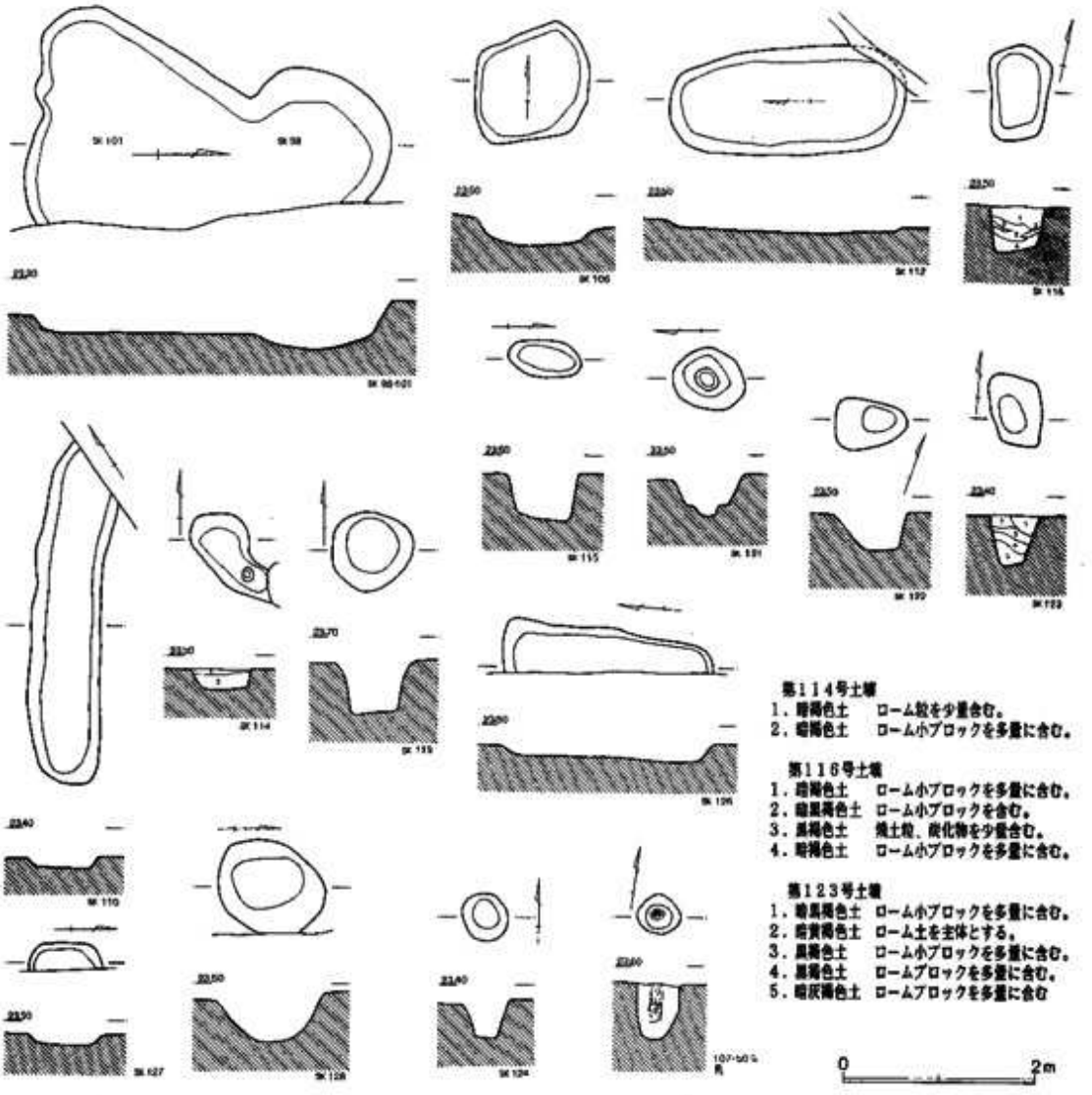
第49図　井戸跡、土壙(1)



第50図　土壙(2)



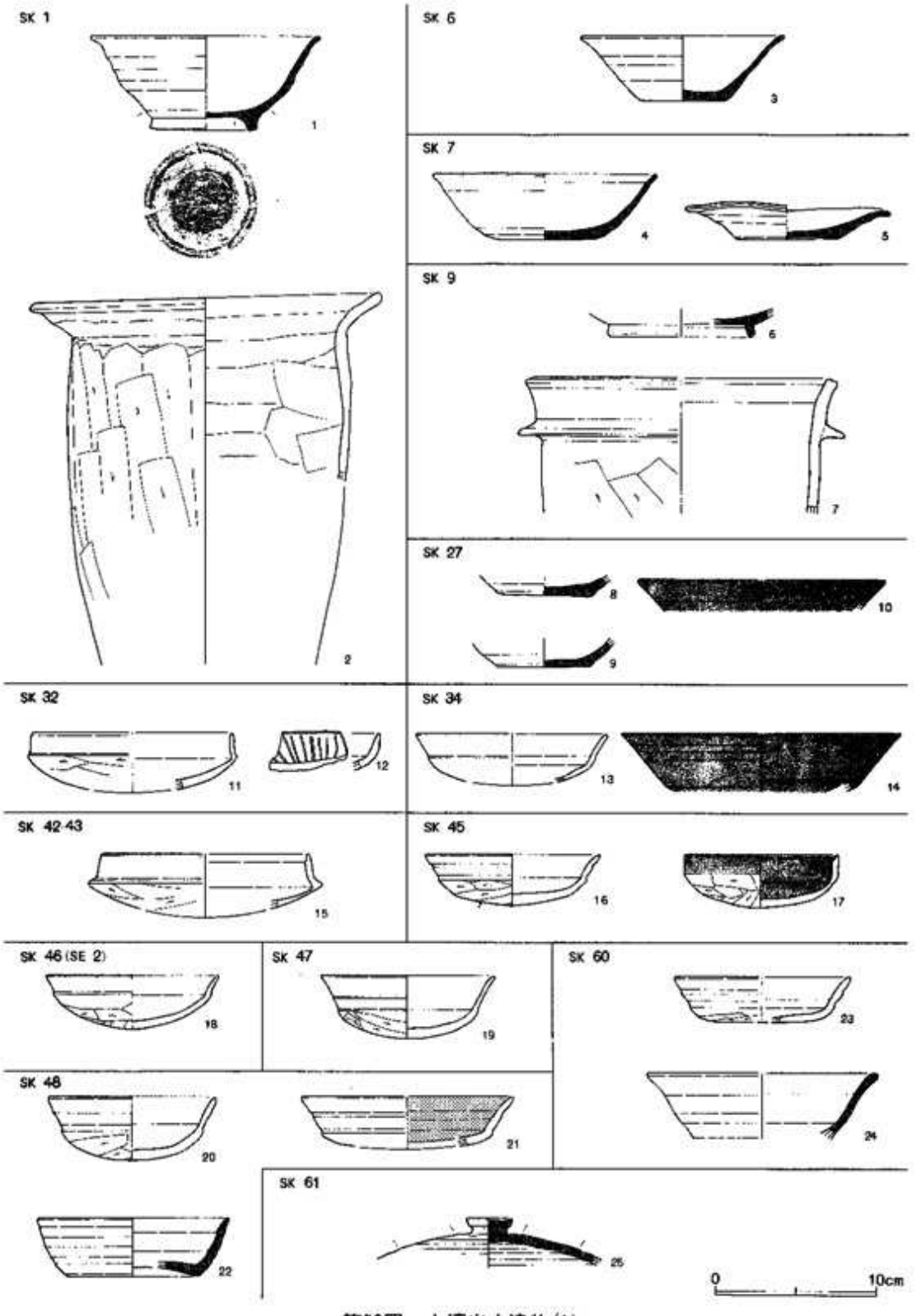
第51図　土壙(3)



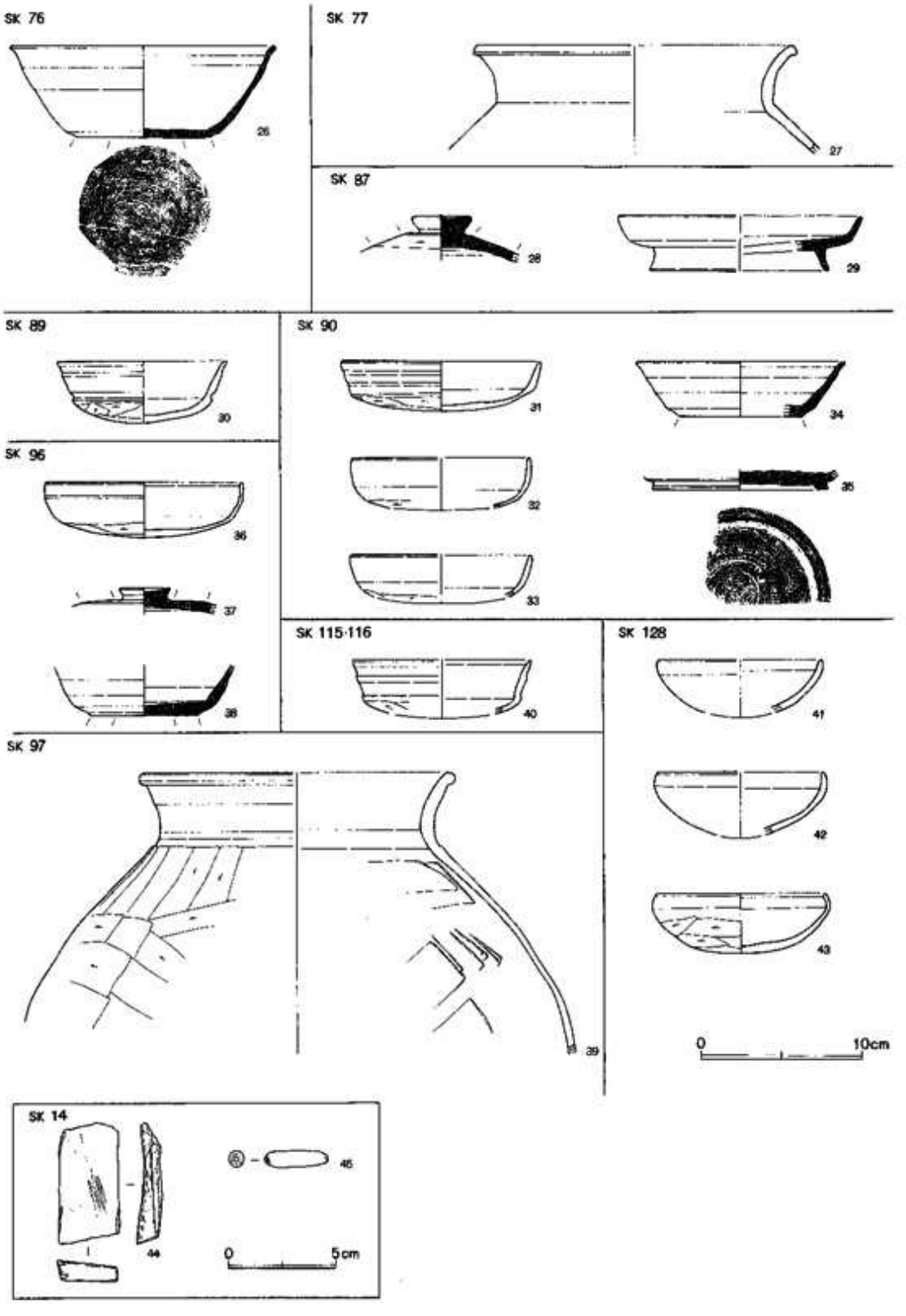
第52図　土壙(4)、ピット

土壙出土遺物（第53・54図）

番号	器種	大きさ(cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備　考
1	高台椀 須恵器	口径　14.0 高台径　6.5 器高　5.8	底部回転糸切り離し後、高台を貼付。高台はあまり開かず、端面を浅く凹ませる。体部は内湾して立ち上がり、口縁部で強く外反する。胎土には多量の赤色粒子を混入する。	A，B，C　細砂 焼成良好 灰色	ほぼ完存 (1号土壙)
2	甕	口径　21.4 胴部径　17.3 現存高　23.0	口縁部は「く」の字状に大きく外反する。胴部は張りの少ない長胴形を呈する。口縁部内外面とも横撫でを施し、外面に粘土紐積み上げ痕を残す。胴部外面縦位箆削り。内面は丁寧に撫でを施す。	A～D　粗砂 焼成良好 にぶい橙色	80%　残存 (1号土壙)



第53図　土壙出土遺物(1)



第54図　土壙出土遺物(2)

番号	器種	大きさ(cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備　考
3	坏 須恵器	口径　(12.5) 底径　5.3 器高　4.0	底部は回転糸切り離し未調整。体部は直線的に開き、口縁部で外反する。胎土中には小礫の混入が目立つ。全体に磨滅が著しい。末野産。	A，B，E　小礫 焼成普通 灰色	50%　残存 (6号土壙)
4	坏 須恵器	口径　(13.7) 底径　6.5 器高　4.1	底部は回転糸切り離し未調整。体部は丸みをもって立ち上がる。口縁部は短かく外反する。	A，B，C　粗砂 焼成普通 黒褐色	30%　残存 (7号土壙)
5	皿 須恵器	口径　12.6 底径　6.3 器高　2.3	焼き歪みのため口縁部は大きく波打つ。底部調整は回転糸切り離し未調整。口縁部は大きく外反し玉縁状に肥厚する。	A，B　粗砂 焼成良好 暗灰色	70%　残存 (7号土壙)
6	皿 灰釉	高台径　(8.7)	小片のため全体の器形は不明。高台は「ハ」の字状に開き、断面矩形を呈する。内面には斑状に灰釉が付着する。	A，B　細砂少量 焼成良好 灰白色	10%　残存 (9号土壙)
7	羽釜	口径　(18.0) 鍔径　(20.3)	小片のため全体の器形は不明。口縁部は緩やかに外傾する。口唇端部はわずかに凹む。断面三角形の鍔を巡らす。胴部外面は縦方向の篦削り。	A，B，C　粗砂 焼成普通 橙色	20%　残存 (9号土壙)
8	坏 須恵器	底径　6.0	底部回転糸切り離し未調整。胎土中に多量の黒色粒子を含む。	A，B　細砂多量 焼成良好 灰色	50%　残存 (27号土壙)
9	坏 須恵器	底径　5.9	底部回転糸切り離し未調整。胎土中に多量の黒色粒子を含む。	A，B　細砂多量 焼成良好 灰色	50%　残存 (27号土壙)
10	稜椀 緑釉	口径　(15.2)	小片のため器形は推定復元。口縁部は直線的に開く。屈曲部内面にはごく浅い沈線が巡る。胎土精選、焼成良好。内外面に濃緑色の釉が掛かる。	A，B　細砂少量 焼成良好 濃緑色　断面灰色	10%　残存 (27号土壙)
11	坏	口径　(12.4) 現存高　3.5	口縁部と体部の境に明瞭な段をもつ。口縁部は内傾して立ち上がる。口縁部内外面とも横撫で。体部は半球形を呈し、外面に篦削りを施す。	A～C　細砂多量 焼成良好 にぶい橙色	20%　残存 (32号土壙)
12	坏		小片のため全体の器形は不明。口縁部は緩やかに外傾して立ち上がり外面中位に弱い稜を有する。内面には放射状暗文が施される。	A，B，D　細砂 焼成良好 橙色	(32号土壙)
13	坏	口径　(11.8) 現存高　3.0	口縁部と体部の境に小さな段をもつ。口縁部は緩やかに外反して開き、口唇部を丸くおさめる。口縁部内外面とも横撫で。体部は半球形を呈する。全体に磨滅が著しい。	A～C　細砂少量 焼成良好 にぶい橙色	20%　残存 (34号土壙)
14	稜椀 緑釉	口径　(17.2) 現存高　3.6	口縁部は大きく直線的に開く。屈曲部内面には、ごく浅い沈線が巡る。釉のため調整不明瞭であるが、内面は篦磨きが丁寧に施されている。内外面とも濃緑色の釉が掛かる。	A，B　細砂少量 焼成良好 深緑色 断面暗灰色	20%　残存 (34号土壙)
15	坏	口径　(12.8) 現存高　3.4	口縁部と体部の境は蓋受け状に大きく張り出す。口縁部は内傾して立ち上がり、口唇部内面に小さな段を作り出す。体部は扁平な半球形を呈する。	A～C　細砂少量 焼成良好 明赤褐色	30%　残存 (42・43号 土壙)
16	坏	口径　(10.8) 器高　3.2	口縁部と体部の境に小さな段を持つ。口縁部は外傾して開き、中位に小さな段を作り出す。口縁部内外面とも横撫で。体部外面篦削り。	A～C　細砂少量 焼成良好 淡橙色	40%　残存 (45号土壙)

番号	器種	大きさ(cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備　考
17	坏	口径　(9.4) 器高　3.3	「比企型」坏。口縁部と体部の境に稜を有し、口縁部はほぼ直立する。口唇部内面に小さな段を作り出す。体部は半球形を呈し、外面に篦削りを施す。口縁部外面から内面にかけて赤彩を施す。	A～C　細砂少量 焼成良好 赤褐色	60%　残存 (45号土壙)
18	坏	口径　(10.6) 器高　3.3	口縁部と体部の境に小さな段を有する。口縁部は外傾して開き、口唇部を丸くおさめる。体部は半球形を呈し、外面に篦削りを施す。	A，B　細砂少量 焼成良好 にぶい赤橙色	40%　残存 (2号井戸)
19	坏	口径　(10.7) 器高　3.9	口縁部と体部の境に小さな段をもつ。口縁部は大きく外反して開き中位に小さな段を作り出す。体部は半球形を呈し、外面に篦削りを施す。	A～C　細砂少量 焼成良好 暗赤褐色	70%　残存 (47号土壙)
20	坏	口径　(10.3) 器高　3.9	口縁部と体部の境に段を有する。口縁部は外傾して開き、中位に弱い稜をもつ。体部は半球形を呈し、外面に篦削りを施す。	A，B　細砂少量 焼成良好 灰白色	50%　残存 (48号土壙)
21	坏	口径　(13.0) 現存高　3.0	口縁部と体部の境に小さな段をもつ。口縁部は大きく外反して開き、中位に小さな段を作り出す。体部は扁平な半球形を呈するものと考えられる。内面は黒色処理が施される。	A～C　細砂少量 焼成良好 淡橙色	20%　残存 (48号土壙)
22	坏 須恵器	口径　(11.8) 底径　(8.2) 器高　3.6	底部回転糸切り離し未調整で上げ底状を呈する。体部は緩やかに外反して立ち上がる。	A～C　細砂多量 焼成良好 にぶい橙色	30%　残存 (48号土壙)
23	坏	口径　(10.8) 器高　2.8	口縁部と体部の境に小さな段を作り出す。口縁部は外傾して開き、中位に段を有する。体部は扁平で平底気味。外面に篦削りを施す。	A～C　細砂少量 焼成良好 にぶい橙色	20%　残存 (60号土壙)
24	椀 須恵器	口径　(14.1) 現存高　4.1	小片のため全体の器形は不明。高台付椀になる可能性がある。体部は内湾して立ち上がり、口縁部で外反する。口唇部は玉縁状に肥厚する。	A～C　細砂多量 焼成良好 灰白色	40%　残存 (60号土壙)
25	蓋 須恵器	鈕径　2.3	「釘頭」状の鈕の付く蓋。天井部外面は回転篦削りを施す。南比企産。	A，B，F　細砂 焼成良好 青灰色	70%　残存 (61号土壙)
26	椀 須恵器	口径　(16.3) 底径　8.4 器高　5.6	底部は回転糸切り離し後、周辺部を篦削りする。体部は緩やかに内湾して立ち上がり、口唇部で短かく外反する。	A，B，F　細砂 焼成良好 灰色	60%　残存 (76号土壙)
27	甕	口径　(19.5) 現存高　6.7	口縁部は緩やかに外反して開き、口唇部は断面三角形を呈する。胴部は強く張る。口縁部内外面横撫で。胴部外面横方向の篦削り。	A，B　細砂少量 焼成良好 灰白色	30%　残存 (77号土壙)
28	蓋 須恵器	鈕径　3.7	扁平な擬宝珠形の鈕がつく。天井部外面に回転篦削りを施す。	A，B，E　小礫 焼成良好 灰色	図示部のみ 残存 (87号土壙)
29	高台盤 須恵器	口径　(15.0) 高台径　(11.0) 器高　3.4	体部は底部より短かく外傾して立ち上がる。高台は「ハ」の字状に長く開く。	A，B　細砂多量 焼成良好 灰色	20%　残存 (87号土壙)
30	坏	口径　10.4 器高　3.8	口縁部と体部の境に沈線を巡らし段を作り出す。口縁部は「ハ」の字状に開き、中位にわずかな段を有する。体部はやや扁平な半球形を呈する。体部外面篦削り。	A，B　細砂少量 焼成良好 灰白色	40%　残存 (89号土壙)

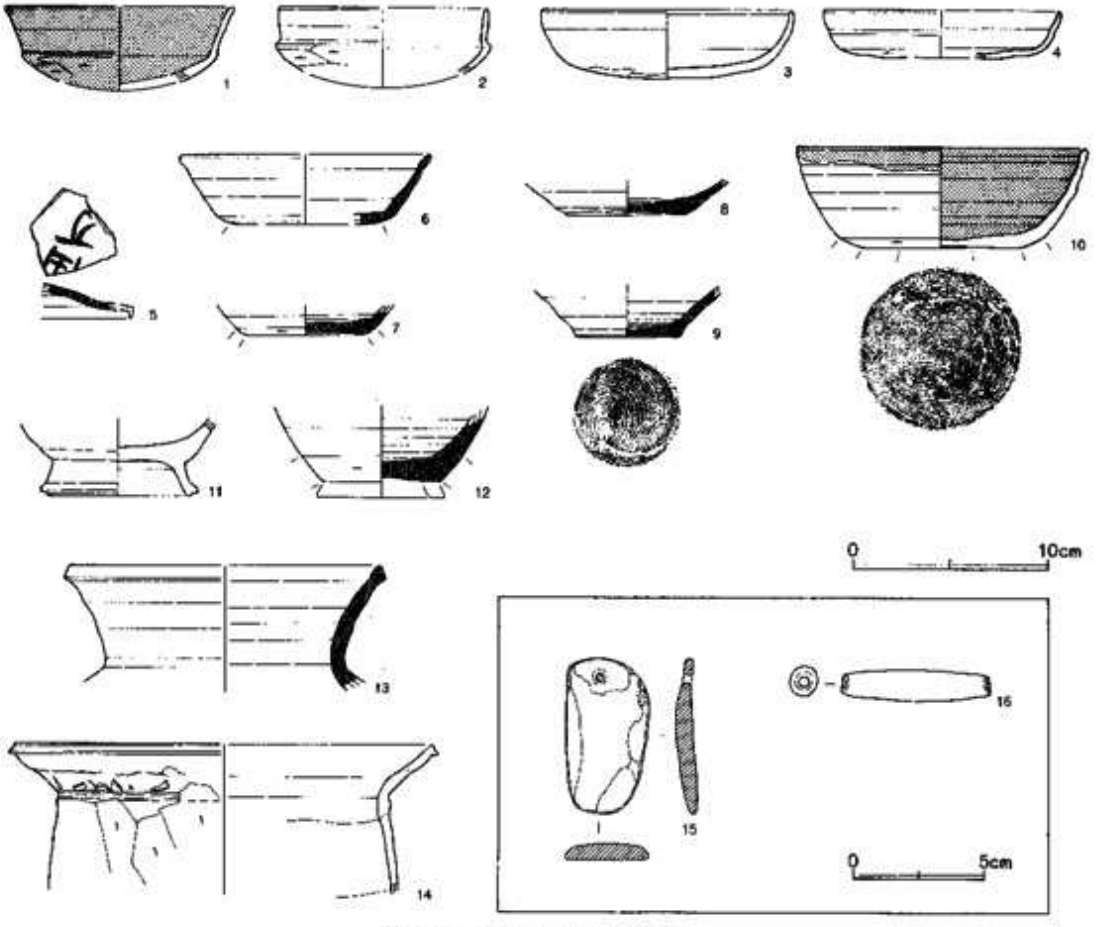
番号	器種	大きさ(cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備　考
31	坏	口径　12.4 器高　3.1	口縁部は外傾して開き、横撫でにより外面に二条の沈線が巡る。体部は浅く扁平である。外面は篦削り。	A，B，D　細砂 焼成良好 橙色	完形 (90号土壙)
32	坏	口径　(11.0) 現存高　3.1	口縁部と体部の区分は不明瞭で、平底気味の底部より緩やかに内湾して立ち上がり口縁部で直になる。口縁部内外面とも横撫で。体部外面篦削り。	A，B，D　細砂 焼成良好 橙色	30%　残存 (90号土壙)
33	坏	口径　(11.2) 現存高　2.6	口縁部は内湾気味に立ち上がる。体部は扁平で平底気味。体部外面篦削り。	A，B，D　細砂 焼成良好 橙色	30%　残存 (90号土壙)
34	坏 須恵器	口径　(12.8) 底径　(7.6) 器高　3.4	底部は回転篦削り。体部はわずかに屈曲して立ち上がり、直線的に外傾して開く。口縁部外面は一部黒色に変色する。南比企産。	A，B，F　細砂 焼成良好 灰色	30%　残存 (90号土壙)
35	高台坏 須恵器	高台径　11.0	高台は低く、しっかりした作り。	A，B　細砂多量 焼成良好 灰色	30%　残存 (90号土壙)
36	坏	口径　12.1 器高　3.4	口縁部と体部の境に弱い段を作り出す。口縁部は短かく、内湾気味に直立し、口唇部内面が肥厚する。体部は扁平な半球形を呈し、外面を撫でた後底部を篦削りする。	A，B　細砂少量 焼成良好 橙色	40%　残存 (96号土壙)
37	蓋 須恵器	鈕径　3.1	扁平な中央部の凹む鈕が付く。天井頂部に回転篦削りを施す。南比企産。	A，B，F　細砂 焼成良好 灰色	図示部のみ 残存 (96号土壙)
38	坏 須恵器	底径　6.6 現存高　3.2	底部は回転糸切り離し後、周辺部を篦削り。体部はわずかに屈曲して内湾気味に立ち上がる。内面屈曲部は明瞭。南比企産。	A，B，F　細砂 焼成良好 灰色	70%　残存 (96号土壙)
39	甕	口径　(18.8) 最大径　(34.6) 現存高　17.4	口縁部は緩やかに外反して立ち上がる。口唇部は外側が円帯状に肥厚する。口縁部内外面横撫で。胴部は球胴形に強く張る。外面胴部上位は縦方向の篦削り。中位は横方向の篦削り。内面篦撫で。	A～C　粗砂 焼成普通 にぶい橙色	30%　残存 (97号土壙)
40	坏	口径　(11.0) 現存高　3.3	口縁部と体部の境に段を持つ。口縁部は緩やかに外反して開き、中位に凸線状の段を作り出す。口唇部内面に沈線を巡らす。体部はやや扁平な半球形を呈し、外面に篦削りを施す。	A，B，D　細砂 焼成普通 にぶい褐色	20%　残存 (115・116号 土壙)
41	坏	口径　(10.1) 現存高　3.2	半球形を呈する体部より緩やかに内湾して口縁部に移行する。口唇部は丸くおさめる。器表面の磨滅が著しい。	A，B，D　細砂 焼成良好 橙色	20%　残存 (128号土壙)
42	坏	口径　(10.2) 現存高　3.9	口縁部は内湾気味に立ち上がる。体部は半球形を呈する。口縁部外面及び内面は横撫で。体部外面は磨滅が著しく調整不明。	A，B，D　細砂 焼成良好 橙色	30%　残存 (128号土壙)
43	坏	口径　10.5 器高　3.7	口縁部は内屈し、口唇部を丸くおさめる。口縁部内外面横撫で。体部は半球形を呈し、外面に篦削りを施す。	A，B，D　細砂 焼成普通 褐灰色	40%　残存 (128号土壙)

番号	器種	大きさ(cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備　考
44	砥石	現存長　5.6 幅　2.8 厚さ　1.0	図示した上部から裏面にかけて欠損する。遺存する面はすべてよく使用され、平滑になっている。表面は緩やかに湾曲し条線状の使用痕が残る。同様に側面にも条線状の使用痕が残る。凝灰岩製。重さ 23.20 g	灰白色	(14号土壙)
45	土錘	長さ　3.0 幅　0.8	丁寧に撫でを施す。孔径 2 mm。重さ 1.28 g	A～C　細砂多量 焼成良好 褐色	完存 (14号土壙)

f．グリッド出土遺物

遺構の集中する調査区北側には、厚さ30～40cmほどの黒褐色土による奈良時代以降の包含層が発達していた。遺物は、主に包含層から検出されている。時期は、古墳時代後期から平安時代にわたる遺物が出土している。

遺物としては、5の「田万」の墨書のみられる須恵器蓋や10の内面に黒色処理を施した酸化焔焼成の椀などが注目される。他に時期不明であるが、ペンダント状の石製品が出土している。



第55図　グリッド出土遺物

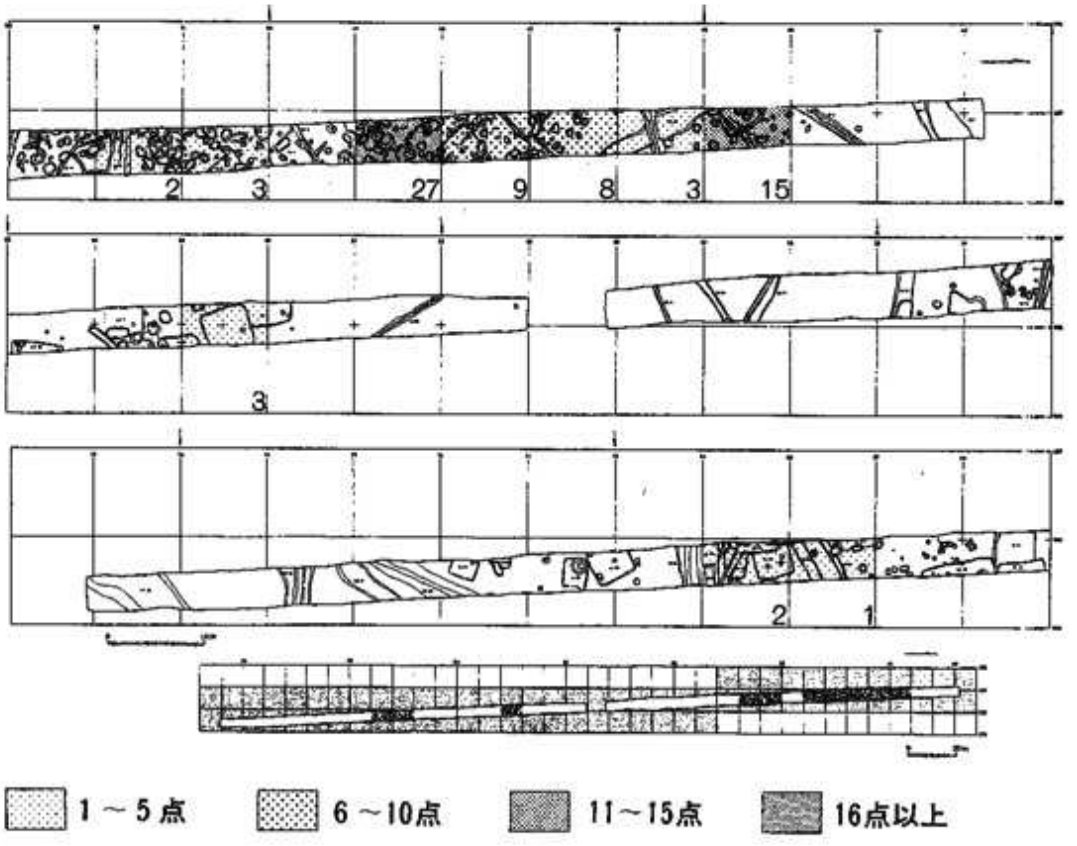
グリッド出土遺物　（第55図）

番号	器種	大きさ(cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備　考
1	坏	口径　(11.6) 現存高　3.8	口縁部と体部の境に明瞭な段を有する。口縁部は「ハ」の字状に大きく外反して開く。内外面とも横撫で。体部は半球形を呈し、外面を篦削り。内外面とも黒色処理が施される。	A，B　細砂少量 焼成良好 黒褐色	30%　残存
2	坏	口径　(10.6)	口縁部と体部の境に明瞭な段をもつ。口縁部はほぼ直立する。内外面とも横撫でを施す。体部外面篦削り。	A，B，D　細砂 焼成良好 灰白色	20%　残存 107－45G
3	坏	口径　12.8 器高　3.5	平底気味の底部より、緩やかに内湾して立ち上がる。口縁部外面から内面にかけて横撫で。底部外面に篦削りを施す。	A～D　細砂少量 焼成良好 橙色	50%　残存 107－52G
4	坏	口径　(12.0) 器高　2.4	口縁部は外傾して立ち上がり、中位でわずかに屈曲する。底部は平底に近く皿状の器形を呈する。口縁部外面から内面にかけて横撫で。底部外面篦削り。	A，B，D　細砂 焼成普通 にぶい橙色	20%　残存 107－53G
5	蓋 須恵器		小片のため全体の器形は不明。天井部外面に二字の墨書が認められる。（田万）か。南比企産。	A，B，F　細砂 焼成良好 灰白色	107－53G
6	坏 須恵器	口径　(12.8) 底径　(7.8) 器高　3.6	底部篦削り。体部は丸みを持って立ち上がり、口縁部で短かく外反する。口縁部外面は重ね焼きのため黒色に変色。南比企産。	A，B，F　細砂 焼成良好 灰色	30%　残存 108－63G
7	坏 須恵器	底径　6.1	底部全面及び体部下端に回転篦削り調整を施す。内面屈曲部に「爪先技法」がみられる。南比企産。	A，B，C，F 焼成良好　細砂 青灰色	70%　残存 108－63G
8	坏 須恵器	底径　6.2	底部は回転糸切り離し未調整。わずかに上げ底状を呈する。	A～D　細砂多量 焼成良好 にぶい橙色	80%　残存
9	坏 須恵器	底径　5.2	底部回転糸切り離し未調整。体部は外傾して立ち上がる。	A～C　細砂多量 焼成良好 橙色	図示部のみ 残存 107－45G
10	椀 黒色 土器	口径　14.8 底径　8.0 器高　5.1	底部調整は回転糸切り離し後、周辺部及び体部下端に回転篦削りを施す。体部は緩やかに内湾して立ち上がり、口唇部で内面が肥厚する。内面及び口縁部外面に黒色処理を施す。ロクロ整形。酸化焔焼成。	A～D　細砂多量 焼成普通 橙色	70%　残存 107－45G
11	高台椀	高台径　7.2	「ハ」の字状に開く足高の高台が付く。高台端部は浅く凹む。体部は丸みをもって立ち上がる。ロクロ整形。	A～D　細砂少量 焼成良好 灰白色	図示部のみ 残存
12	長頸瓶 須恵器	底径　(6.0)	高台を剥離する。底部は回転糸切り離し後、高台を貼付。胴部下端に篦削りを施す。外面には降灰がみられる。南比企産。	A，B，F　細砂 焼成良好 青灰色	60%　残存 107－45G
13	甕 須恵器	口径　(16.0) 現存高　6.4	口縁部は「く」の字状に外反して開く。口唇部は断面三角形を呈し、器面は降灰のためざらつく。	A，B　小礫 焼成良好 灰色	20%　残存 107－54G

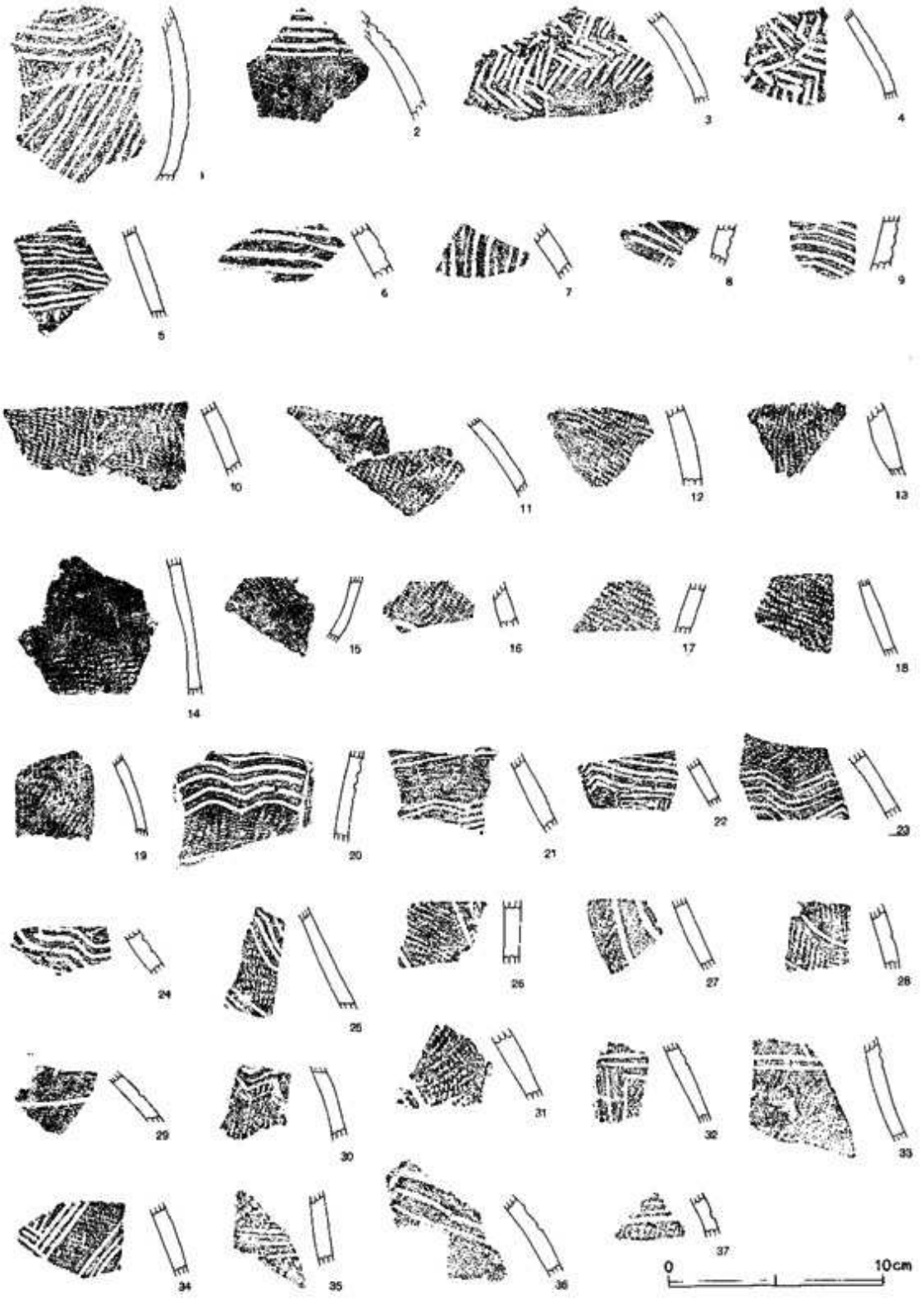
番号	器種	大きさ(cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備　考
14	甕	口径　(21.4) 現存高　7.6	口縁部は大きく「く」の字状に外反する。口唇端部は下端をつまみ出し、側面が浅く凹む。口縁部内外面とも横撫で。胴部外面縦方向の箆削り。頸部外面には箆削りの際の工具痕が明瞭に残る。	A，B，D　細砂 焼成良好 灰褐色	30%　残存 108－66G
15	石製品	長さ　5.9 幅　3.2 厚さ　0.7	図示した上端部に孔径3㎜ほどの円孔を穿つ。表面は自然面を利用し、側縁部を斜めに打ち欠いて研磨している。裏面は剥離面をわずかに研磨しただけである。重さ 19.12g		完存
16	土錘	長さ　5.7 幅　1.2	丁寧に撫でを施す。孔径 4㎜。重さ 7.12g。	A～C　細砂多量 焼成良好 にぶい橙色	完存 107－48G

弥生土器（第57・58図）

遺構は検出されていないが、中期中葉から後期初頭にかけての弥生土器が少量検出されている。その分布は、概ね五領期の遺構分布と重なり、微高地上を中心に出土している。1～37は、箆描きによる沈線を施すもので、須和田式土器の新しい時期に位置づけられる。55～57、60・61は櫛描波状文や簾状文を多用する櫛描文土器である。他にコの字重ね文を施した62～64や、ボタン状の浮文をもつ65などの中部高地系の土器が出土している。



第56図　弥生土器分布図


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
0
10cm

第57図　弥生土器 (1)

第58図　弥生土器 (2)

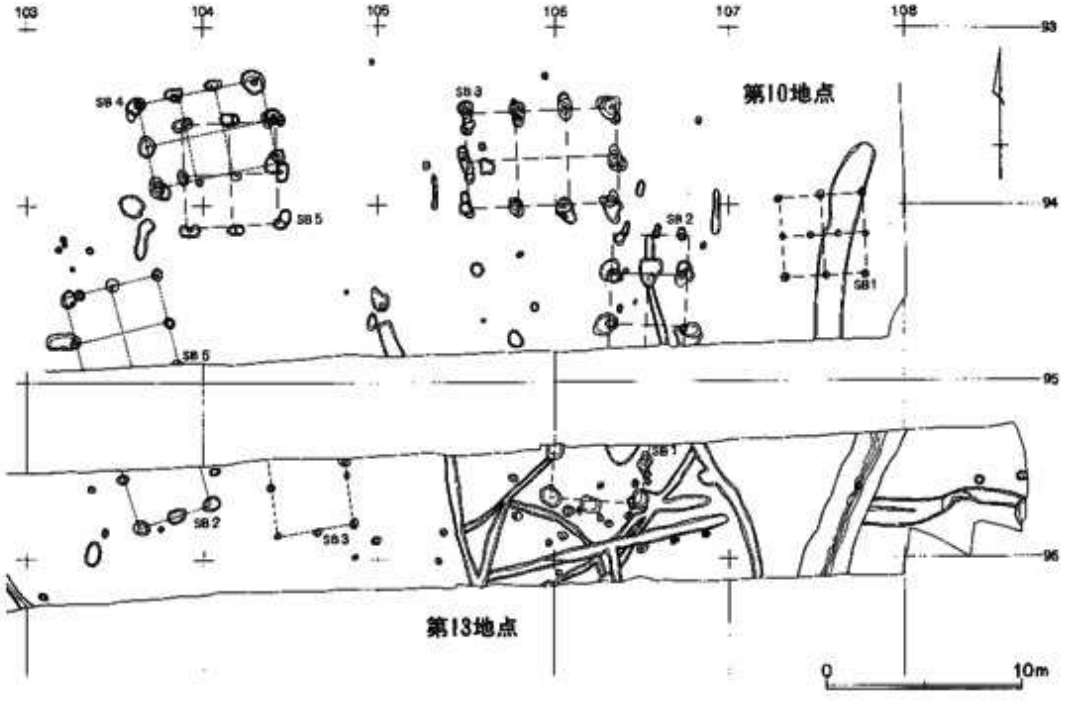
2．第13地点

概　要

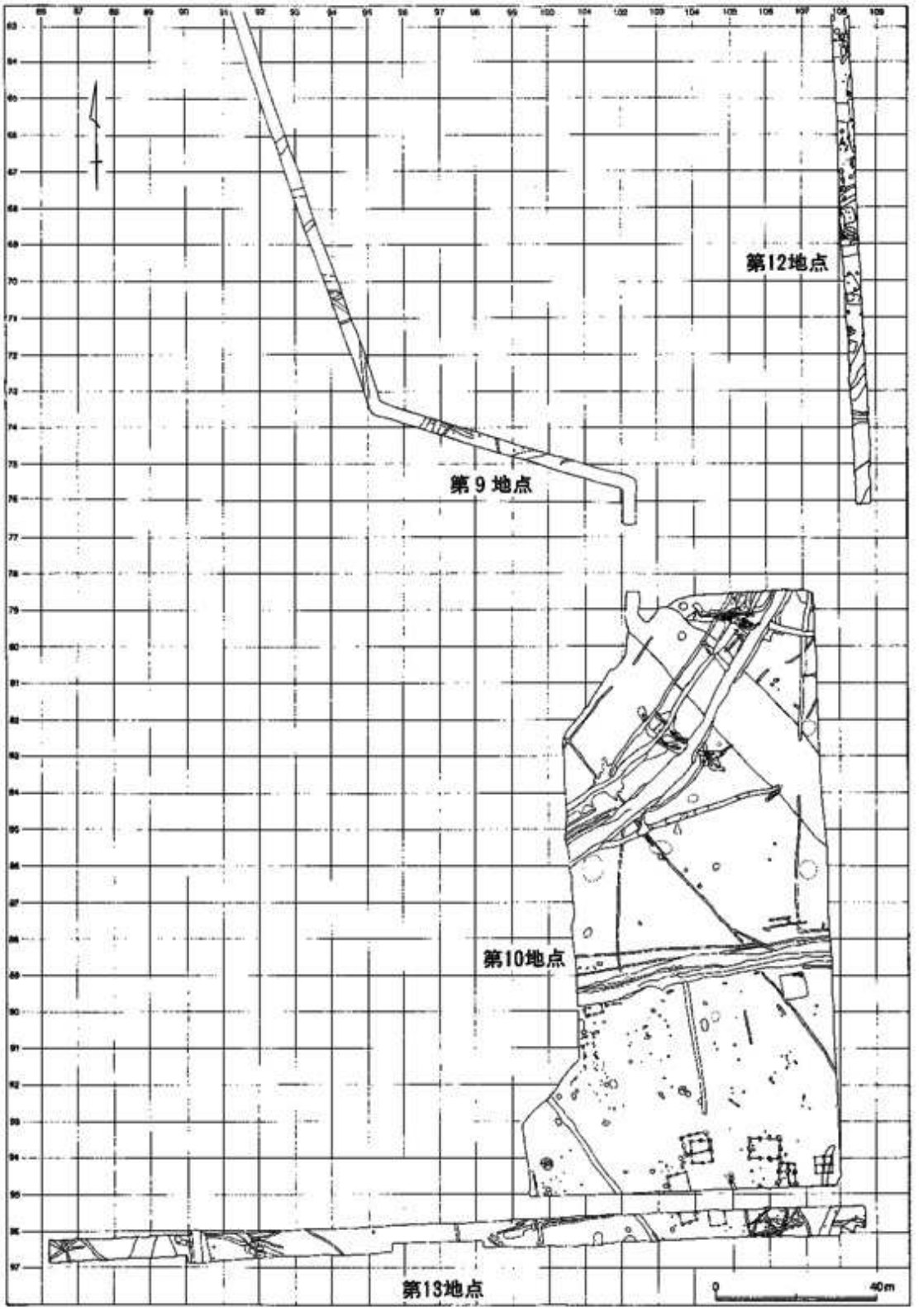
第13地点は、昭和63年度に調査を実施した第10地点の南側に隣接する幅約7m、長さ約200mの東西に細長い調査区である。グリッドは、（東西）86～109－（南北）95～97グリッドに位置する。

検出された遺構は、掘立柱建物跡3棟、溝跡31条、井戸跡1基、土壙19基、ピット等である。調査区東側で確認された3棟の掘立柱建物跡は、第10地点の調査で検出された6棟の掘立柱建物跡とともに一つのグループを構成するものである。東側が未調査のため、建物群の広がりは明確ではないが、10棟前後で構成された小規模な一群と想定される。第10地点の調査では建て替えや重複関係がみられたことから、一時期に存在した棟数は3～4棟ほどと推定される。出土遺物から8世紀後半から9世紀前半に位置づけられる。溝跡では、第27号溝跡から10世紀代の須恵器、土師器、灰釉陶器等が多量に検出され、古代末期の土器様相を検討する上で良好な資料が出土している。土壙では、調査区中央部と調査区西側の二箇所で覆土中に多量の骨片や炭化灰、焼土を含む土壙群が確認されている。同様のものは、第10地点の調査の際にも検出され、「墓壙」として捉えられている。時期は、出土遺物から8世紀後半から9世紀前半頃と推定される。

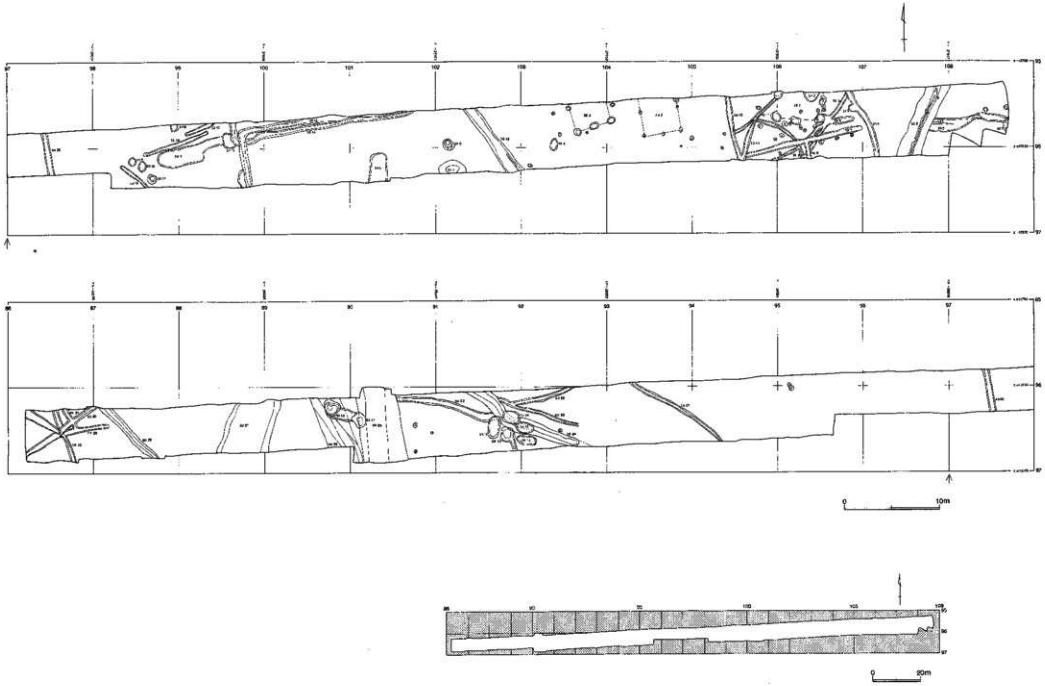
他に、中世の遺構として特筆されるものには第18号土壙から嘉歴三年（1328年）、貞治年間（1362～1368年）の紀年銘を刻んだ板石塔婆とともに馬骨が検出されている。板石塔婆の廃棄（埋納）行為を考える上で貴重な調査例である。また近接する第17号土壙からは元祐通宝が出土している。



第59図　第10・13地点掘立柱建物跡分布図（S＝1：400）



第60図　第 9 ・10・12・13地点位置図（S＝1：1,600）



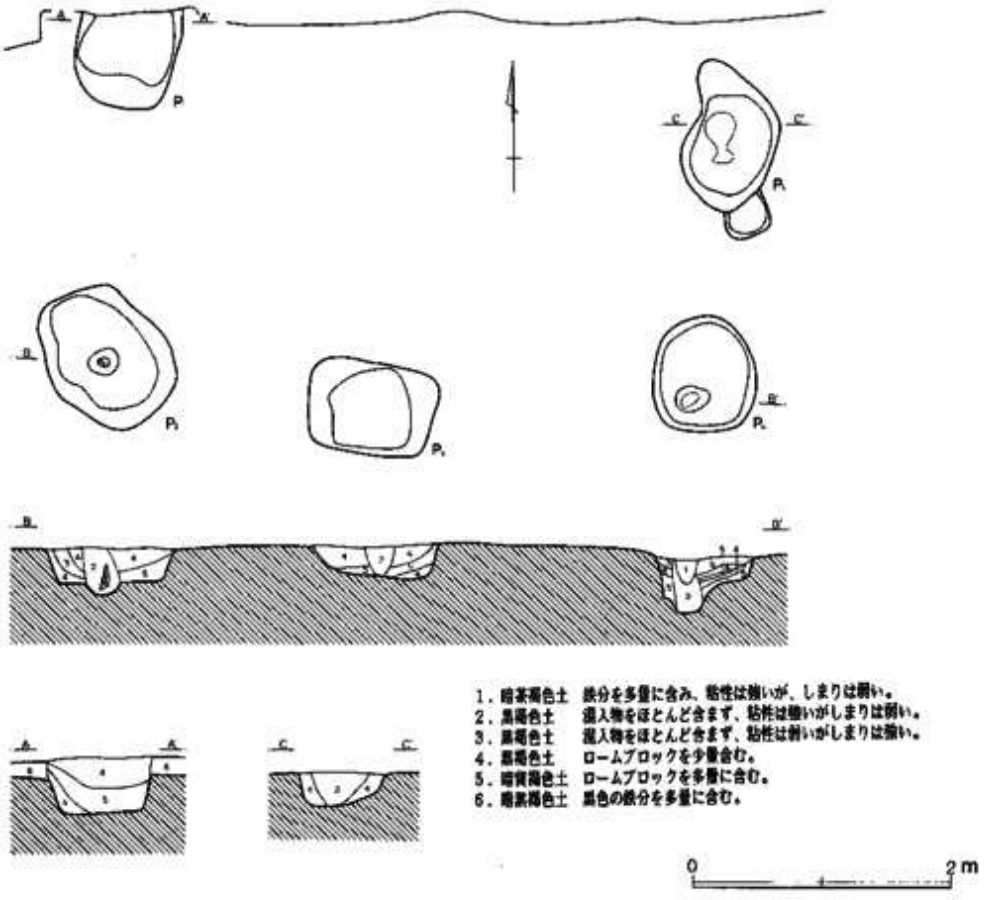
第61図　北島遺跡第13地点全測図（S＝1：400）

a．掘立柱建物跡（SB）

第1号掘立柱建物跡（第63図）

調査区東側の106－95グリッドに位置する。北側が調査区域外にかかるため建物全体の規模は不明であるが、桁行3間×梁間2間の南北棟になるものと考えられる。柱間寸法は、桁行2.2m、梁間2.3m等間である。主軸方向は、N－5°－Eを指す。柱穴は長軸1m前後の方形を基調とし、深さは26～40cmとやや浅い。ピット2からは柱材が検出され、樹種同定の結果、クリ材であることが判明した。遺物は9世紀前半代の須恵器坏が出土した。

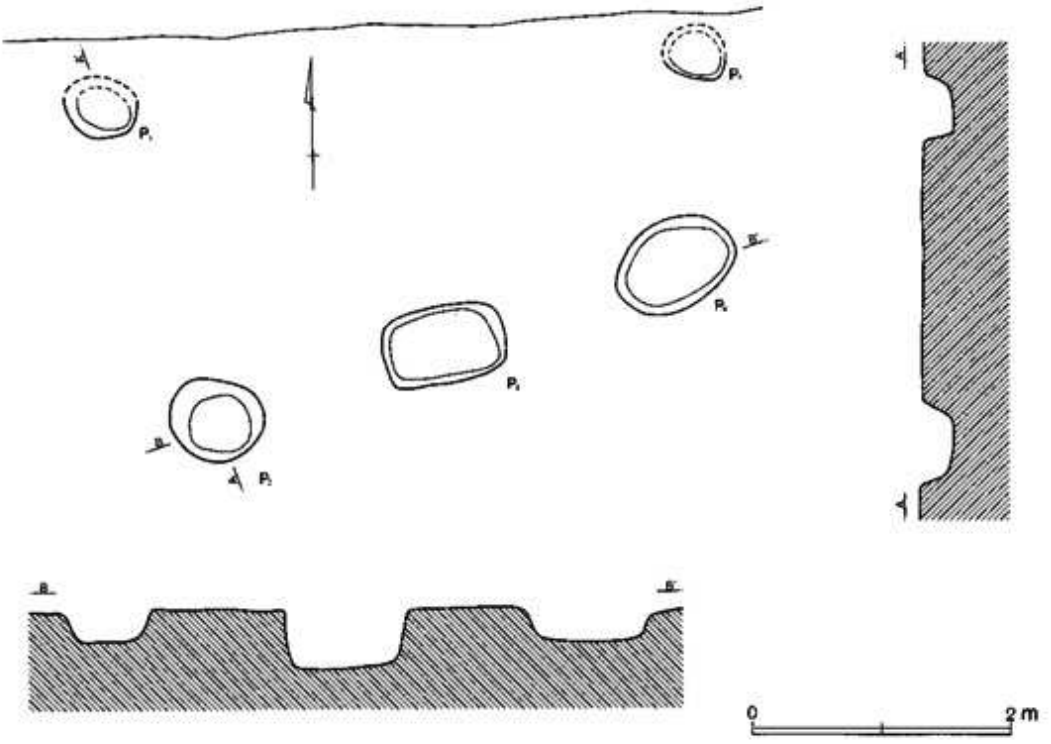
第62図
第1号掘立柱建物跡出土遺物



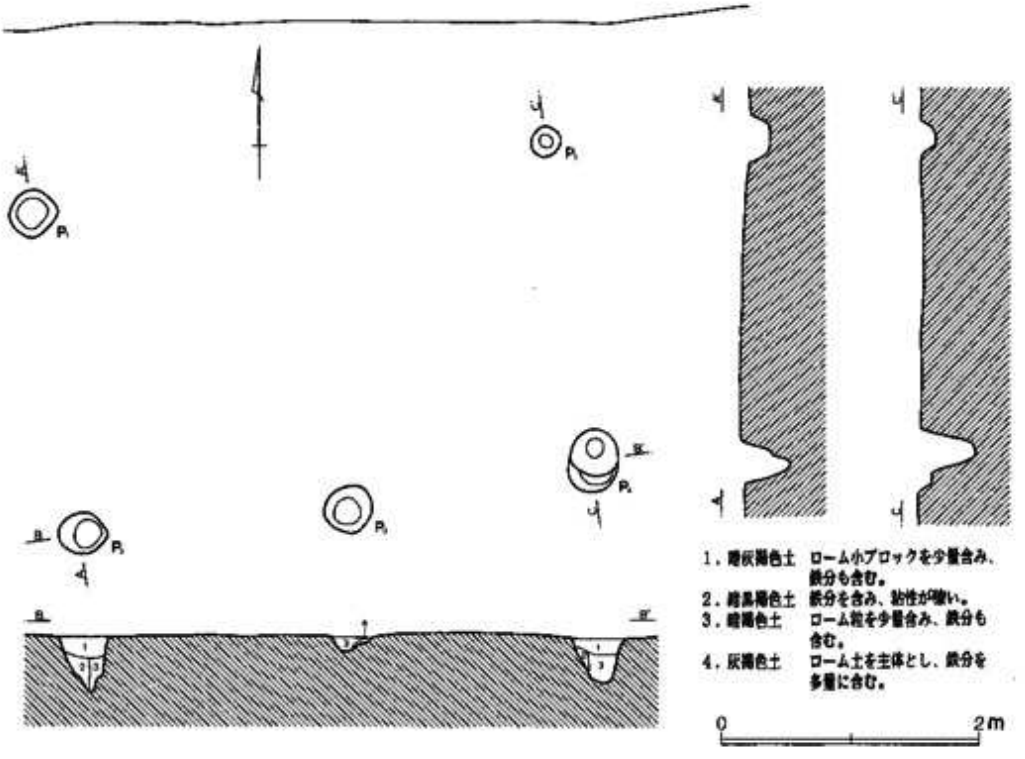
第63図　第1号掘立柱建物跡（L＝23.40m）

第1号掘立柱建物跡出土遺物（第62図）

番号	器種	大きさ(cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備　考
1	坏 須恵器	口径　(12.0) 底径　(6.0) 器高　3.1	小片のため口径・器形は推定復元。体部は大きく内湾しながら立ち上がり、口縁部で外反する。南比企産。	A，B，F　細砂 焼成良好 灰色	10%　残存



第64図　第２号掘立柱建物跡（Ｌ＝23.30ｍ）



第65図　第３号掘立柱建物跡（Ｌ＝23.30ｍ）

第2号掘立柱建物跡（第64図）

調査区東側の103－95グリッドに位置し、東へ3.5mほど離れて第3号掘立柱建物が近接する。また北側には主軸方向をほぼ同じに採る第6号掘立柱建物跡（第10地点）が位置し、未調査部分で重複するものと推定される。確認した範囲は、梁間2間（3.8m）、桁行は1間だけである。柱間寸法は、桁行2.6m、梁間1.9m等間で、桁行をやや長く採る。主軸方向は、N－21°－Wを示す。柱穴は、長軸0.72～1.0mの楕円形を呈するものが多い。ただし、ピット3は平面形が方形に近く、深さも44cmを測り、他に比べしっかりした掘り方である。遺物は検出されなかった。

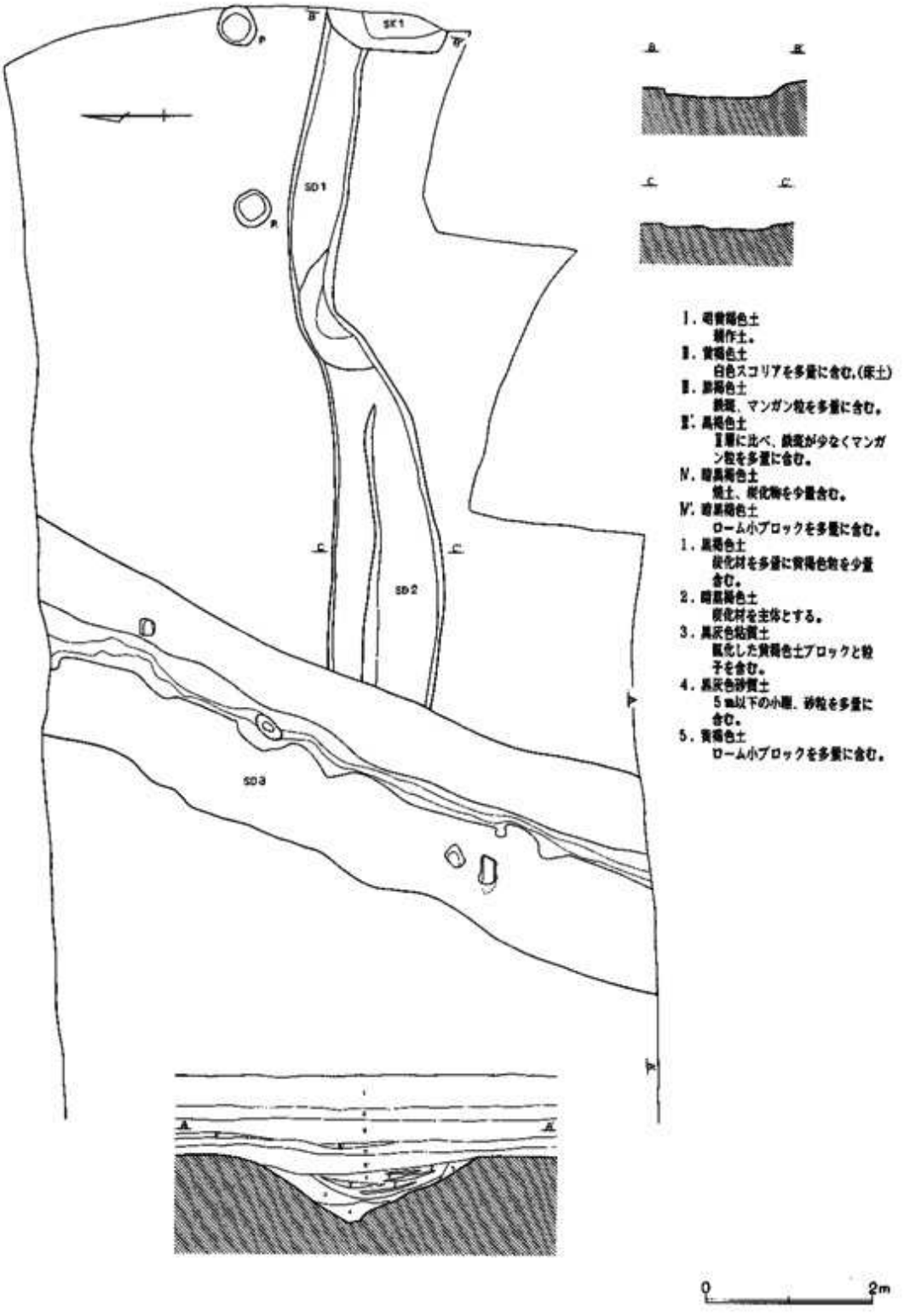
第3号掘立柱建物跡（第65図）

調査区東側の104－95グリッドに位置する。北側の大半が調査区域外にのびるため全体の規模は明確ではないが、柱穴の大きさからみて大型の建物とは考えられない。桁行2間以上×梁間2間（4m）を確認した。柱間寸法は、桁行2.5m、梁間4m等間である。主軸方向は、N－8°－Wを示す。柱穴は、直径35cm前後の小さな円形プランを呈する。深さは、角に位置するピット2・4では30cmを越すが、他は10cm前後とやや浅くなっている。土層断面は、第3層が柱痕に相当するものと考えられる。遺物はほとんど出土しなかった。

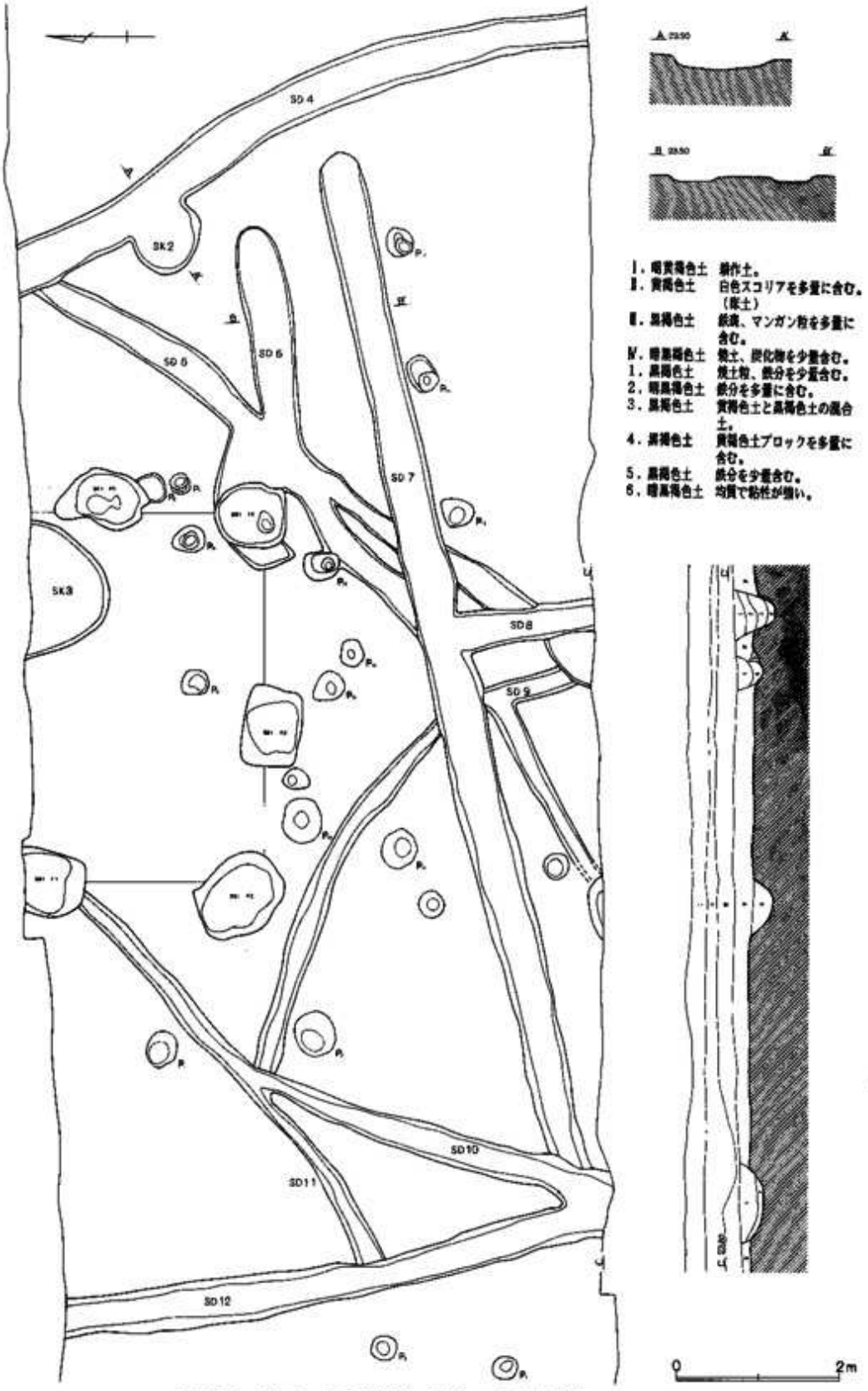
b．溝　跡（SD）

今回の調査では合計31条の溝跡が確認された（なお、第16号溝跡は欠番）。全体に南北方向に走行するものが多い傾向がみられた。遺物は、第13・27号溝跡では多量に出土しているが、全体に遺物量が少なく、詳細な時期は判然としない。しかし、天明の火山灰（1783年）が堆積する第25号溝跡を除くと、いずれも奈良・平安時代の旧地表面と考えられる基本土層第Ⅲ層を掘り込み面としていることから、概ね古代に属する溝跡として捉えられる。

調査区東端の第3号溝跡は、壁の立ち上がりの急な断面V字形を呈し、覆土上層には多量の炭化物粒が混入していた。第1号掘立柱建物跡の周囲には第4～12号溝跡が分布している。小規模なものが多く、主に区画を意図した溝と考えられるが、建物群との関連は明確ではない。第13号溝跡は、北西から南東に走行している。この溝跡は第10地点調査時の第3号溝跡と同一のもので、前回の調査では一括廃棄された須恵器の大甕が破砕された状態で検出されたほか、墨書土器、灰釉陶器、羽口などの特殊な遺物が検出されている。今回の調査では底部未調整の須恵器坏、緑釉陶器、土錘などが出土した。出土遺物は8世紀末から10世紀前半代とやや幅がみられる。第14・15号溝跡は調査区内を東西に走り、L字形に屈曲して調査区外にのびている。第14号溝跡は第10地点の第4号溝跡と同一のものである。出土遺物が少なく時期は不明であるが、8世紀後半代の第19号土壙を切っており、上限をおさえることができる。調査区西側の第22～26号溝跡は9世紀後半代の墓壙群によって切られている。時期は第24号溝跡から周辺箆削りの須恵器坏が出土していることから、8世紀後半代頃の掘削と推定される。第26号溝跡は、後世の溝跡と重複しているため規模は明確ではないが、比較的大きな溝で、底面付近から刃物による削痕のある人骨が出土している（附編2参照）。

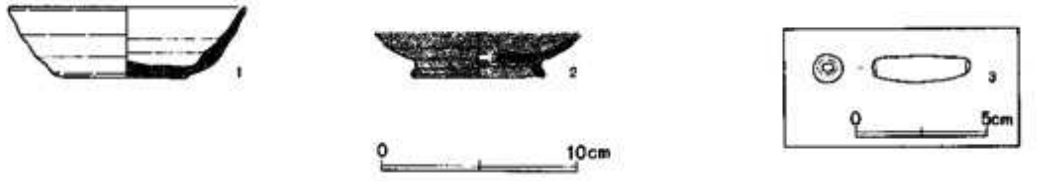


第66図　第1～3号溝跡、第1号土壙（L＝23.60ｍ）

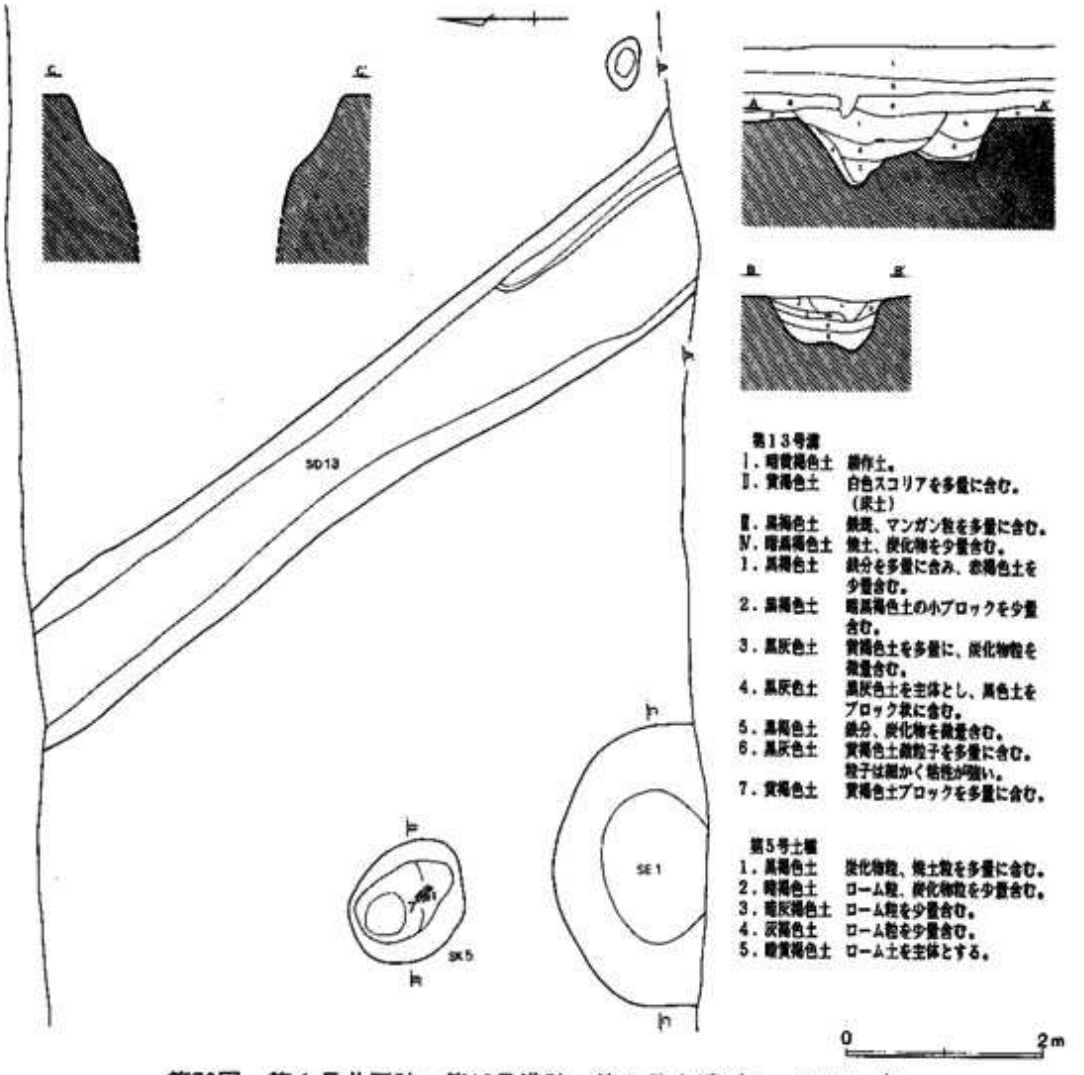


第67図　第４～12号溝跡、第２・３号土壙

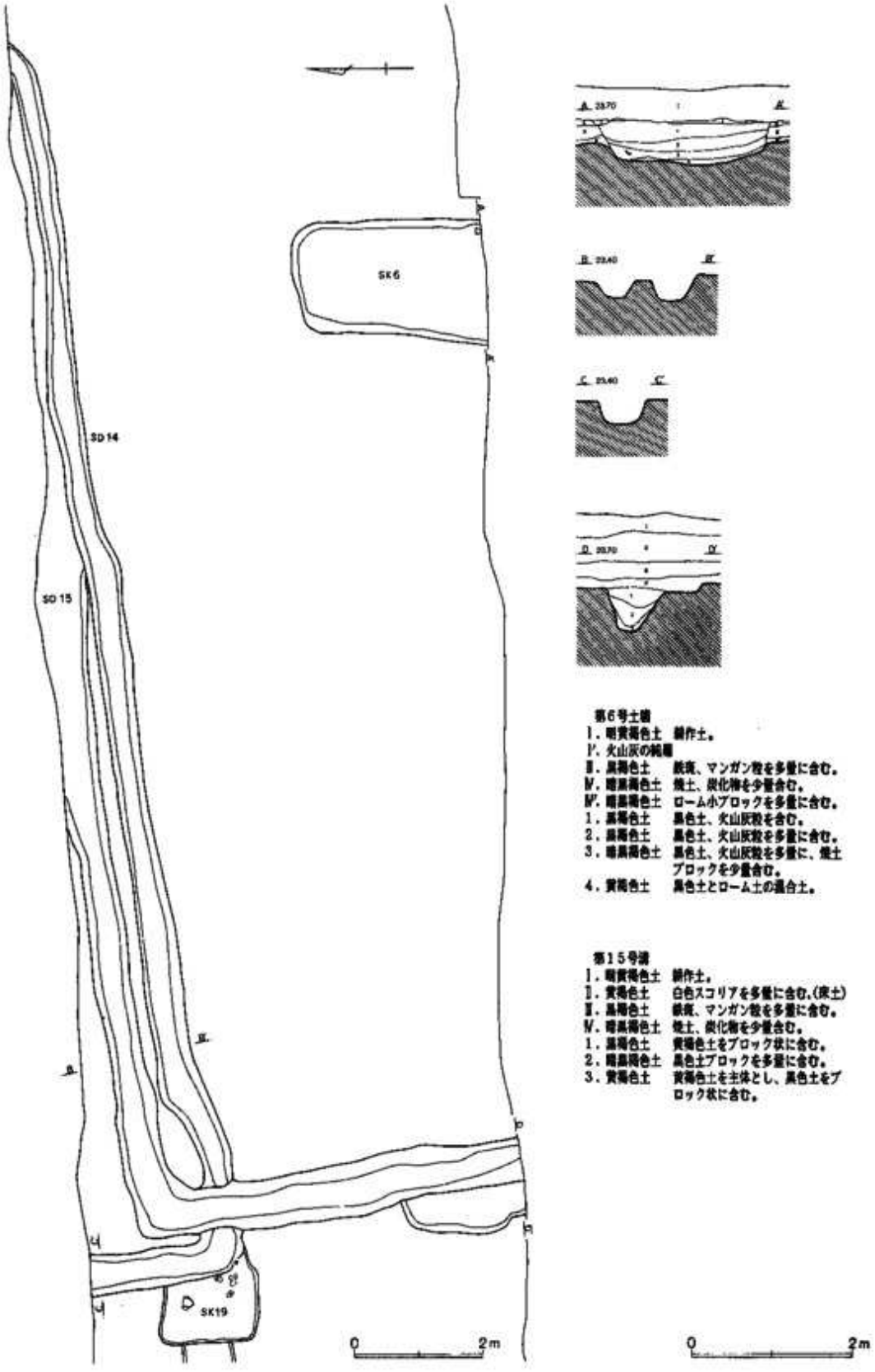
第68図　第１・３号溝跡出土遺物



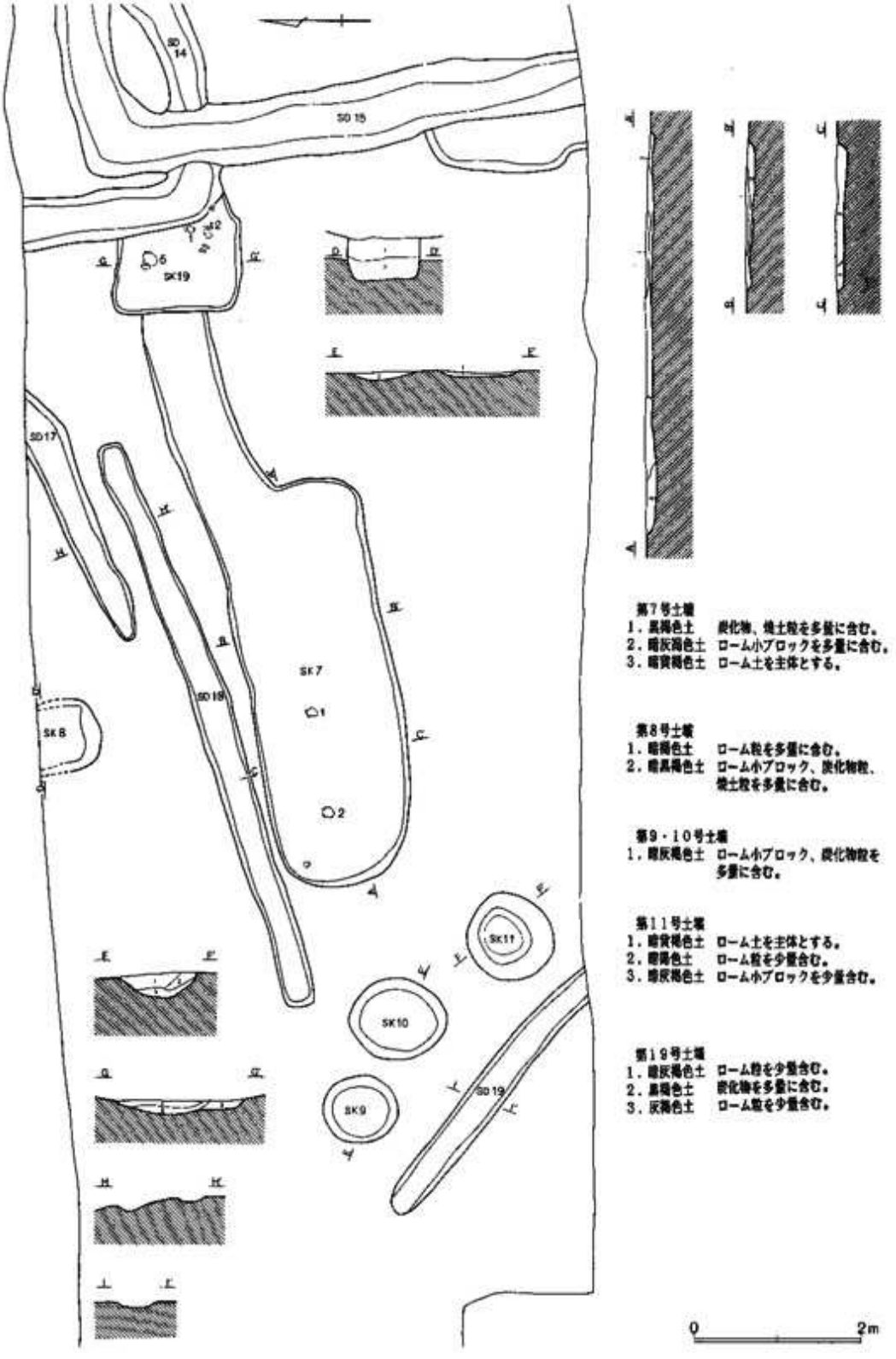
第69図　第13号溝跡出土遺物



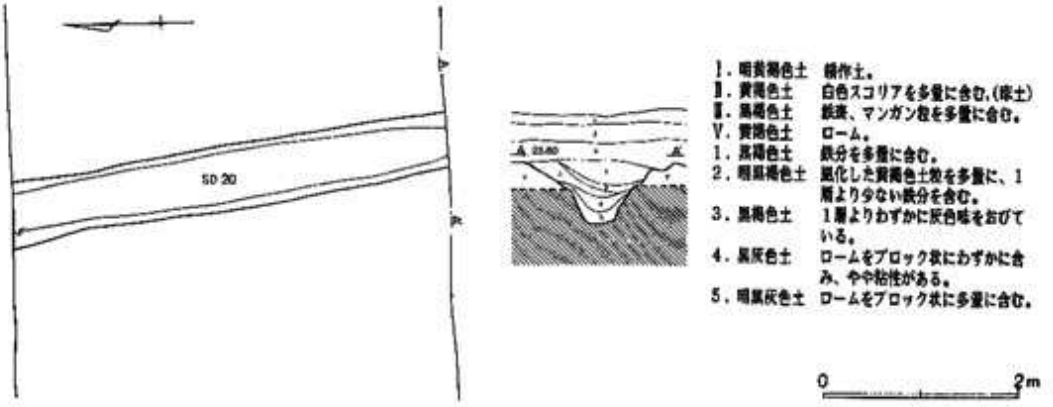
第70図　第１号井戸跡、第13号溝跡、第５号土壙（Ｌ＝23.40ｍ）

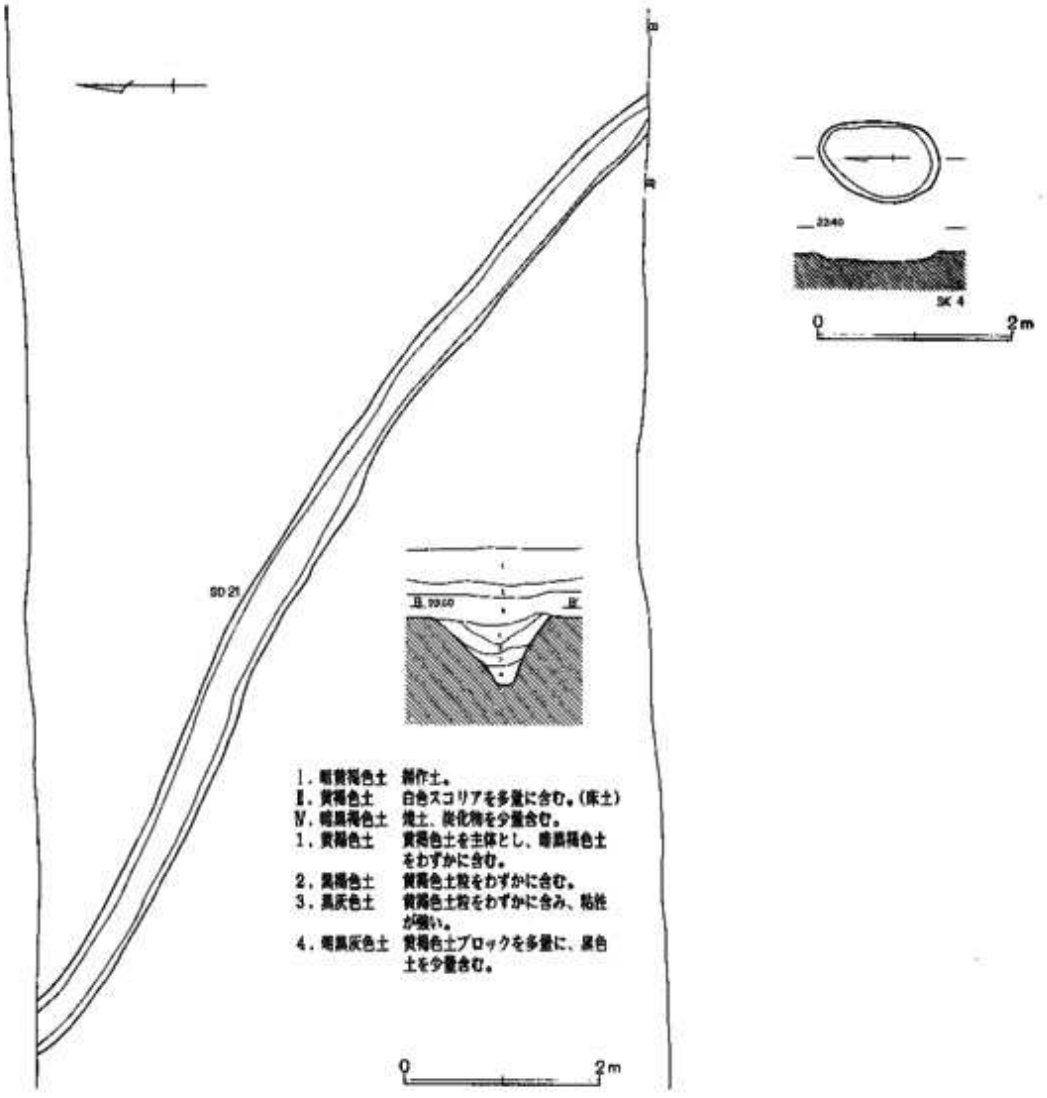


第71図　第14・15号溝跡、第6号土壙

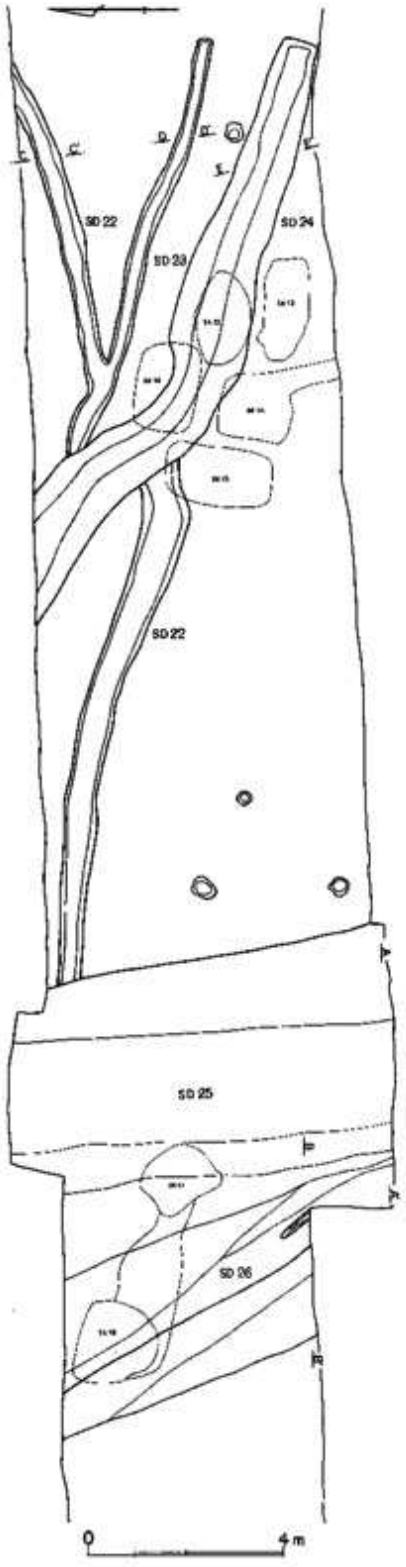


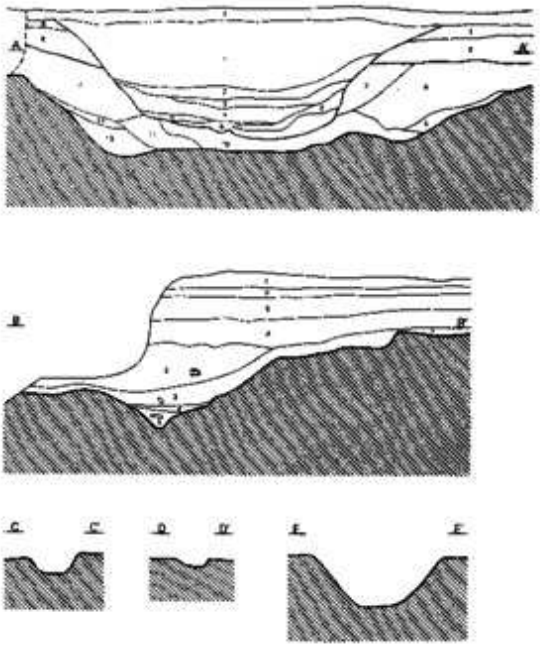
第72図　第17～19号溝跡、第7～11・19号土壙（L＝23.50ｍ）





第73図　第20・21号溝跡、第4号土壙





第25・26号溝（A－A'）

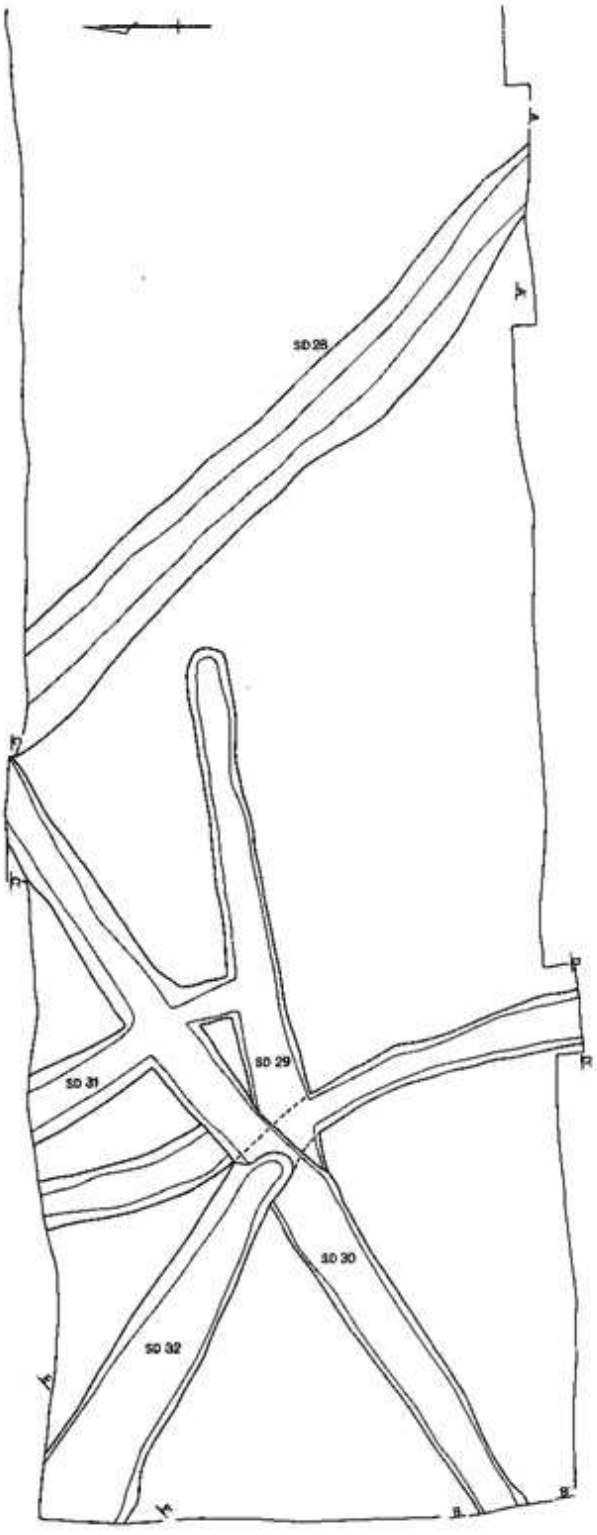
Ⅰ．暗黄褐色土　耕作土。
Ⅱ．黄褐色土　白色スコリアを多量に含む。（床土）
Ⅲ．黒褐色土　鉄斑、マンガン粒を多量に含む。
1．砂質土　ロームブロック、直径2～3cm大の円礫を多量に含む。
2．砂層　1層より細かく、やや粗い砂層。
3．暗灰褐色粘質土　粘質の灰褐色土を主体とし、目の粗い砂、稀く少量の炭化物を含む。
4．暗灰褐色粘質土　粘性が強くきめ細かい粘質土中に、ブロック状の砂を含む。
5．暗灰褐色粘質土　粘質の灰褐色土を主体とし、目の粗い砂を含む。
6．砂層　灰褐色粘土ブロック、酸化鉄分を多量に含む。
7．暗灰褐色土　鉄斑を含み、粘性強。
8．灰褐色土　多量の鉄斑、少量の炭化物を含む。しまり強、粘性強。
9．暗灰褐色土　ロームブロックを多量に含む。しまり弱、粘性強。
10．暗灰褐色粘質土　炭化物を少量含む。しまり弱、目が細かく粘性強。
11．灰褐色粘質土　目の細かい粘質土。炭化物を少量含み、しまり弱。
12．暗灰褐色粘質土　極く目の細かい粘質土で、しまり弱。
13．暗緑褐色粘質土　鉄斑を少量含み、しまり強。

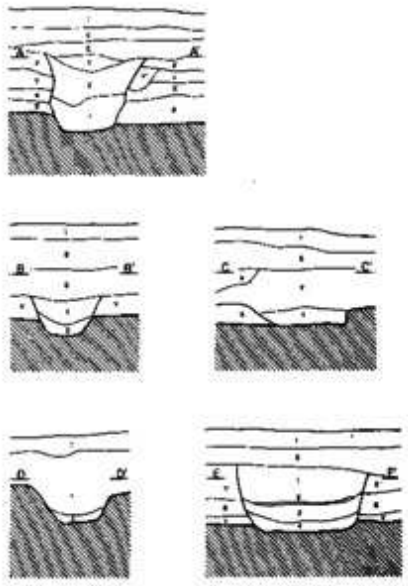
第26号溝（B－B'）

Ⅳ．黒褐色土　Ⅲ層より鉄斑を少なくマンガン粒を多量に含む。
1．暗灰褐色土　少量の炭化物、焼土を含む。
2．灰褐色土　鉄斑、マンガン、少量の炭化物を含み、しまり弱。
3．暗灰褐色粘質土　鉄斑、マンガン、少量の炭化物を含み、しまり弱。
4．暗灰褐色粘質土　3層と同じで、目の粗い砂を多量含む。しまり弱。
5．灰褐色粘質土　目の細かい砂を少量含む。しまり強。

0　2m

第74図　第22～26号溝跡（L＝23.70ｍ）





基本土層
Ⅰ．暗灰褐色土　耕作土。
Ⅱ．灰褐色土　床土。
Ⅱ'．灰褐色土　黒色味をおびる。
Ⅲ．黄褐色土　ロームブロックを多量含む。
Ⅳ'．灰褐色土
Ⅴ．暗灰褐色土
Ⅴ'．灰褐色土ブロック
Ⅵ．暗茶褐色土　マンガン粒を多量含む。
Ⅶ．灰黒褐色土　ローム土を主体とする。

第28号溝　（A－A'）
1．暗褐色土　ローム粒を少量含む粘質土。
2．暗灰褐色土　炭化物を少量、マンガン粒を多量に含む粘質土。
3．灰黒褐色土　炭化物、ローム粒を少量含む粘質土。

第30号溝　西壁　（B－B'）
1．黒灰色土　炭化物を微量含み、粘性は弱いがしまりは強い。
2．黒褐色土　暗灰褐色土中に灰褐色土ブロックを多量に含む。

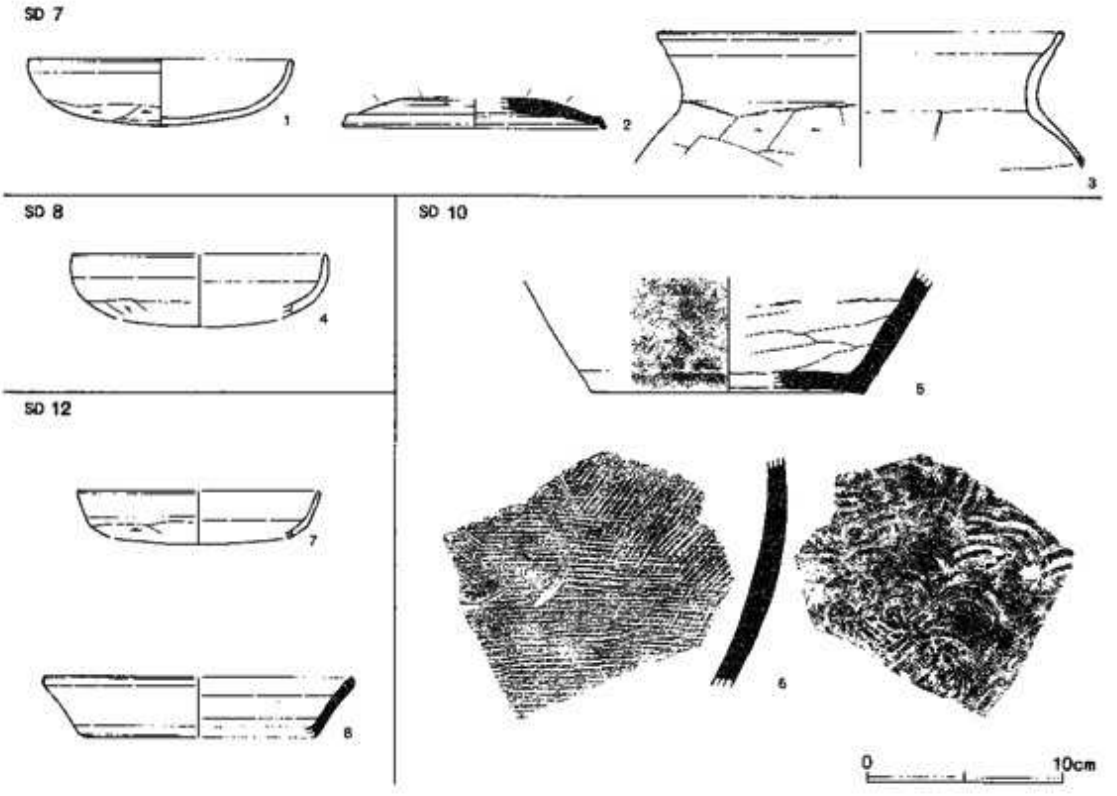
第30号溝　北壁　（C－C'）
1．暗灰褐色土　ローム粒を少量含む。

第32号溝　南壁　（D－D'）
1．暗黄灰褐色土　鉄分、マンガン粒を多量に、炭化物を少量含む。
2．暗灰褐色土　砂粒、炭化物を少量含む。

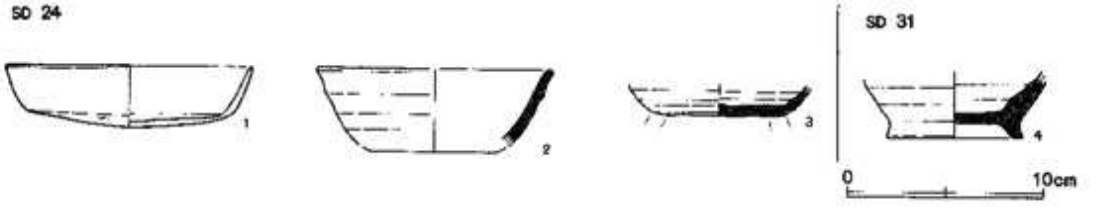
第32号溝　北西端　（E－E'）
1．黒褐色土　黒色の含鉄粒を多量に含む。
2．暗黒褐色土　炭化物を縞状に含む。
3．黒灰色土　砂、炭化物を少量含む。
4．淡緑灰色砂質土　微砂粒を主体とし、混入物をほとんど含まない。

0　2m

第75図　第28～32号溝跡（L＝23.80ｍ）



第76図　第7・8・10・12号溝跡出土遺物



第77図　第24・31号溝跡出土遺物

第1・3号溝跡出土遺物（第68図）

番号	器種	大きさ(cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備　考
1	坏 須恵器	口径　(12.8)	小片のため口径は推定復元。口唇部は短かく外反し、やや肥厚する。	A，B，D　細砂 焼成良好 灰色	10%　残存 (1号溝)
2	坏 須恵器	底径　(7.5)	底部回転糸切り離し未調整。内面屈曲部は明瞭。胎土中に多量の白色針状物質を含む。南比企産。	A，B，F　細砂 焼成良好 灰色	20%　残存 (1号溝)
3	長頸瓶 灰釉	高台径　7.7	底部回転糸切り離し後、高台を貼付する。高台は低く幅広のものである。胴部外面には回転篦削施りをす。内面には淡緑色の釉の付着がみられる。	A，B　細砂少量 焼成良好 灰白色	図示部のみ 残存 (3号溝)

第7・8・10・12号溝跡出土遺物（第76図）

番号	器種	大きさ(cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	坏	口径 13.4 器高 3.4	半球形を呈する体部から緩やかに内湾して口縁部に至る。口縁部外面及び内面横撫で。体部外面篦削り。口縁部外面の一部に黒斑がみられる。	A，B，D 細砂 焼成良好 にぶい橙色	70% 残存 (7号溝)
2	蓋 須恵器	口径 (13.4)	天井部の張りは弱く、鈕を欠損する。天井部外面は回転篦削りを施す。	A，B 細砂少量 焼成良好 灰色	30% 残存 (7号溝)
3	甕	口径 (20.7) 現存高 6.9	張りの強い胴部から「く」の字状に外反して開く口縁部に至る。口唇部内面はわずかに段を作る。胴部外面横方向の篦削り。	A～D 粗砂 焼成普通 橙色	30% 残存 (7号溝)
4	坏	口径 (13.0) 現存高 3.3	平底気味の底部より内湾して立ち上がり口縁部で直立する。口縁部外面及び内面は横撫でを施す。体部外面篦削り。	A，B，D 細砂 焼成良好 にぶい褐色	30% 残存 (8号溝)
5	甕 須恵器	底径 (14.0) 現存高 6.3	底部はわずかに上げ底状を呈する。胴部外面は平行叩き後、丁寧に撫でを施す。内面は丁寧に布撫でを施す。底部内面には降灰がみられる。	A，B 細砂少量 焼成良好 灰色	40% 残存 (10号溝)
6	甕 須恵器		胴部の破片で、外面には平行叩き目、内面には同心円文の当て具痕を残す。焼成堅緻。	A，B 細砂少量 焼成良好 灰色	(10号溝)
7	坏	口径 (12.3) 現存高 2.4	体部は平底気味。口縁部は緩やかに外傾して開く。口縁部外面から内面にかけて横撫で。体部は外面篦削り。	A，B，C 細砂 焼成普通 にぶい橙色	10% 残存 (12号溝)
8	坏 須恵器	口径 (15.8) 底径 (11.4) 器高 3.1	小片のため器形は推定復元。体部は大きく外傾して立ち上がる。全体に器肉が厚い。体部外面には火襷痕がみられる。南比企産。	A，B，F 細砂 焼成良好 灰白色	10% 残存 (12号溝)

第13号溝跡出土遺物（第69図）

番号	器種	大きさ(cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	坏 須恵器	口径 12.0 底径 6.3 器高 3.6	底部は回転糸切り離し未調整。緩やかに内湾して立ち上がる。胎土中には白色針状物質の混入がみられる。南比企産。	A，B，F 細砂 焼成良好 灰色	80% 残存
2	高台椀 緑釉	高台径 (6.6)	高台はわずかに開く、しっかりした作りのもの。ほぼ全面に濃緑色の釉の付着がみられる。	A，B 細砂少量 焼成良好 濃緑色	50% 残存
3	土錘	長さ 3.7 幅 1.0	丁寧に撫でを施す。孔径 5㎜。重さ 4.32g	A，B，C 細砂 焼成良好 にぶい褐色	完存

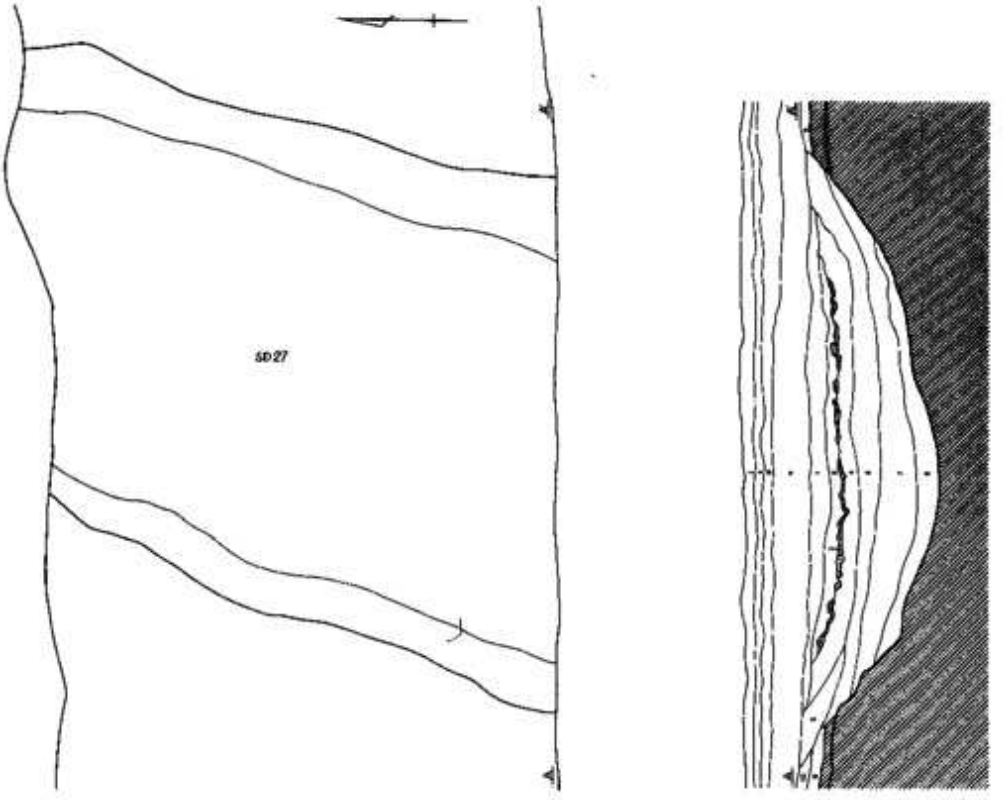
第24・31号溝跡出土遺物（第77図）

番号	器種	大きさ(cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	坏	口径 12.5 器高 3.1	平底気味の底部より、口縁部は外傾して立ち上がる。磨滅が著しく、細部の調整は不明瞭。底部外面に篦削りを施す。	A，B，D 細砂 焼成普通 橙色	90% 残存 (24号溝)

番号	器種	大きさ(cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備　考
2	坏 須恵器	口径　(12.0)	体部は緩やかに外傾して立ち上がる。全体に器肉が厚く、胎土中に石英・長石の小礫を混入する。	A，B　小礫 焼成やや不良 灰白色	20%　残存 (24号溝)
3	坏 須恵器	底径　6.8	底部は回転糸切り離し後、周辺部に回転篦削りを施す。	A，B　細砂多量 焼成良好 灰白色	60%　残存 (24号溝)
4	瓶 須恵器	高台径　(6.8)	小片のため全体の器形は不明。高台は「ハ」の字状に開く。	A，B　粗砂 焼成良好 灰色	20%　残存 (31号溝)

第27号溝跡（第78図）

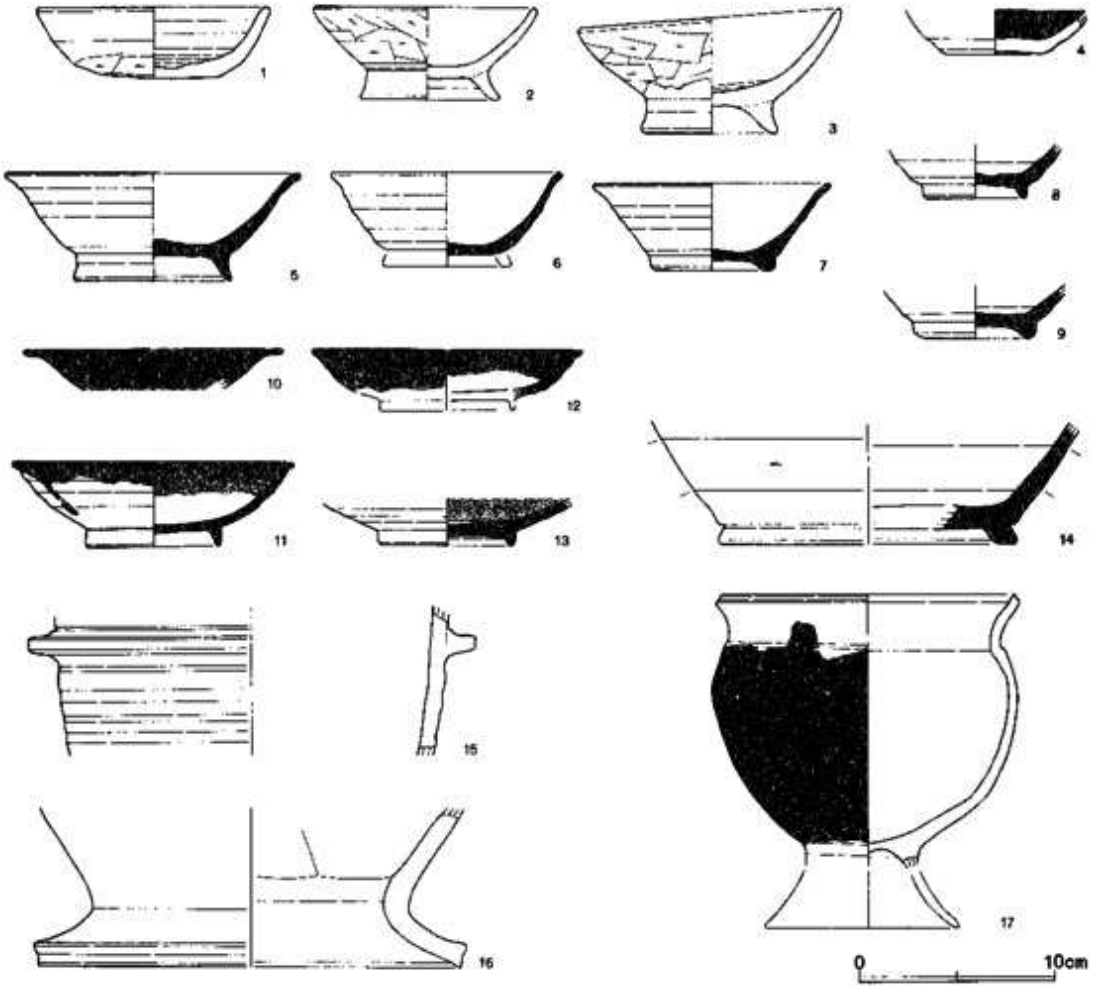
調査区西側、88・89－96グリッドに位置する南北に走る大溝である。土層断面部分の規模は幅6.3m、深さ1.3mを測る。覆土第3層に12世紀初頭の浅間B火山灰（天仁元年 1108年）が薄く堆積する。遺物は火山灰層下から10世紀前半の土師器、須恵器、灰釉・緑釉陶器等が出土している。



Ⅰ．暗黄褐色土　耕作土。
Ⅱ．黄褐色土　白色スコリアを多量に含む。(床土)
Ⅲ．黒褐色土　鉄滓、マンガン粒を多量に含む。
Ⅳ．暗黒褐色土　焼土、炭化物を少量含む。
1．灰褐色土　鉄滓を主体とし、ローム粒、炭化物を少量含む。
2．暗灰褐色土　ロームブロックと炭化物の互層。
3．黒紫色砂層　目の粗い砂がうすく堆積。ロームブロックを極く少量含む。
4．暗灰褐色粘質土　ロームブロックと炭化物の互層。
5．淡灰褐色土　鉄滓、炭化物を少量含む。
6．灰褐色粘質土　鉄滓、炭化物を少量含む。
7．暗灰褐色粘質土　還元されたロームブロックを多量に含み、粘性強。
8．暗青灰色粘質土　還元されたロームブロックを少量含み、粘性強。
9．暗灰褐色土　少量の炭化物、焼土を含む。
10．ロームブロック

0　2m

第78図　第27号溝跡（L＝23.70ｍ）



第79図　第27号溝跡出土遺物

第27号溝跡出土遺物（第79図）

番号	器種	大きさ(cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	坏	口径 11.8 底径 6.1 器高 3.6	体部は平底の底部より緩やかに内湾して立ち上がる。全体に器肉は厚い。底部外面及び体部下端に篦削りを施す。ロクロ整形。酸化焔焼成。	A～D 細砂多量 焼成普通 にぶい褐色	完存
2	高台椀	口径 11.2 高台径 7.0 器高 4.7	体部は緩やかに内湾して立ち上がる。高台は「ハ」の字状に大きく開く。体部外面篦削り。内面及び高台部横撫で。	A～D 細砂多量 焼成良好 淡黄色	80% 残存
3	高台椀	口径 13.3 高台径 6.6 器高 6.4	体部は緩やかに内湾して立ち上がる。高台は「ハ」の字状に大きく開く足高のものである。体部外面篦削り。内面及び高台部横撫で。	A，B，C 細砂 焼成良好 淡黄色	80% 残存
4	坏 黒色 土器	底径 4.9	やや上げ底気味の底部より内湾して立ち上がる。内面は黒色処理され入念に篦磨きを施す。	A，B，D 細砂 焼成普通 灰褐色	図示部のみ残存

番号	器種	大きさ(cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
5	高台椀 須恵器	口径 (15.0) 高台径 (8.0) 器高 5.5	体部は緩やかに内湾して立ち上がり、口縁部で強く外反する。口唇部は玉縁状に肥厚する。高台はわずかに開き、端部は薄くなり尖る。	A，B 小礫 焼成やや不良 灰白色	40% 残存
6	高台椀 須恵器	口径 (11.7) 現存高 4.2	高台が剝離している。体部は緩やかに外傾して立ち上がり、口縁部で短かく外反する。口唇部は玉縁状に肥厚する。	A，B，C 細砂 焼成やや不良 にぶい橙色	40% 残存
7	高台椀 須恵器	口径 (12.0) 高台径 (6.2) 器高 4.4	底部回転糸切り離し後、高台を貼付。体部は直線的に外傾して立ち上がり、口縁部で短かく外反する。口唇部は玉縁状に肥厚する。高台は低い幅広のものである。	A，B，E 細砂 焼成やや不良 暗灰色	60% 残存
8	高台椀 須恵器	高台径 5.1	底部回転糸切り離し後、高台を貼付。高台は小さく断面三角形状に近い。酸化焔焼成。	A，B，D 細砂 焼成やや不良 にぶい赤褐色	60% 残存
9	高台椀 須恵器	高台径 6.2	高台は短かく幅広の作り。器壁は全体に磨滅している。	A～D 細砂多量 焼成やや不良 にぶい褐色	図示部のみ残存
10	皿 緑釉	口径 (13.0)	体部は大きく外傾して開き、口縁部で強く外反しほぼ水平になる。口唇部は薄く丸くおさめる。内外面とも、濃緑色の釉が付着し光沢をおびる。	A，B 細砂少量 焼成良好 濃緑色	10% 残存
11	皿 灰釉	口径 14.2 高台径 6.7 器高 4.3	底部回転糸切り離し後、高台を貼付する。体部は緩やかに内湾して立ち上がり、口縁部で短かく外反する。高台はあまり開かずに直立し、断面三日月形を呈する。釉は漬け掛けされ、内面底部周辺は斑状に付着する。	A，B 細砂少量 焼成良好 褐灰色	90% 残存
12	皿 灰釉	口径 13.8	高台部分を欠損する。体部は緩やかに内湾して立ち上がり、口縁部で短かく外反する。釉は漬け掛けされる。	A，B 細砂少量 焼成良好 灰白色	40% 残存
13	皿 灰釉	高台径 6.7	底部回転糸切り離し後、高台を貼付する。高台は断面三日月形。内面に淡緑色の灰釉が付着する。	A，B 細砂少量 焼成良好 褐灰色	50% 残存
14	瓶 須恵器	高台径 (15.1) 現存高 6.2	高台は幅広くしっかりした作り。胴部外面に箆削りを施す。内面は丁寧に撫でを施す。	A，B 細砂少量 焼成良好 灰白色	30% 残存
15	羽釜	鍔径 23.0	小片のため全体の器形は不明。鍔は断面矩形を呈し、高さ 1.5cmを測る。	A，B 粗砂 焼成普通 灰白色	20% 残存
16	甑	底径 (21.6) 現存高 8.1	胴部下端は大きく「ハ」の字状に屈曲して開く。裾部側面は浅く凹み、わずかにつまみ出される。全体に磨滅が著しく調整は不明瞭。	A，B，C 粗砂 焼成普通 淡黄色	30% 残存
17	台付甕	口径 15.0 最大径 15.6 現存高 13.8	口縁部は緩やかに外反して開き、口唇端部側面に凹線を巡らす。胴部外面には厚く煤が付着する。口縁部内外面とも横撫で。胴部外面上半は横方向の箆削り、下半は縦方向の箆削りを施す。	A，B，D 細砂 焼成普通 にぶい褐色	80% 残存

c．井戸跡（SE）

井戸跡は、調査区東側の102－96グリッドに位置する第１号井戸跡（第70図）の１基が検出されだけである。湧水により壁面が崩落する危険性があったため、底面まで完掘することはできなかった。平面形は楕円形を呈し、直径2.8m前後である。断面形は漏斗状を呈し、確認面からの深さは1.6mを測る。遺物は、底面及び体部外面に篦削りを施した平底の土師器坏が出土している。

第80図　第１号井戸跡出土遺物

第１号井戸跡出土遺物（第80図）

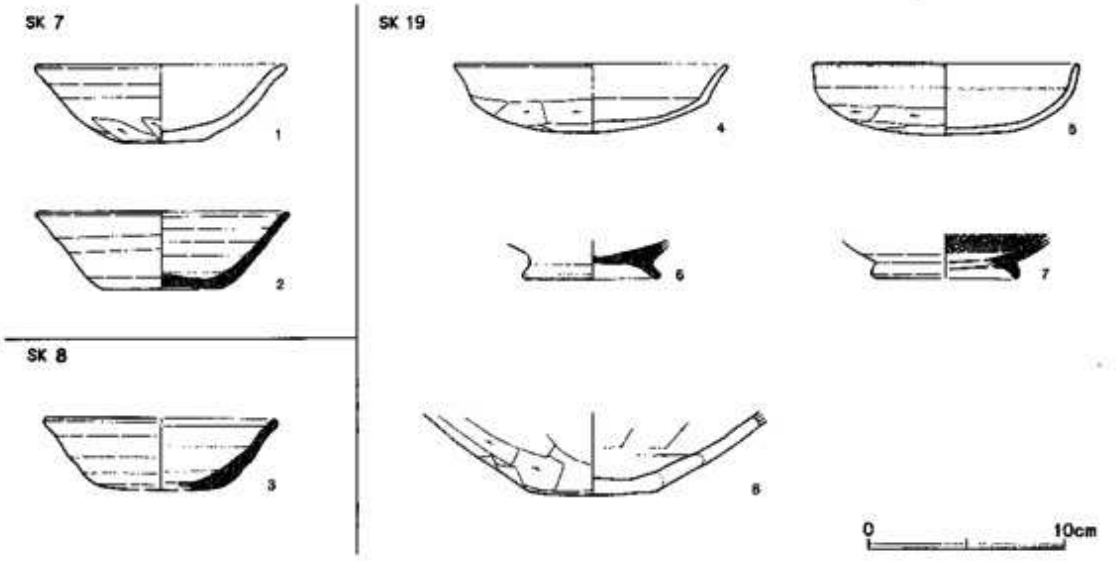
番号	器種	大きさ(cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備　考
1	坏	口径　11.7 底径　5.6 器高　4.0	平底の底部から直線的に外傾して立ち上がる。全体に器肉が厚い。底部及び体部外面を篦削り。内面は撫でを施す。	A，B，D　粗砂 焼成普通 灰白色	90%　残存
2	甕 須恵器		口縁部は上下方に張り出す円帯を巡らす。口唇部内面に段を作り出す。南比企産。	A，B，F　細砂 焼成良好 にぶい赤褐色	
3	甕 須恵器	底径　(22.0)	小片のため器形は推定復元。胴部外面は降灰のためざらつく。内面には粘土紐積み上げ痕が残る。	A，B　粗砂 焼成良好 灰色	20%　残存

d．土　壙（SK）

土壙は全部で19基確認されている。平面形は、直径１m前後の円形を呈するものが多く、他には第６・７号土壙のような長軸４mほどの長方形を呈するものがみられる。

調査区中央部に位置する第７・８・19号土壙（第72図）は、それぞれ形態は異なるが、覆土中に多量の炭化物や焼土粒を含み、骨片が出土していることから、墓壙としての性格をもつ可能性が高い。出土遺物の時期は、８世紀後半から９世紀前半に位置づけられる。

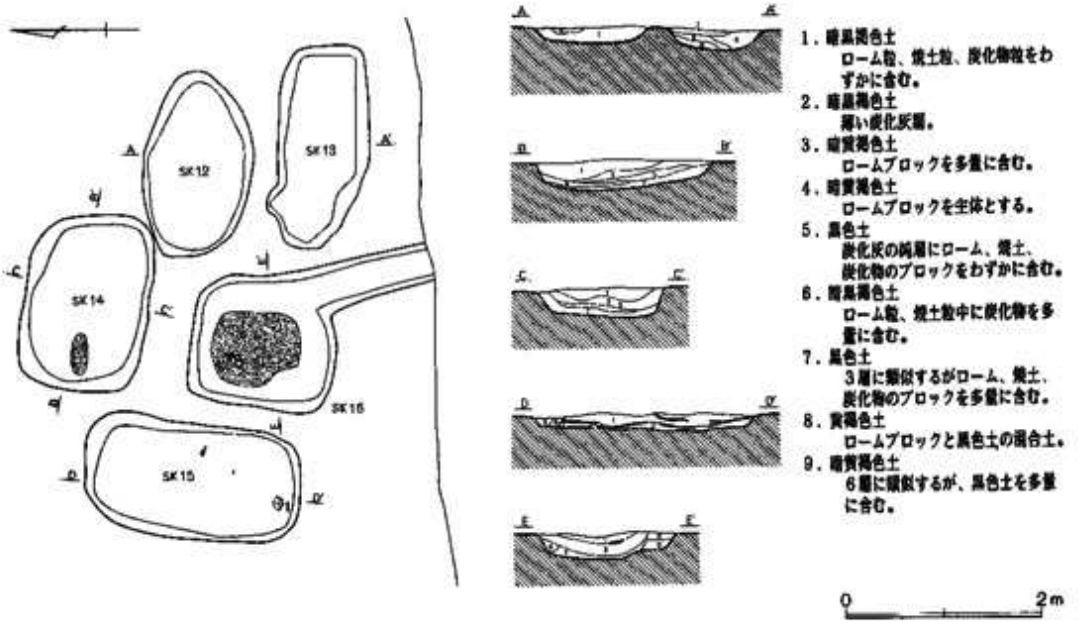
調査区西側に位置する第12～16号土壙（第82図）は、狭い範囲に接するように掘り込まれ、計画性の高い位置関係を示す。平面形は長方形を基調とし、長軸1.5～2.0m、短軸1.0～1.3mを測る。主軸方向は、第12～14号土壙が東西方向、第15・16号土壙が南北方向を指す。いずれも覆土中には炭化物・焼土粒を多量に含む。特に第16号土壙では底面に炭化物の付着がみられた。この５基の土壙は、少量の骨片を出土していることや形態・規模・配置から墓壙としての性格をもつものと考えられる。出土遺物には時期差がみられ、累代的に営まれた小規模な墓域と推測される。



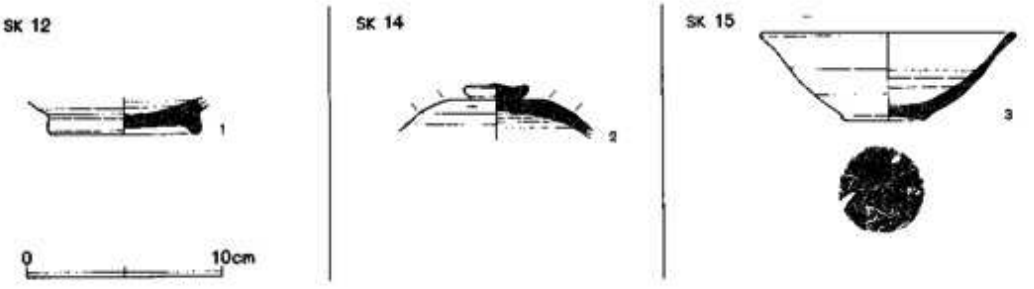
第81図　第７・８・19号土壙出土遺物

第７・８・19号土壙出土遺物（第81図）

番号	器種	大きさ(cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備　考
1	坏	口径　12.6 底径　4.4 器高　4.0	底部は底径が小さく平底状を呈する。体部は緩やかに内湾して立ち上がり、口縁部で短かく外反する。全体に器肉が厚い。底部及び体部下端に篦削りを施す。	A，B，D　細砂 焼成やや不良 にぶい橙色	60%　残存 (7号土壙)
2	坏 須恵器	口径　12.8 底径　5.8 器高　3.9	全体に磨滅が著しく底部調整不明。やや上げ底気味の底部から、体部は直線的に外傾して立ち上がる。	A，B　細砂多量 焼成普通 灰色	90%　残存 (7号土壙)
3	坏 須恵器	口径　(11.8) 底径　(6.4) 器高　3.6	全体に磨滅が著しく、底部調整は不明。体部は外傾して立ち上がり、口縁部で短かく外反する。全体に器肉が厚い。ロクロ整形。酸化焔焼成。	A～D　細砂多量 焼成やや不良 橙色	40%　残存 (8号土壙)
4	坏	口径　13.8 器高　3.5	体部はやや扁平な半球形を呈し、口縁部との境に稜をもつ。口縁部は外反して開く。口縁部外面及び内面に横撫でを施す。体部外面篦削り。	A，B，D　細砂 焼成普通 にぶい橙色	60%　残存 (19号土壙)
5	坏	口径　13.4 器高　3.6	口縁部と体部の境の不明瞭な丸底を呈する坏。体部はやや扁平で、口縁部はほぼ直立する。口縁部外面及び内面に横撫でを施す。体部外面に篦削りを施す。	A，B，D　細砂 焼成良好 にぶい褐色	70%　残存 (19号土壙)
6	高台椀 須恵器	高台径　6.8	全体に磨滅が著しく、細部の調整は不明瞭。高台は低く「ハ」の字状に大きく開く。端部は丸くおさめる。ロクロ整形。酸化焔焼成。	A，B　細砂多量 焼成やや不良 にぶい褐色	図示部のみ 残存 (19号土壙)
7	皿 灰釉	高台径　(7.2)	小片のため全体の器形は不明。高台は断面三日月形を呈する。内面には斑状に灰釉が付着する。	A，B　細砂少量 焼成良好 灰白色	20%　残存 (19号土壙)
8	甕	底径　6.5	底部は小さな平底で、胴部は球形になるものと考えられる。底部及び胴部外面篦削り。内面は全面に炭化物が付着する。	A～D　粗砂 焼成良好 灰褐色	80%　残存 (19号土壙)



第82図　第12～16号土壙（L＝23.70ｍ）

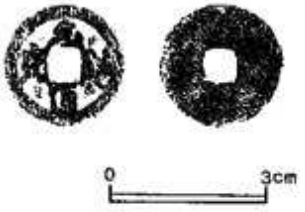


第83図　第12・14・15号土壙出土遺物

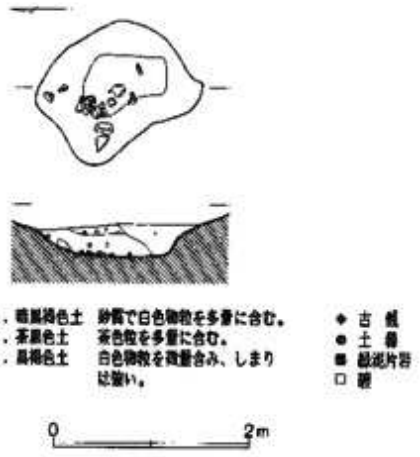
第12・14・15号土壙出土遺物（第83図）

番号	器種	大きさ(cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備　考
1	瓶 灰釉	高台径　7.5	小片のため全体の器形は不明。底部回転糸切り離し後、高台を貼付する。高台は幅広くしっかりした作り。内面には部分的に灰釉が付着する。	A、B　細砂少量 焼成良好 灰白色	50%　残存 (12号土壙)
2	蓋 須恵器	鈕径　3.3	偏平な擬宝珠形の鈕が付く。天井部の張りは大きく、頂部外面に回転篦削りを施す。南比企産。	A、B、F　細砂 焼成良好 灰白色	40%　残存 (14号土壙)
3	坏 須恵器	口径　12.8 底径　4.2 器高　4.5	底部は回転糸切り離し未調整で、底径が極端に小さい。体部は内湾して立ち上がり、口縁部で外反する。口唇部は玉縁状に肥厚する。ロクロ整形。酸化焔焼成。	A～D　細砂多量 焼成良好 橙色	70%　残存 (15号土壙)

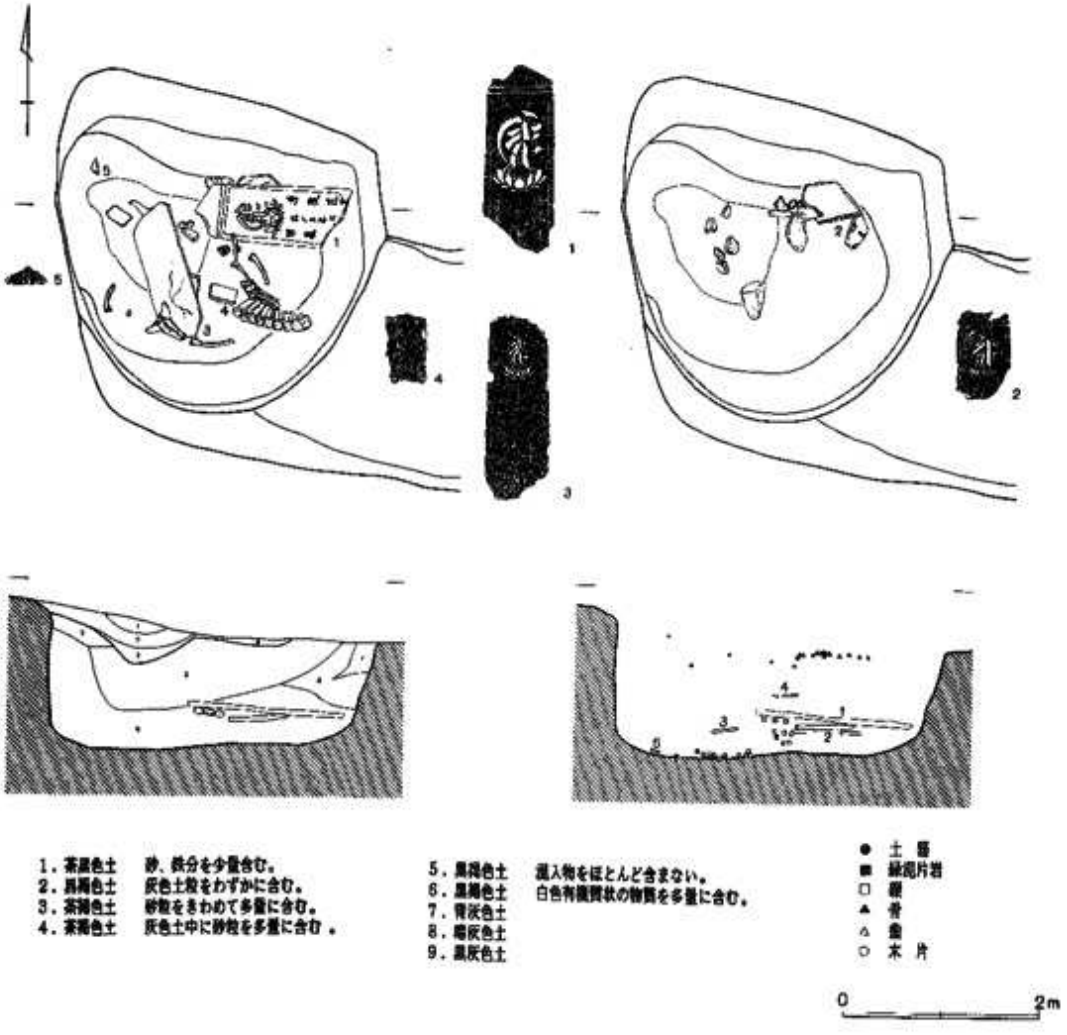
検出された土壙の中で中世に位置づけられるものとしては、北宋銭を出土した第17号土壙と、板石塔婆、馬骨を出土した第18号土壙があげられる。他には馬歯を出土した第５号土壙が、覆土の状態などから該期に位置づけられる可能性が強い。



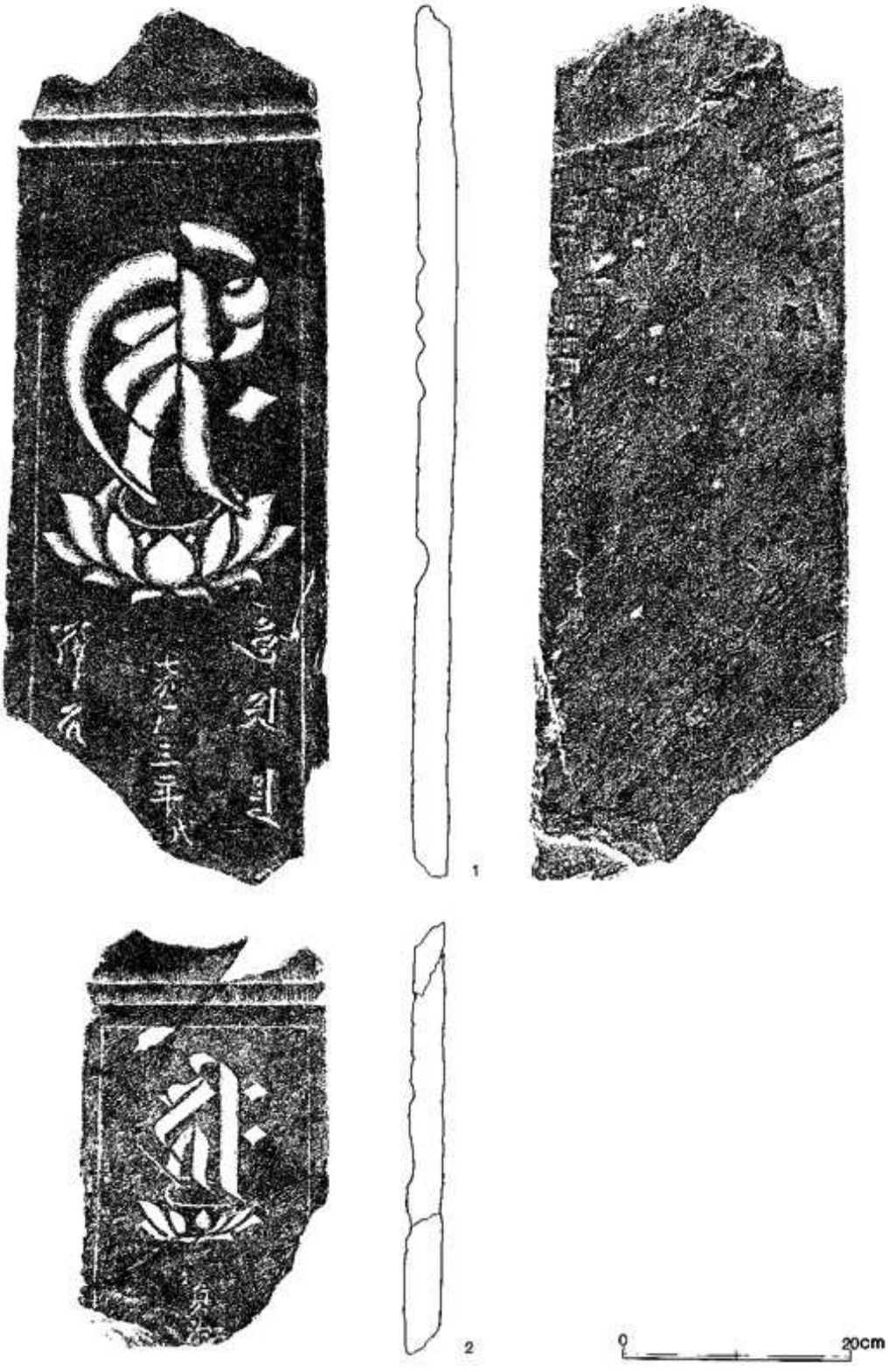
第84図　第17号土壙　古銭



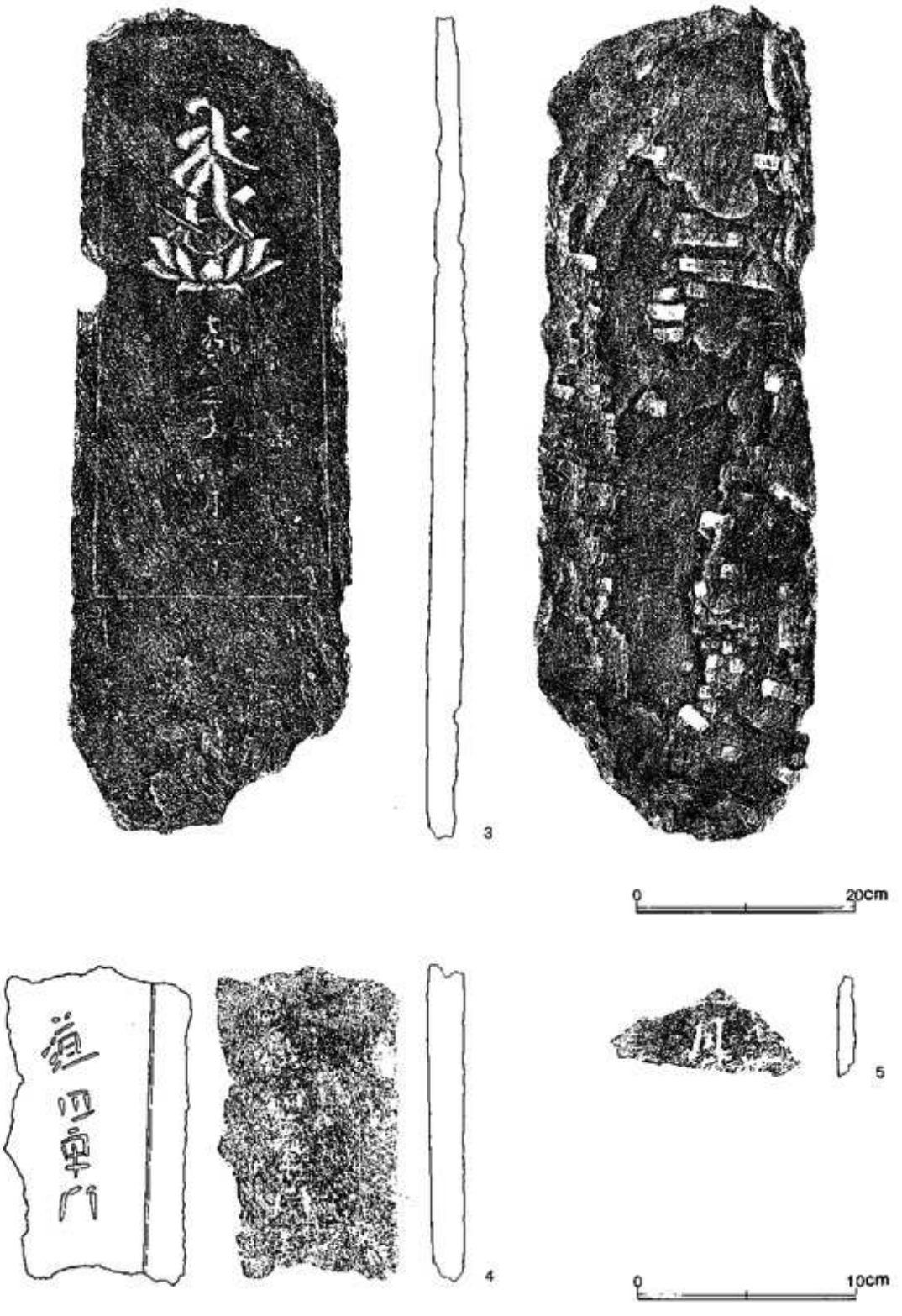
第85図　第17号土壙（Ｌ＝22.80ｍ）



第86図　第18号土壙（Ｌ＝23.00ｍ）



第87図　第18号土壙出土板石塔婆(1)



第88図　第18号土壙出土板石塔婆(2)

第18号土壙出土板石塔婆（第87・88図）

番号	大きさ	(cm)	特　　徴
1	現存長	81.5	山形の一部と身部の下半を欠損する。二条線及び枠線は明瞭に残る。枠線は現存長 55.7cm、上幅 22.5cm。種子は阿弥陀如来一尊である。種子及び蓮座は薬研彫り。真言は阿弥陀心呪である。紀年銘は「嘉暦三年戊 辰 」(1328年)。裏面には整形時の工具痕が明瞭に残る。
	上　幅	27.2	
	下　幅	28.8	
	厚　さ	3.3	
2	現存長	39.0	山形部分と身部の下半を欠損し、三つに割れている。二条線及び枠線は明瞭に残る。枠線の上幅は18.3cm。種子は阿弥陀如来一尊である。種子及び蓮座は薬研彫り。紀年銘は貞治（1362～1368年）のみが残る。
	上　幅	21.6	
	厚　さ	3.0	
3	現存長	77.2	山形及び基部を欠損し、二条線を部分的に残す。枠線は磨滅のためやや不明瞭である。枠線は長さ 51.5cm、上幅 20.0cm、下幅 21.9cm。種子は阿弥陀如来一尊である。種子及び蓮座は薬研彫り。紀年銘は「嘉暦三年八月八日」(1328年) で他に銘文はみられない。裏面は整形時の工具痕が明瞭に残る。
	上　幅	23.9	
	下　幅	26.6	
	厚　さ	3.1	
4	現存長	14.4	身部の破片。枠線の一部と「道田禅門」の銘文がみられ、金泥が部分的に残る。
	厚　さ	1.7	
5	現存長	4.6	身部の小破片。銘文は月と草冠のみが残る。裏面は剝離している。
	厚　さ	(0.6)	

第17号土壙（第85図）

調査区西側90－96グリッドに位置し、第25・26号溝跡と重複する。長軸1.4m、短軸1.2 mほどの不整形を呈する土壙である。緑泥片岩や河原石とともに、底面から元祐通宝（初鋳年 北宋・1086年）が出土している。また覆土中には土師器、須恵器片が少量混入していた。

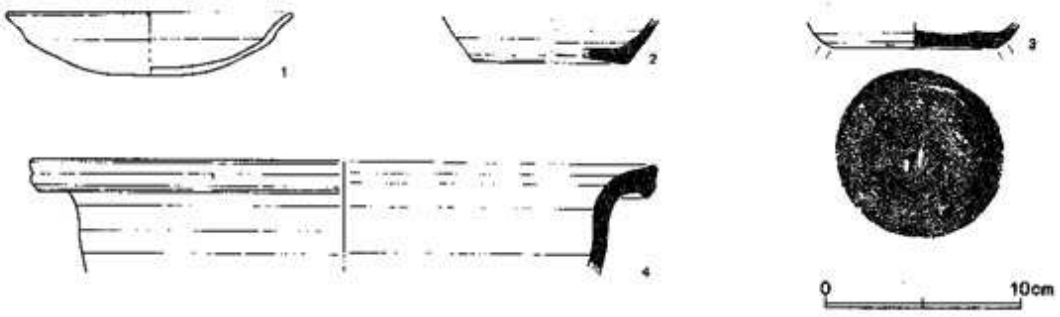
第18号土壙（第86図）

第17号土壙に近接する89－96グリッドに位置し、長軸1.68m、短軸1.52mの不整形を呈する。上面が第26号溝跡に削平されているため、70cmほどの深さしか確認されなかった。しかし、旧地表面からの深さは1.5mを越しており、井戸跡となる可能性も残されている。遺物は、拳大の河原石や緑泥片岩片とともに馬骨と板石塔婆が出土した。馬骨は土壙上面から検出されている。比較的まとまって出土していることから埋葬されたものと推定される。出土した部位は、上顎臼歯、仙骨、腰椎、胸椎などである。臼歯の咬耗度や各部位の計測値から年令の高い、中型の馬と推定される。

板石塔婆は破片を含め５点出土している。いずれも馬骨の下位からの出土である。１は表面を上に向けてほぼ水平に置かれた状態で、２はその下に重なって出土した。３は裏面を上に向けて出土している。両者の同時性は明確ではないが、板石塔婆の廃棄行為に伴う埋葬の可能性が高い。

e．グリッド出土遺物

調査区東側を中心に古代の包含層が20～30cmの厚さで堆積していた。基本土層第III層に相当し、旧表土層と推定される。遺物の出土量は全体的に少なく、土師器坏、底部全面篦削りの須恵器坏などが出土しただけである。



第89図　グリッド出土遺物

グリッド出土遺物（第89図）

番号	器種	大きさ(cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	坏	口径 (14.4) 器高 3.2	口縁部と体部の境にわずかに稜をもつ。口縁部は大きく外反して開く。体部はやや扁平な半球形を呈する。全体に磨滅が著しく、細部の調整は不明瞭。	A，B，C 細砂 焼成普通 にぶい橙色	30% 残存
2	坏 須恵器	底径 (7.9)	底部回転糸切り離し未調整。体部は直線的に外傾して立ち上がる。南比企産。	A，B，F 細砂 焼成良好 灰白色	30% 残存
3	坏 須恵器	底径 8.4	底部全面及び体部下端に回転箆削りを施す。	A，B 細砂少量 焼成良好 灰色	図示部のみ残存
4	鉢 須恵器	口径 (32.0)	小片のため口径は推定復元。口縁部は大きく屈曲し、ほぼ水平となり、上下方に突出する円帯を作り出す。南比企産。	A，B，F 細砂 焼成普通 灰白色	20% 残存

土壙一覧表

番号	位置:東西	南北	規模（長×短×深）m	長軸方位	形態	挿図番号	備考
1	108	95	1.46×0.44×0.12	N	(円形)	第 66 図	1号溝と重複
2	106	95	0.90× － ×0.14	N	(円形)	第 67 図	4号溝と重複
3	106	95	1.65×0.95×0.06	N	(楕円形)	第 67 図	1号掘立と重複
4	103	95	1.24×0.80×0.10	N－ 14°－E	楕円形	第 73 図	
5	102	95	1.30×1.10×0.50	N－ 58°－E	楕円形	第 70 図	馬歯
6	101	96	3.00×1.90×0.25	N	長方形	第 71 図	
7	98	96	4.84×1.80×0.12	N－ 80°－E	楕円形	第 72 図	土器
8	98	95	0.74×0.88×0.24	N－ 11°－W	(長方形)	第 72 図	
9	98	96	0.90× － ×0.10	N	円形	第 72 図	
10	98	96	1.10× － ×0.06	N	円形	第 72 図	
11	98	96	1.00× － ×0.30	N	円形	第 72 図	
12	91	96	1.90×1.10×0.16	N－ 93°－E	楕円形	第 82 図	24号溝と重複
13	91	96	2.10×0.94×0.20	N－100°－E	長方形	第 82 図	
14	91	96	1.84×1.30×0.30	N－103°－E	長方形	第 82 図	24号溝と重複
15	91	96	1.20×1.20×0.18	N－ 7°－E	長方形	第 82 図	22号溝と重複、骨片・土器
16	91	96	1.50×1.34×0.24	N－ 7°－E	方形	第 82 図	土器
17	90	96	1.40×1.20×0.32	N－ 40°－W	不整形	第 85 図	25・26号溝と重複、古銭
18	89	96	1.68×1.52×0.70	N－ 90°－W	不整形	第 86 図	26号溝と重複、板碑・馬骨
19	99	95	1.50×1.10×0.16	N	(方形)	第 72 図	14号溝と重複、土器

V. 結　語

今回の北島遺跡の調査では、第12地点から古墳時代前期の集落跡が、また第13地点から奈良・平安時代の掘立柱建物跡群や板石塔婆を伴う中世土壙などの多数の遺構・遺物が検出され大きな成果をあげることができた。ここでは、今までの調査では検出例の少なかった、第12地点で確認された古墳時代前期の遺構・遺物についてまとめてみたい。

北島遺跡第12地点の調査では、古墳時代前期の住居跡20軒と溝跡１条が検出されている。しかし、検出された住居跡の中には第10・13・17・20号住居跡のように遺物がほとんどなく、住居形態や重複関係などから当該期と判断したものも少なからず認められる。

住居跡の分布状況をみると、南北に長い調査区の北側と南側の二箇所に大きく分かれて分布している。調査範囲に制約があるため旧地形を復元することは難しいが、浅い埋没谷を挟んだ自然堤防上を選んで占地しているものと考えられる。検出された住居跡の中には重複関係のみられるものが多く、数時期にわたって集落が継続的に営まれていたものと想定される。

住居の形態については全容の判明したものが少ないため明確ではないが、正方形プランの住居が主体を占め、地床炉をもつものが多い。柱穴が検出されたのは第14号住居跡のみで全体に明確ではなく、貯蔵穴についても第２・３号住居跡でコーナー寄りの位置から検出されたものが知られているにすぎない。注目される住居形態の特徴としては、第19号住居跡に付属する第125号土壙が住居外に張り出すように構築されていた点があげられる。なお、第７・８・19号住居跡の３軒は、覆土の状態や床面に多量の炭化灰・焼土が広く分布していることから焼失住居と推定される。

出土遺物は量的に少ないが、第２・３・７号住居跡等で壺、小型壺、坩、高坏、器台、浅鉢、甕、台付甕などの良好なセットが検出されている。そこで、これらの住居跡を中心として出土遺物の時期的な位置づけについて検討したい。

まず、第７号住居跡からは、在地系の複合口縁壺と、大きく外傾して開く坏部に円錐形の脚部をもつ東海系の高坏が出土しており注目される。このタイプの高坏は、東海地方西部の元屋敷中段階の特徴を示すものであるが、坏部が浅くなり脚部の短脚化がみられることから在地における変容がうかがわれる。第８号住居跡からは坏部外面に稜を有し、脚部が大きく裾広がりになる赤彩された有稜高坏が出土している。今回検出された住居の中ではこの２軒が最も古い一群と考えられる。

第12・19・21号住居跡がこれに後続するものと考えられる。第12号住居跡から出土した単口縁の甕は、坏部のくびれが明瞭で、口縁部が強く外反し、最大径を胴部中位にもつ球胴形のもので胴部外面には刷毛目調整が丁寧に施されている。第19号住居跡からは頸部に断面三角形の突帯を巡らした壺と小型器台が共伴している。第21号住居跡は遺物量が少ないため明確ではないが、半球形の坏部をもつ小型高坏が出土していることからこの段階に位置づけられる。

後続する時期のものとして第３・５・６号住居跡が位置づけられる。第３号住居跡からは小型器台や底部に篦削りを施した坩とともに浅鉢が伴出しており、新しい様相を示している。また共伴したＳ字甕は胴部上半より上を欠損しているが、胴部の張りが大きく、第５号住居跡出土のＳ字甕に

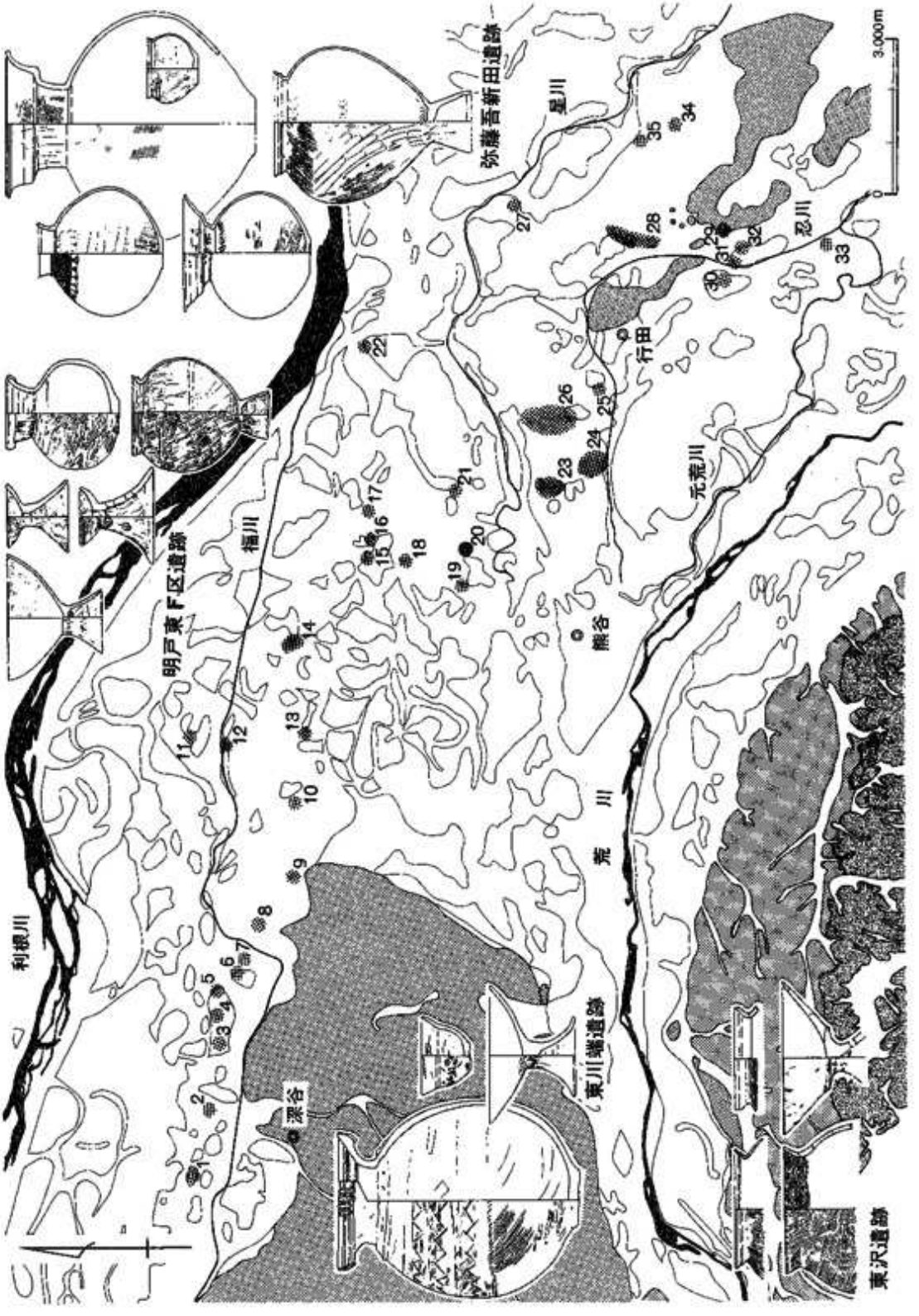
北島遺跡周辺の古墳時代前期の遺跡（第90図）

1．起会遺跡　2．森下遺跡　3．本郷前東遺跡　4．新田長遺跡　5．明戸東F区遺跡　6．宮ケ谷戸遺跡　7．東川端遺跡　8．清水上・根絡遺跡　9．横間栗遺跡　10．東別府条里遺跡　11．弥藤吾新田遺跡　12．上江袋遺跡　13．横塚山古墳下　14．鵜ノ森入船遺跡　15．常光院裏遺跡　16．権現山遺跡　17．雷電塚遺跡　18．女塚古墳群南周辺部　19．天神遺跡　20．北島遺跡　21．東沢遺跡　22．あたご山古墳下　23．池上・池上西遺跡　24．小敷田遺跡　25．星宮皿尾遺跡　26．池守遺跡　27．白鳥田遺跡　28．長野神明遺跡　29．渡柳陣場遺跡　30．高畑遺跡　31．武良内遺跡　32．鴻池遺跡　33．袋・台遺跡　34．小針遺跡　35．愛宕通遺跡

類似する。第5号住居跡からは中・小型品のS字甕が出土している。中型のS字甕は肩部横線を有するもので、胴部の長胴化はさほど顕著ではない。小型のS字甕は口縁部上段が直線的に開き、胴部の刷毛目調整が縦刷毛目を基調とする特徴がみられる。また貫通孔のない小型器台を出土した第6号住居跡も重複関係から第7号住居跡に後出することが確認されており、この段階に位置づけられる。

今回検出された住居跡の中で最も新しい一群として第1・2号住居跡が位置づけられる。第1号住居跡は出土遺物が少なく明確ではないが、和泉期的な底部外面に箆削りを施した小型壺が出土している。また第2号住居跡からは、小型壺、浅鉢、器台、高坏、甕、S字甕などの豊富な器種が出土している。出土した器台は半球形の受部と棒状の柱状部をもつ形骸化したもので、特異な形態を示している。高坏は5個体出土しており、棒状の柱状部をもつものと、坏部外面に段を有し、脚部が屈折して開くものに大きく分けられる。前者は五領III式の標識とされる大宮市下加南遺跡第4号住居跡出土例に後出するものである。後者は次期の和泉期に普遍的となる高坏の祖形と考えられる。甕は胴部に目の粗い刷毛目を施すものと、胴部上半部に撫でを施し、下半部に箆削りを施すものに分けられる。さらに前者は胴部が球形を呈し丸底に近いものと、胴部がやや長胴化し平底を呈するものに区分することができる。S字甕は胴部最大径以下の長胴化が進んだ無花果形を呈し、羽状構成の刷毛目もやや粗雑となり、肩部外面には下地調整の箆削りがみられる。また肩部横線も部分的に施され後出的様相を示す。このように第2号住居跡出土土器には、小型器台の残存や肩部横線を残すS字甕といった古い要素を残しているものの、器種構成に占める浅鉢、高坏、平底甕の割合の高さなど和泉期的な新しい様相がみられ、五領期から和泉期への過渡期的な様相を示す良好な一括資料と言えよう。

最後に、集落の変遷については、全体的に出土量が少なく直接対比できる器種があまりないため住居跡相互の先後関係を明確にすることはできないが、第7・8号住居跡の様相から全体的に南側の一群が古相を示し、第1・2号住居跡の様相から北側の一群が新相を示すものと考えられる。出土土器の様相については、古相とした段階では東海系の高坏、有稜高坏、頸部に突帯をもつ壺など外来系土器の影響がみられ、煮沸具としてのS字甕の伴出率が低く、新相とした段階になりS字甕が煮沸具の主体を占める状況を指摘することができる。



第90図　北島遺跡周辺の古墳時代前期の遺跡

VI. 附　編

1．第12・13地点から出土した木材の樹種

能城修一（森林総合研究所木材利用部）
鈴木三男（金沢大学教養部）

埼玉県熊谷市の北島遺跡第12・13地点から出土した木材８点の樹種同定をおこなった（表・図版１～３）。内訳は、自然木２点、加工材４点、柱材２点であり、時代は古墳時代から平安時代のものとされている。当遺跡においては、第10地点で検出された奈良時代の掘立柱建物跡の柱根５点の樹種を報告したが（鈴木・能城 1989）、今回の報告はこれを補うものである。今回の試料は時代の特定ができていないが、加工木ではクリが３点見いだされたのに対して、それ以外の樹種はいずれも１点ずつであり、自然木２点はいずれもクリであった。この結果を前回のものとあわせて考えると、当遺跡ではクリが多用されていたことを示している。

以下にはそれぞれの樹種の木材解剖学的な記載を記し、同定の根拠を示す。またそれぞれの樹種の顕微鏡写真を図版２・３に示す。同定に用いられた標本は金沢大学教養部生物学教室に保管してある。

１．**スギ**　*Cryptomeria japonica*　(L. f.) D. Don　スギ科

図版２：1a－1c (SOKF－127).　標本：SOKF－127.

年輪界の明瞭な針葉樹材で、垂直・水平樹脂道とも欠く。早材から晩材への移行はやや急。晩材部は数細胞幅で明瞭であり、樹脂細胞が年輪界に並行に散在する。分野壁孔は大型のスギ型で、ほぼ水平の孔口をもち、１分野にふつう２個である。

２．**ヒノキ**　*Chamaecyparis obtusa*　(Sieb. et Zucc.) Endl.　ヒノキ科

図版２：2a－2c (SOKF－126).　標本：SOKF－126.

年輪界の明瞭な針葉樹材で、垂直・水平樹脂道とも欠く。早材から晩材への移行は緩やかで、晩材部は量少ないが明瞭である。樹脂細胞は晩材部内あるいはその付近に、年輪界に平行に散在する。分野壁孔は中型のヒノキ型で、孔口は斜めに開き、１分野にふつう２個である。

３．**クリ**　*Castanea crenata*　Sieb. et Zucc.　ブナ科

図版２：3a－3c (SOKF－122).　標本：SOKF－121, 122, 123, 125, 128.

大型の管孔が年輪のはじめに配列し、晩材部では小型で薄壁の管孔が火炎状に配列する環孔材。道管の穿孔は単一。放射組織は単列同性。

４．**コナラ属アカガシ亜属**　*Qercus*　subgen. *Cyclobalanopsis*　ブナ科

図版３：4a－4c (SOKF－124).　標本：SOKF－124.

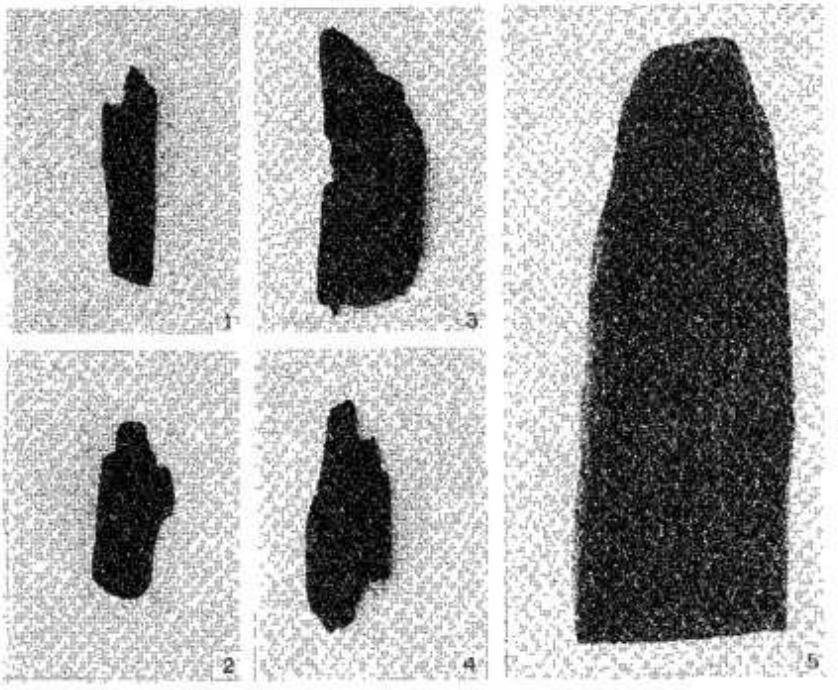
中型でまるい厚壁の管孔が、年輪内であまり径を減ずる事なく、放射方向に配列する放射孔材。道管の穿孔は単一で、木部柔組織はいびつで幅の狭い帯状。放射組織は単列同性の小型のものと、集合状から複合状で大型のものからなる。

引用文献

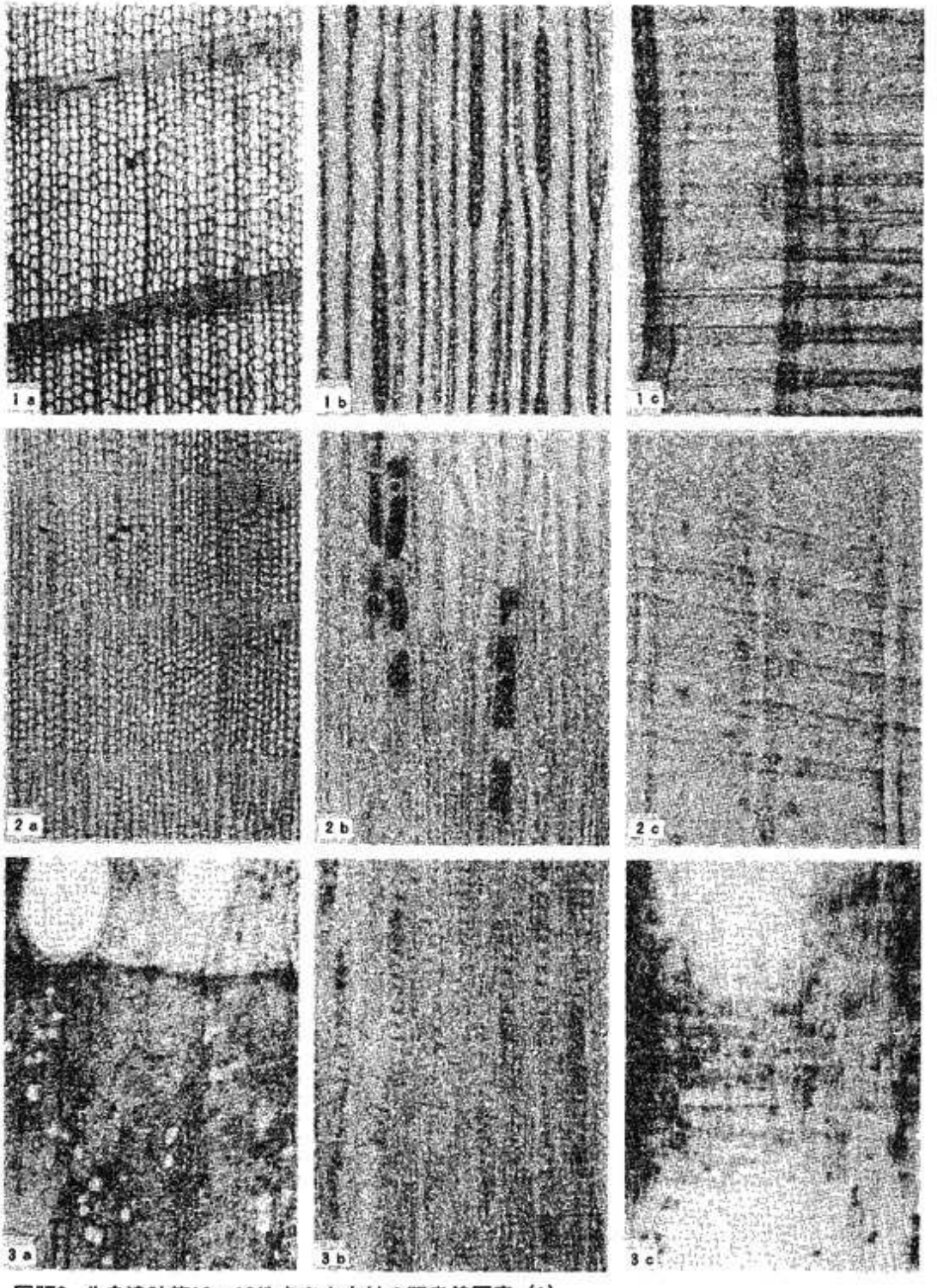
鈴木三男・能城修一.1989. 掘立柱建物検出柱材の樹種. 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第88集.
『北島遺跡(第9・10・11地点)』:148-149.

樹種同定資料一覧表

標本番号	出土地点	出土遺構	樹種	特徴	時期
SOKF-121	第12地点	第2号井戸跡	クリ	自然木	不明
SOKF-122	第12地点	第2号井戸跡	クリ	角材状に加工	不明
SOKF-123	第12地点	第2号井戸跡	クリ	角材状に加工	不明
SOKF-124	第12地点	第2号井戸跡	コナラ属アカガシ亜属	丸材状に加工	不明
SOKF-125	第12地点	第54号土壙	クリ	自然木	不明
SOKF-126	第12地点	第129号土壙	ヒノキ	柱材(割材)	不明
SOKF-127	第12地点	第25号溝跡	スギ	板材状に加工	古墳前期
SOKF-128	第13地点	第1号掘立P2	クリ	柱材	平安時代

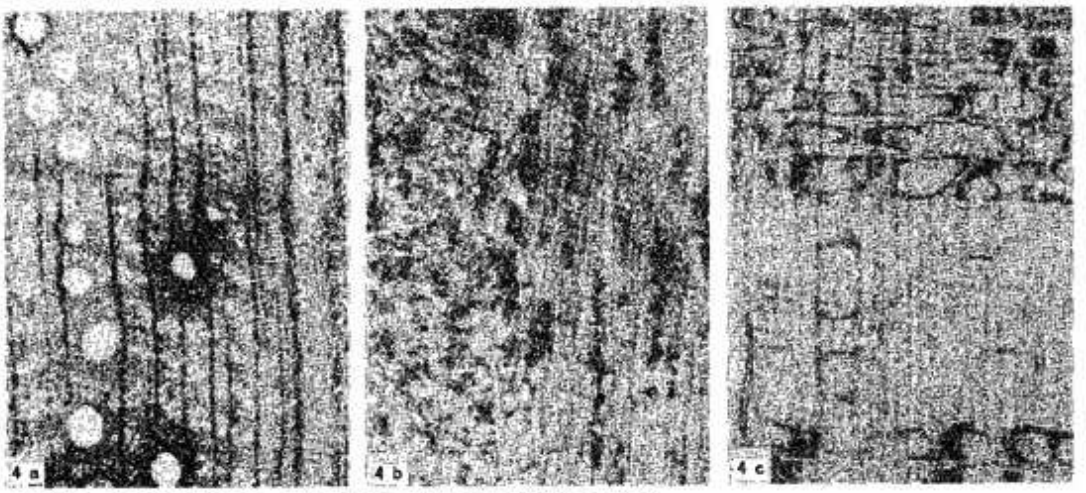


図版1. 樹種同定資料
1 SOKF－123
2 SOKF－124
3 SOKF－127
4 SOKF－128
5 SOKF－126



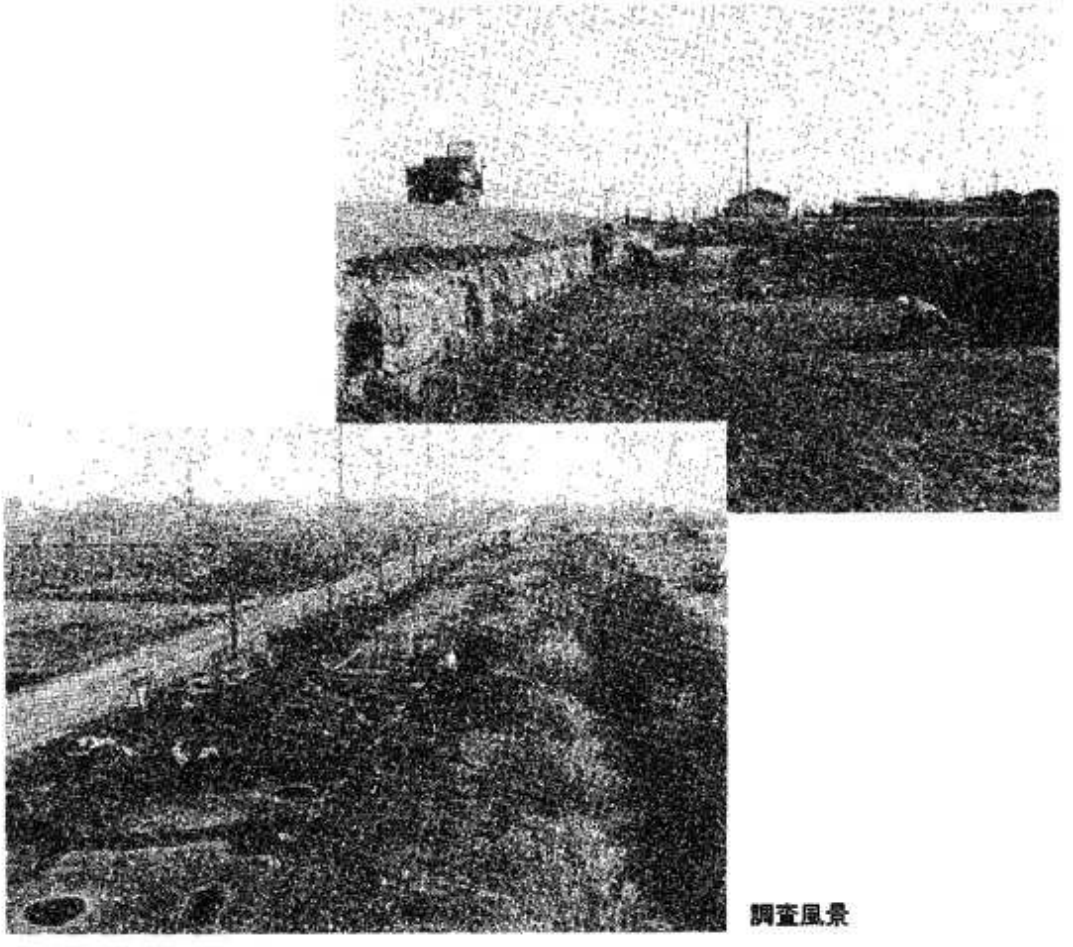
図版2. 北島遺跡第12・13地点出土木材の顕微鏡写真 (1)

1a-1c: スギ(SOKF-127), 2a-2c: ヒノキ(SOKF-126), 3a-3c: クリ(SOKF-122); a: 横断面x40, b: 接線断面x100, c: 放射断面 x400(1,2), x200(3).



図版3. 北島遺跡第12・13地点出土木材の顕微鏡写真 (2)

4a-4c: コナラ属アカガシ亜属(SOKF-124); a: 横断面 x40, b: 接線断面 x100, c: 放射断面 x200.



調査風景

2．第13地点 第26号溝跡出土人骨について

吉田健一（埼玉県立自然史博物館）

近位・遠位の両端を欠く明褐色の大腿骨骨体部で、保存全長270mmである。前面は平滑で軽く凸湾し、後面には、外側にふくらむ殿筋粗面および縦走する隆起（粗線）とその内側には栄養孔が認められ、外側唇・内側唇とこれら両唇に挟まれた三角形の膝窩面が残存する。本資料は、粗線が存在することおよび栄養孔・殿筋粗面の位置から、成人々骨の右側大腿骨に同定される（写真１）。

現代人の大腿骨（東京医科歯科大・解剖学教室所蔵）に比べ、本資料は粗線の発達は弱く、骨体中央部の前後径(24mm)と内外径(23mm)の計測値の差も少なく、骨体全体が前後に扁平である。

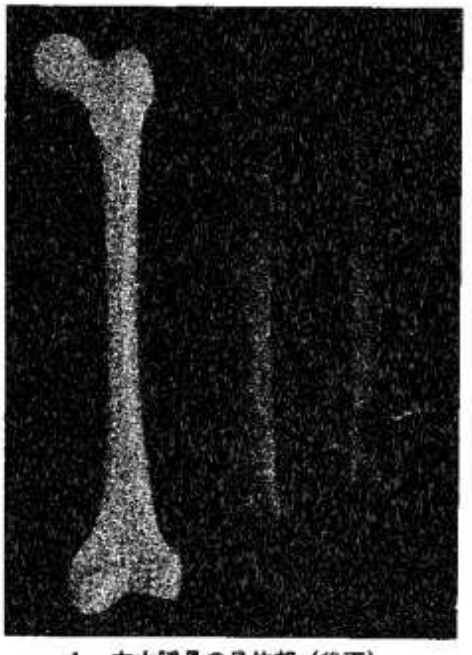
粗線の高まりは男性で顕著であるので、本資料は女性の大腿骨か、あるいは現在と違った生活様式を反映したものと考えられる。なお粗線は、直立歩行による伸筋群の発達と屈筋群付着部の隆起によって、外側唇・内側唇が後面中央部で相接する結果形成される人骨特有のもので(Bass, 1981)、化石猿人が直立歩行していたか否かの決定の参考にされている（寺田・藤田、1982）。

大腿骨体前面の近位1/3には、上方から食い込んだ削剝痕が認められ（写真２）、面の下端は折り取られた形状を呈し、面には弧をえがいた線状の隆起が認められる（図１）。この削剝痕は、骨体の他の表面と差はみられず、発掘時につけられた可能性は少ない。面の隆起は刃物の刃こぼれによるものと考えられ、生前に骨に達する傷を受けたとすれば、大腿部内側に存在する大腿動・静脈からの失血による死も考えられ、本資料の死因につながる可能性のある痕跡といえる。

同じ場所から、骨盤下部の座骨結節の骨片も出土している。

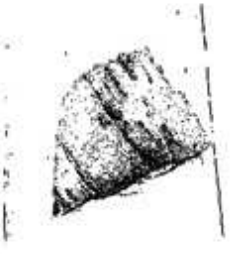
参考文献 Bass, W. M.(1981) HUMAN OSTEOLOGY. Missouri Archaological Soc., (Missouri).

寺田春水・藤田恒夫（1982）骨学実習の手びき。南山堂（東京）。



1　右大腿骨の骨体部（後面）

2　削剝痕（前面）



1 cm

図１　削剝痕のスケッチ